
人喰らう原人

まっちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人喰らう原人

【Nコード】

N4670R

【作者名】

まつちい

【あらすじ】

徳子は大学生になったものの、人を避けて生きていた。

理由は二つ。去年起こった祖母の不審死。

そして、彼氏にいきなり振られたことで人間不信になったのだ。

信じられるのはタダ一人、親友の恵だけ。

ある日、バイト先の映画館で聞いた、最近現れるという人や動物を喰らう男に恐怖を覚える。

まさか自分が遭遇し、仲良くなるだなんてその時は思いもしなかったのだ。

徳子の目の前で猫を喰らう男は、自らを「ジャワ原人」と名乗る。

その意味するところは何か。

大学で再会した、昔よく遊んでくれたお姉ちゃんの存在の女性が抱えている問題とは。

そしてどうして祖母は死ななければならなかったのか。

いくつもの線が、最後にしっかりと結ばれる。

あなたはこの謎に、ついてこられるか。

4月中旬には完結します。

1 晴れか雨か

窓に切り取られた外に見える青空に、桜のピンクが良く映える。ふと外を見てから、宮本徳子はすぐに目を逸らした。心が浮き立つ季節である春も、今の彼女にとってはどうしようもなく目障りなものではない。人生の新しい節目、旅立ち、それがなんのためになるというのだろう。新しいことに心を奪われても、張り切って物事を初めても、全ては終わりに向けて進んでいることに違いはない。この春大学生になったばかりの徳子に友達はまだいない。意図して作っていないというほうが正しいかもしれない。学科中が集まるこの必須科目の授業に、徳子は一人で参加していた。大講堂の一番後ろ、窓側という好ポジションは、ことのほか目立つグループに占められやすい。二百人以上を収容するので、後ろにいくにつれてざわめきが残る。そんな中、なぜ徳子がこの席に座っているのかというと、外が見えるから、それだけだ。この四階の教室は空が近く見える分、地上が遠い。見下ろしているだけで、時間はあっという間に過ぎていく。中庭の芝生では、小さなベンチを囲って数人の男女が笑い合っているのが見えた。ベンチに腰掛ける男の膝の上に、青いミニスカートを穿いた女が一瞬乗っかり、すぐに退ける。窓からは彼らの笑い声がこまで届いた。つい一年ほど前、高校三年で受験を控えていた徳子が抱いていた「大学生」のイメージそのままの姿。だが、この一年で状況は変わった。徳子は、もう誰とも新しい関わりを増やすことなど望んではない。

「ねえ、ちよっと」

前からの声に顔を戻すと、教室中の視線が徳子に向けられている。数メートル以上離れた教壇の上で、マイクを持った男が眉間に皺を寄せているのが微かに見て取れた。文学部なのに白衣を着ているその教授は、還暦を迎えたそうだ。

「指されているよ」

声をかけてきた、こけしのような女が心配そうに呟いた。

「君ですよ。一番後ろの黄色いカーディガンを着ているあなた。『斜陽』は誰の作品か分かりますか」

背広に赤い蝶ネクタイをしめたその禿頭の男に、思わず苦笑いが漏れる。徳子が入学したのは文学部で、過去の作家について聞かれるのは当然だ。だが、あまりにも受験問題のようで、答える気にもなれなかった。それを勘違いしたのか、こけしがノートの隅に『太宰治』と書いてさりげなく寄越す。振り返っていた視線はちらほらと元に戻る。その中に、馬鹿にしたようなものが混じっているのを徳子は見逃さなかった。

「授業中によそ見をしてはいけませんよー」

まるで小学生を叱るような間延びした言い方に、何人かがクスクスと笑う。分からないわけではない。ただ、こんなに離れているのにわざわざ大きな声でその名前を叫ぶことが馬鹿らしく思えただけだ。教授はいい、マイクを使っているのだから。声を枯らして授業をすることも、大きな声を出すのが恥ずかしいなどとは思わないだろう。教授は諦めたのか、すぐに質問を変えてほかの生徒へと話しかけていた。それほど重要な話ではなかったのだ。

「あの人、くだらない質問してくるから面倒くさいよね。私、演習もあいつの取っているんだけどさー」

こけしが、気を許したのかさらに話し掛けてくる。周りに気を遣って小声になることもなく、そして誰かが注意することもない。徳子はそれに答えるつもりもなく、視線を窓の外へ移す。いつのまにか階下ではしゃいでいた男女が姿を消している。まるで、神隠しのように。徳子が入学したここは、東京の真ん中にある女子大だ。それでも周りには共学の大学が点在しており、それらの大学とは協定を結んでいるので交流は多い。協定大学の授業ならば取得も可能であり、サークルもインカレと呼ばれる混合が主なので、作ろうと思えば男女関係なく友達にも困ることはないだろう。あの集団の男女にもカップルがいたのだろう。

「あんたやめなつて。あの人誰にも口聞かないらしいよ。こんな短い間に噂になるんだから相当やばいって」

聞き捨てならないセリフに首を戻すと、こけしの横にいる女の言葉のようだった目があつても、その女はびくりとも動かない。まるで徳子に聞かせているようだった。敵を作ろうとは思っていない。ただ、一定以上の知り合いを増やしたくないだけだ。窓の外にまた桜の花びらが舞っているのが見える。桜はここから低い位置にあるのに、舞い上がるほど風が強いのだ。これで雨が降ればすぐに散ってしまうだろう。すべては土に帰る。一瞬だけ輝いてなんの得になるのだろう。どうすれば、悲しい思いをしないで済むのだろう。徳子の心に浮かぶ疑問に、答えはまだ見つからない。授業が終わると、徳子は全員が教室から出ていくのをじっと待った。昼休みに入った今、全員の足は学食に向かっている。今日はどこで昼を食べよう、と考えた時だった。

「とくー！」

その声に入り口を見ると、そこに立っていたのは高校時代からの友達、恵だった。大学では唯一の友達と言える。

「めぐ、サークルは？」

恵は大学に入る前からテニスサークルと決めていた。そして入学式の翌日、さっそく始まったサークル勧誘で、一番に声を掛けてきたサークルに迷うことなく入部した。その時に徳子にも誘いの声はかかったが、やんわりと断った。何かと行動を共にしたがるそのサークルの友達と、恵は最近昼ご飯を一緒に食べていた。徳子は空いている教室で食べていたが、寂しくはなかった。

「いいんだ。おにぎり買ってきた！一緒にたべよう！」

白い下地に黒の水玉模様が描かれたスカートをなびかせ、机の間を通ってやってくる。恵は、曇りのない瞳をしている。毎日が楽しくて仕方がないと顔に書いてある彼女は、今の徳子には眩しすぎる。それでも彼女を手放す勇気はなかった。

「めぐ、心配してくれなくても私はもう大丈夫だよ。受験だってち

「やんと乗り越えたしね」

徳子の前の席に座り、早速おにぎりにかぶりついている恵は、少しだけ頬を膨らませた

後、すぐに肩を竦めていった。

「別に心配な訳じゃないよ。今更変なこと言わないでよ。高校の時から仲でしょ」

あっという間に平らげ二つ目に手を伸ばすと、何もしない徳子の方へ一つ放り投げる。

ふっと笑みを漏らして徳子がそれを取ると、恵は満足そうに頷いた。明太子が苦手だと知

って、投げたのか。有り難く頂戴してから、徳子は言う。

「で？ サークルの方はどうなの？」

「練習はしているよ。でも、高校の時みたいに真剣じゃないからね、遊び半分。先輩達は

飲み会ばかりだし。でも、五月の連休には合宿もあるし、楽しみ。徳も気が向いたらいつでもおいでよ」

恵はこうしていつも徳子に声をかけてくれる。曖昧に頷き返すと、

恵みは唇に張り付い

た海苔を舐め取りながら言った。

「でもね、最近キャプテンが二股をかけているって噂でねー。雰囲気悪いんだあー」

そう話す彼女の顔を、徳子はちらりと盗み見る。大きな目が困ったようにおにぎりを見

つめ、睫毛が窓から差し込む光に揺れている。すっきりとした頬は彼女の魅力でもあり、

それが実直な性格を表しているようでもある。高校時代はテニス部に所属し、日焼けで真

っ黒な肌を気にしていた。受験期間を経て肌の色はやっと常人になり、それに満足してい

たかに見えたが、彼女はまた太陽の下へ帰っていった。それが彼女らしくもあり、徳子にすれば羨ましくもあった。そこまで夢中になれるものがあるのも悪くない。

「あ、ごめん。この話聞きたくなかったかな」

恵の声のトーンが急に下がり、徳子の顔を覗き込んだ。おにぎりはすでに机の上から消

えていて、恵は最期にお茶を流し込んだあと、すぐに手持ち鏡で齒にノリがついていないかを確かめている。ついでに襟足に残る髪をうまくまとめる。

「ううんー、大丈夫だよ。もう、去年の話だし」

「そっか」

恵はそう言ったものの、二人の間に沈黙が下りた。窓の外からは、未だに勧誘活動が続

ける軽音部の演奏が、笑い声に混じって部屋の中に流れ込んでくる。

「徳さあ、未だに田辺君から連絡来るの？ まだ、痛い目を見せてやると思っていないよ

ね？」

恵の顔が鏡から逸れ、真面目なものに変わる。このクルクル変わる表情が、また彼女の最大の魅力でもある。

「ううん、そんなことないよ、大丈夫。そうだ。この間の春休みに一回メールが来たけど、返信しなかったし。嫌だからアドレスも変えちゃったし」

恵に心配させないためにも、徳子は手の中に残るおにぎりを無理矢理に口を開いて放り込んだ。それが大きすぎたせいで飲み込めず、一旦飲み下したはずの米がせり上がってきそうになり、鞆から慌ててペットボトルのお茶を取り出す。数回大きく咳き込んだ後、ぐびぐびとそれを流し込んだ。

「やだ、とくー。老人みたいっ」

恵が顔をしかめて嫌そうな素振りを見せながらも、次には楽しそうに声を上げて笑う。

恵の言う田辺とは、高校時代、ほんの一年前に徳子が付き合っていた男の名前だ。幼少時

代から人見知りには激しかった。幼稚園の頃までは、家族以外と馴染むまでにかかなりの時間を

を要し、親戚でも男という性別の人間には自分から手を伸ばすこともなかった。好きな人

が出来なかったわけではない。幼稚園の頃には初恋を、小学生になればお互いを好きだと

認め合う男の子もいた。それでも、中学生になってもその先にどうにかなりたいと願うこ

とはなかった。周りで出来るカップルを羨ましく思わないわけではない。だが、進学校だ

ったわりには、一年に数人が妊娠して学校を退学する噂を聞いては、人生を狂わされるよ

うで怖くなった。そんな徳子が、なぜ田辺と付き合ったのか、その本当の理由は徳子自身

曖昧だった。

「めぐ！ ああ、こんなところにいたー。今日の練習第二コートだっー」

はっと気づけば、ドア付近に数人の女子が顔を覗かせている。その誰もが茶色の長髪に

ミニスカートという可愛らしい姿である。背中にはテニスのラケットが入っているだろう

スポーツメーカーの鞆を背負っている。何度か顔を合わせたことがあるその友達が、恵に

に声を掛けたあと、徳子の顔を見て手を振ってくれる。瞬間嬉しくなる気持ちを静め、簡

単に手を上げて済ませる。

「徳は今日バイト？」

もう昼休みも終わりだ。恵は机の上に広げた飲み物や携帯を鞆に戻し、そして先の少女

と同じ形をした鞆を背中に回して斜めにかける。

「うん、サークルも入ってないし暇だからね」

そんな徳子の言葉に恵は軽く首を傾げて苦笑いを見ると、すぐに納得したように大き

く頷いた。頭の上で結んだポニーテールが揺れる。

「それじゃあ、メールするからちゃんと返事頂戴ね。今度は英語で同じだね。寝坊しない
でねー」

恵は、まるで時計のように正確に動く。そして相手のどこを見ているか分からないほど、

こっちが意図していない時にも現れる。それが困っている時であれば、尚更である。だから

からこそ、彼女だけは手放したくない。今まで失ってきた、信じられない者たちとは違う。

彼女は、絶対に裏切らない。恵が立ち上がったのと同時に、教室にチャイムが響く。次の

授業でここは使われないのだろう。誰も入ってくることはない。笑顔で教室を後にする恵

を座ったまま見送ると、廊下は移動している生徒の声で騒々しくなる。時間通りに教室に

現れる教授など稀で、ほとんどが少し遅れてやってくる。生徒は教授に怒られるからでは

なく、後ろの座席確保のために仲間達と教室に焦ってやって来る。一人で授業を取って

れば、席を取る必要もない。出席の点呼に間に合うようにやってくれば充分なのだ。仲間

のためではなく、ここは徳子の特等席だ。陽だまりの中で、徳子は

ほっと息を吐きながら
もう一口お茶を含んだ。

＊

「徳ちゃん、今日ご飯食べに行かない？」

暗いロビーの奥で、徳子の隣に座っている女の子が声を掛けた。
天井からの光はほとんどないほど薄暗く、それはここが宇宙をイメージして作られたロビーだからと言っても、働くほうからすれば面倒な話だ。

「すみません、二時半からのドリームアゲイン、大人二枚でお願いします」

声を掛けられて正面を見ると、目の前には同年代だろうカップルが腕を組んで立っている。徳子は専用のペンで、右脇に設置されたタッチパネル式の液晶画面に触れる。

「お二人様ですね。お席のご希望はございますか。ただいまの時間ですと、比較的自由にお選びいただけると思います」

空き状況を確認した後、もう一度パネルをタッチして座席の位置を確認する。それと同時に二人の前に、プラスチックで作られた小さな座席表を差し出す。すぐにカップルはそれを覗き込んで、後ろの隅の方を指さした。

「こちらですね。お取り致します。それでは発券させて頂きますが、本日はレディースデーですので、女性の方が千円、男性が千八百円になります。ポイントカード、駐車券はお持ちですか」

すぐにパネルで確定ボタンを押すと、パネルの下に置かれた黒い機械から映画のチケットが二枚発券される。

「それでは、ご確認下さい。上映の十分前開場になります」

カップルは慣れたもので、お金を払った後は徳子の話をまるで聞いている。チケットを手にとると、すぐに売店の方へと歩いていった。徳子も、そんなことは気にしていない。発する言葉はマニュアル通りで、考えなくても手や口が勝手に動いてくれる。バイトを上がるときに売り上げでミスをしなければ問題ない。

「ねえ、徳ちゃん、ご飯行こうよ。今日八時上がりでしょう？」

客がいなくなると同時に、隣の女がまた声を掛けてくる。この映画館でバイトをするようになって、もう二ヶ月が経つ。大学の受験が終了したと同時に、家から最寄りの駅前に建つショッピングモールの中にある、この映画館で求人募集を発見した。アルバイトならば敢えて職種を選ぶつもりもなかったし、特に簡単そうに見えた。あわよくば、映画がタダで見られるかもしれないという下心があったことも確かだ。サークルはお金を使うだけだが、アルバイトならば貰うことが出来る。優先順位が傾くのは当然だった。その上、サークルでは恵が言っていたような人間関係のもめ事が終始つきまとうが、ここならばそんな心配はないと思っていた。自分の仕事だけこなせばいい。そのはずだったのに、なかなか周りはそうさせてはくれない。

「ねー、徳ちゃん、聞いている？」

隣を見ると、まだ女が徳子に話しかけていた。暗い中でも光るその金色の髪の毛は、太陽の光に当たれば燃えてしまうのではないかと心配になるほどだ。

「ごめんね、今日は用事があるんだ」

申し訳なさそうに見えるように俯きながら、徳子は言った。

「えー、本当？ 残念」

この女、伊東真奈美はこの映画館のアルバイトで出会った。同じ年の彼女は、高校時代

からここでアルバイトを始めたらしく、ベテランの部類であり徳子に色んなことを教えて

くれた。それも、機械の操作だけでなく内部情報についても、だ。

どの上司が冷たい、誰

と誰が付き合っている等は、徳子にあまり興味のないことだった。

それでも話しだけは合

わせていたのだが、関わりたくない決定打は田辺だった。田辺は徳子の高校時代の恋人で

もあり、恵も交えて三人でよく遊んだ。その田辺は、恵と中学の時から同級生であり、そこには偶然にも真奈美もいたのだ。彼女が、田辺と同じ中学出身だと知ったのは、アルバイトに入ってから一週間も経っていなかった。高校の名前を出した途端、恵と田辺の名前を上げた真奈美に、迷いながらも友達だと話したことが間違いだった。真奈美はその日のうちに田辺と恵にわざわざ電話をしたのだ。田辺から徳子と付き合っていたことを聞き出したとの報告と、黙っていたことについて少しの恨み節まで付いてきた。そこまで話す必要がないと思っただけでなく、田辺とは半年以上も前に別れていた。それでも、真奈美はマスカラをふんだんに塗った睫毛を強調しながら頬を膨らませて言った。

「もうー、どうして教えてくれないの」

ついでに何度も腕を叩く。恵のように清楚だが長い睫毛と比べて嫌悪感を抱いたが、口

には出来なかった。こちらが踏み込むつもりもないのに、真奈美は様々なことを知りたが

った。それを避けて続けたという間に二ヶ月が経っている。それでも一向にめげないの

だから見習うべきポイントでもある。ご飯と一緒に食べに行く気になどなれない。結局、

うまくかわしていくしかないのだろう。徳子は、この空いている映画館のロビーで客をぼ

んやり待つのが好きだった。真奈美は、徳子があまり口の達者でないことを分かっている。

徳子に話し掛けた数秒後には反対側に座っている子に話を振る。つ

まり、暇なのだ。

「ねえ、徳ちゃん。知っている？」

あと三十分で休憩だという時、再び真奈美の声が掛かる。数時間座っていて、売ったチ

ケットは数枚だ。近いうちにここが潰れるという噂もまんざらではないだろう。

「何を？」

ここはすでにおしゃべりの場と化している。それまで真奈美達が何を話しているのか聞

いていなかったが、最後に真奈美の隣にいる奈津子の小さな悲鳴が聞こえた。

「最近ね、ここらに変質者が出るんだって」

「怖いよねー」

奈津子は真奈美に相槌を打つと、本当に怯えた様子で首をぶるぶると左右に振る。ショ

ートカットの髪の毛が、その度に宙を揺らぐ。

「ほら、この通りの奥。コンビニの裏に公園があるでしょう？」

真奈美の言うとおり、駅前から少し離れた所にある公園は、徳子の帰り道だ。

「あそこにね、出るんだって」

奈津子の言葉に、真奈美も顔を震わせた。徳子にそういう話を進んで聞きたいという気

持ちはない。どうせ変質者の話だろうと思った徳子は、奈津子の次の言葉に徳子は耳を疑った。

「汚いコートを着た男がね、人を食べているんだって」
「いやあ！ と真奈美がまた声を上げる。

「すみません。三時からの吸血鬼を一枚」

青い顔をした奈津子の前に、一人の男が立っていた。彼も今の話を聞いていたのか、何

度も徳子と真奈美に視線を走らせる。

「あ、失礼しました」

「ねえ、不気味だと思わない？」

接客に入った奈津子を除き、真奈美が徳子の袖を引きながら言う。徳子は客の視線に俯きながらも呟くように答える。

「不気味……。だけど、信じられないよ。都市伝説っていうの？
見間違いじゃない？」

真奈美は徳子の言葉に一瞬顔をしかめたが、それでも引き下がらない。それどころかその男の風貌まで語り始める始末だ。

「それでも怖いよ。顔はね、髪の毛が多すぎて全然分らないんだって。全身毛むくじゃらって話も聞いたよ」

「……それ、絶対尾ひれついているよ。誰に聞いたの。それに、どうして人を食べていたって分かるの？」

今度はあからさまに真奈美が唇をとがらせる。

「奈津実の友達が見たんだって。徳ちゃんはあるその前、通るでしょう？ 気を付けたほうがいいよ」

「うん。ありがとう」

口ではそう返したが、徳子は二人が話すこれを信じるつもりは毛頭なかった。そんなことがあればニュースになり、地元でも騒ぎになっているはずだ。その証拠がない限り、それは噂であり伝説だ。死体が出たなど聞いた覚えはない。接客を終えてまた喋り始めた二人を一瞥し、徳子は再び手元の映画雑誌に目を落とす。この時の徳子は知る由もなかったのだ。これから待ち受ける恐怖も、それが自分の人生を狂わせることも、何一つ想像していなかった。

＊

アルバイトを終えると、すでに日はどっぴりと済み、蛍光灯のない場所では自分の靴音

にさえ緊張するほどの闇に閉ざされる。どんなに駅前が栄えようと、その一本裏道に入れば寂れたものだ。暗闇に包まれ、商業施設が建つことで却って人を呼び込み、変質者を招きやすい。特に夏場

になると注意書きが電信柱に貼られたりもするが、殺人とまでは聞いたことがない。せめて裸体をさらす程度だ。駅までを自転車で通学している徳子だが、時々背後を確認する。誰かに付けられているような気配を感じ、少しの物音や人影に怯えることもある。だが、それは年頃の女ならよくある話だろうと考え、自分を落ち着かせる。

今夜もそうだった。二人の話を聞いてから、殺害現場の妄想が頭から離れない。バイト中は今やっているホラー映画の広告がやたらと目についた。そのポスターが恐怖の脳内神経を刺激するのだ。今興行収入第一位だと騒がれているそのハリウッド映画は、スプラッターものだ。ある富豪の男が、些細なことをきっかけに転落していき、自暴自棄になりを次々と人を殺していき、最後に家族も手にかけるようになってしまった。というストーリーだが徳子には何が面白いかさっぱり理解出来なかった。ただ、人を殺すシーンだけが残酷かつリアルティに溢れて描かれ、世の中の人間はそれを見るためだけに金を払っているのだと考えられた。馬鹿馬鹿しい。そう思う一方で広告ポスターに映る俳優の、狂気にまみれた顔に恐怖を覚えた。黒の下地に四つのシーンが描かれ、その真ん中に主人公の男が立っている。木の陰に隠れ、手にはのこぎりを持ち、じっとこちらを睨み付けている。所々に血の痕と思える赤い点が滲み、殺された死体が下部で転がっている。あの映像が頭から離れない。公園の前に近付いた時、首を伸ばして中を覗き込む。見ない方がいい、そう分かっている。とても怖い物みたさに胸が震える。道路以上に暗いその公園は、中心に一本だけ電灯が建っている。自転車を止め、サドルに腰掛けたまま両足を地面に下ろす。その状態でゆっくり一步、また一步と進んでみるが至って普通の光景だ。と、背後で小さな悲鳴が上がる。はっと首を後ろに捻ると、スーツに身を包んだ女性が立っている。脇を猛スピードで自転車が通ったことに驚いたようだ。その自転車に乗った男は、徳子をちらりと睨むように一瞥してから通り過ぎていった。安心すると同時に、心臓が大きく脈打っていることに気づ

く。まさか、と思いながらも辺りを見回す。だが、悲鳴を上げた女性でさえ、すぐに徳子の脇を歩いて行く。怯えすぎだ。自分を自嘲するように苦笑いが漏れる。ペダルに足を乗せると、すぐに発進する。公園を過ぎ、コンビニの角を曲がれば徳子の自宅を含む住宅街である。クリスマスシーズンになればここの家はみな競ったように家中に電球をとす。それは年々レベルを上げていき、今では冬が一番家計を圧迫すると噂になっている。それでもどの家も続いている。だが、今のシーズンは頼りになるのは各家々の玄関先の灯りと、数メートル置きに立つ電灯だけだ。その道をまっすぐに走り抜ける。スカートを穿くことも滅多にないので、その分自転車は扱いやすかった。コンビニから五分も走れば赤い屋根の家が見える。徳子の家だ。決して大きくはないその家だが、駐車場兼倉庫が隣に建っている。昔はこの倉庫で兄と遊んだ。一つ上の兄は、現在都内で一人暮らしをしている。倉庫を一瞥すると、徳子は自転車を玄関脇に止め鍵をかける。玄関の灯りは点いているので誰かいるのだろう。ショルダーバックのポケットから家の鍵を取り出すと、シリンドーをゆっくりと回す。玄関に靴は一足、父親の黒い革靴だけだった。もちろん、家の中から夕飯の匂いが漂ってくるなどということもない。そこに父親が顔を出した。リビングからひょっこり出した姿は、まだ背広を着たままだ。母親が全ての家事を今まで取り仕切っていたので、側で見ていた徳子とはかく、父親は一人では何も出来ない。食べ物は台所、着る物は寝室、その程度の知識しかない塩コショウ、下着やハンカチなど個別の小物になると母親に聞かねば分からない。だが、母親がそうしてきた以上、父親を責めることも出来ない。それに、母親は死んだ訳ではない。この家をよく空けるようになっただけだ。

「徳子。おかえり。お父さんも今帰って来たんだ。腹、減っているか？」

「ううん。食べてきた」

中学校の教頭をしている父親は、残業も滅多になく、決まった時

間になると帰ってくる。そして、母親が兄の世話で一人暮らしのアパートへ頻繁に行っても文句の一つも言わないのだ。徳子がそれに対して愚痴をこぼせば窘めるほどで、気に入らなかった。自分を置き去りにされているようで悲しくなる。そんなに何を世話しているというのだ。こんな不自由な生活をして半年ほどが経つ。徳子が受験期であつたにもかかわらず、母親は兄の所へ通つた。もう家族でさえ信用しない。自分で乗り越えなければならないと、家族が身をもつて教えてくれたのだから。

「そうか。じゃあ、何か作るとするかな」

「あ、あたしがやるよ」

徳子は鞆を床に放ると廊下へ上がった。父親が少しだけ唇の端を上げたのが見え、そんな小さなことに安心する。教頭という立場からすれば、部活の顧問などすることはない。それでも父親は女子バレー部の副顧問を担当し、土日は試合の遠征についていくこともしばしはある。教頭に選任される前は、第一顧問として部活ばかり、土日は家にいないのが当たり前だったとぼんやりと覚えている。母親はこんな家庭に不満があつたのだろうか、と徳子は考えるようになった。もし、そうならば今の状況も仕方がないのかも知れない。

「何を作ってくれるんだ？」

背後から覗き込む父親は、ネクタイをはずしているところだ。徳子は冷蔵庫の中身やあちこちを確かめたあと、野菜を数点流しに転がした。

「カレーだよ。簡単だし、明日の朝も温めればすぐに食べられるから」

着替えることもなくジャガイモを剥き始めると、父親は洗面所へ向かう。ご飯が炊けているわけではない。夕飯の支度が整っているわけではない。数年……、いや数ヶ月前には考えられなかったことだ。どうしてこの家がこんなに崩れてしまったのか。それが、徳子には分からなかった。野菜を炒め始めると、父親は新聞を持って台所に戻って来た。椅子に腰掛けるとゆっくりとそれを広げる。若い

と思っていた父親も、いつの間にか眼鏡の形が変わっている。近眼だったはずが、今では文字から顔を遠のけて読むようになった。老いていく親を見ながら、仕方ないと思う気持ちと、叱責する感情が入り交じる。老けないで、歳を取らないで、そう願っても無意味だとは分かっているのに。そして、そんなことを考える自分に幻滅する。そのくせ、反省心が沸き上がり、その後は少しだけ優しくなれる気がするからおかしなものだ。

「学校は、楽しいか？」

父親が、ふいに新聞から顔を上げる。ルーを入れ、少し煮込めば完成する、という頃合いだった。部屋には匂いが充満し、徳子は換気扇のスイッチを入れる。

「ああ、うん」

教師をしている彼にとって、これは合い言葉のようなものだ。会話に困った時、朝の挨拶の代わりに、いつでもこの言葉が飛び出してくる。そして、それ

以上深く突っ込んでくることもないので、とりあえずはこう答えるのも常だ。その先に困りかけた時、炊飯器が音を上げた。蓋を開け、炊きたての米をしゃもじで混ぜる。湯気が手にかかり、掌がしつとりと濡れる。

「サラダも作ろうか？」

大きめの皿にご飯をよそい、その上にたっぷりカレーをかける。肉がなくあり合わせの野菜を何種類も入れたので、大きな固形がごろごろしている。だが、父親はそんなことに文句を言ったこともない。

「いや、いいよ。それだけで十分だ」

そして、欲もない。彼は平和に暮らせていればそれで満足らしい。父親の前に皿を置くと、徳子は自分も席に着き、急須を手を取った。お茶の葉を入れ、沸騰させておいたポットからお湯を注ぐ。父親が一つ一つの野菜を確かめるようにしてから口に入れるのにふっと笑

いを零してから、お茶を飲んだ。子供の影響に悪いという理由で、家の台所にテレビは置かれていない。子供の頃はそれが大きな不満で文句を言ったが、今はこれも悪くない、と思う。

「ねえ、お父さん」

「うん？　なんだ」

スプーンで大盛りのカレーを口に入れたまま、上目遣いで徳子を見る。そして、全てを飲み込むと、もう一度、なんだ、と繰り返す。

「最近、変な噂を聞いたことがない？」

父親は一度大きく目を見開いたあと、徳子が渡したコップに入った水をごくり、と呑んで首を傾げた。その反応に徳子のほうが意外だったが、それでも父親は噂に近いところにいる人物だと確信があった。教師という立場上、子供に近い位置にいる。得に噂に敏感な世代の渦に在るといっても過言ではない。それならば、あの噂を聞いたことがあるかもしれないのだ。

「私ね、映画館でアルバイトしているでしょう。さっき同じシフトで入っていた子がね、今ここら辺で噂になっていることがあるって」「どんな内容だ？」

もう父親の顔色に変化はない。普通の顔をして、先ほどまでと同じようにカレーを口に運んでは水を飲む。

「あのね、この先の……コンビニのところの公園あるでしょう？　あそこで、変質者が出るんだって」

「ああ、そろそろ夏に近づいてきているからね。そういう変なのが増えているんだろう。徳子も気を付けなさい。明るい所を通るとか、まあ自転車なら脇目も振らず、まっすぐに帰るんだよ」

いかにも教師の言いそうなセリフだ。そんなことが聞きたいのではない。それだけで徳子は少しだけむかつきを覚え、真奈美の言っていた話をそのまま伝える。

「普通の変態じゃないよ。私も最初はそう思っただけだね、狂人っていうのかな。人を食べているんだって。殺人だよ」

最期の一言を付け加えたところで、父親は一気に口の中の物を吹

き出した。ごろん、と大きなじゃがいもがテーブルに飛んで来て、二回ほど転がった。その後何度か咽せた。

「徳子……。誰に聞いたんだ、そんな話」

呆然とする徳子をよそに、父親は慌てて立ち上がると、食器棚の脇に下がっている箱形のティースケースに走る。二、三枚取り出して来ると、皿の手前に落ちたニンジンのかけらから、徳子の方まで転がったじゃがいもを拾っていく。そして、全てを拾い終わると、多少戒めるような瞳で言った。

「まあ、誰に聞いたとしてもいい。そんな話を面白がっていてはいけない。そんなことがあるわけがないだろう。事件になっていないじゃないか。子供達の安全を担うお父さんの役目としては、そんな妄想じみた話は、聞きたくないよ」

そして、皿に唯一残っていた最期の一口を食べ終えた。機嫌を損ねてしまったのか、父親は食器をまとめて流しに置くと、台所を無言で後にした。父親にどんな反応を取ってもらうかを期待していたわけではない。驚いて欲しかったわけでも、一緒にそれを馬鹿にしたかったわけでもない。それなのに、どこか肩すかしを食らったように気に入らなかった。

真奈美が徳子に話しかけた時も、こんな風だったのだろうか。徳子は少しでも反省すると、自分も席を立った。そう、そんな者がいるはずがないのだ。ただ、それを誰かに肯定してほしかったのかもしれない。

「そんなの、いるわけがないじゃない」

口に出すと、本当にそれが馬鹿らしく思えた。そして皿洗いをすすめるために、スポンジに洗剤を勢いよく垂らした。

2 嘘か誠か

嘘か誠か

徳子は、今日もまた宇宙を模倣した空間の中で一人ぼんやりと前を見つめていた。大学の授業はなく、丸々ここで過ごすことになる。そうしなければかなりの報酬を手にすることが出来るが、父親に似て徳子にも欲はない。欲しいブランド商品があるわけでも、旅行に行きたいわけでもない。大学は行くものであるという固定観念から受けただけで、別に学びたいこともない。

「おはよう、徳ちゃん」

その声に振りかえると、どうやら今日も真奈美が同じシフトのようだ。

「あ、おはよ」

机の上に必要なものを全て集め、この準備時間にやることは全て終えた。あとは、開場を待つだけである。といっても、平日の朝一番、九時から映画を見に来る客などほとんどいない。

「ねえ、昨日の話覚えてる？」

昨日の話といえば、あの噂についてだろう。父親の切り返しに嫌な思いをしたことをふ

まえ、今日は徳子も適当にあしらうことは躊躇われた。

「うん。昨日、公園の前を通るのに緊張しちゃったよ」

徳子は額に皺を寄せる。肩まで伸びた髪を耳にかけると、パネルの電源を入れる。真奈

美は徳子の反応に満足そうに頷いた後、顔を近づけてきた。

「それが昨日の夜ね、奈津実にメールを貰ったんだけど、大変みたいよ」

そのまま彼女も椅子に座ると、ポケットから携帯を取りだした。

「ちよっとっ」

徳子は思わず声を上げた後、チケットカウンターの背後を見上げた。

ロビーの隅にある

黒い物体が気になったのだ。映画館という場所も災いして、あちこちに監視カメラが設置されている。チケットカウンターも例外ではなく、従業員の姿も映るように設定済みだ。

警備の問題もあるが、その名の通り監視である。そして、ここへの携帯の持ち込みは禁止

されている。あのカメラで見つかったとすれば没収される上に、ある一定期間はその売り

場全員が無料で映画を見ることができなくなってしまう。連帯責任は、反感を買いながら

も強い拘束力を維持していた。映画鑑賞を趣味としている者も多く、そんな事態は揉め事

の原因となるだろう。そして、社員の中には監視することを趣味とするものもいる。徳子

の額に妙な汗が浮かぶ。

「大丈夫、こうすれば見えないから。普通にしていってね」

しかし、真奈美に気にする様子はなく、カメラに背を向けて座るだけだ。そして、携帯

を開いた後、そっと徳子に手渡した。そこを見られてしまえば、徳子まで怒られかねない

が、今は真奈美の言う通り、ここで挙動不審になるわけにもいかない。

「これ、どういうこと……?」

早く携帯を手放したかった徳子も、メールの文面を見た途端に言葉を失った。そこに書

かれていたものは、徳子の予想を遙に上回るものだった。

「冗談ってことは……」

徳子の言葉に、真奈美は怯えたように首を振った。

「ないよ。私ね、遠回りになるけど心配だったから朝一番に奈津実

の家に行ってみたの」

徳子は、そのことにも驚いた。彼女は、友達を想ってそこまでするようには見えなかった

たのだ。しかし、いくら徳子が面白くなくても何度も声を掛けてくれるし、彼女は誰かと

いつも笑っている。真奈美の顔色が青ざめていることも、これが現実であろうことを表し

ていた。真奈美の声が一層低くなる。

「奈津実が、昨日の夜にバイトから帰った時は、元気だったんだって」

「私は、お父さんに噂のことを聞いたけど……。あ、学校の先生をしているから、知っているかと思ったの。でも、馬鹿みたいだって笑われちゃったんだけど」

そうだ。父親は相手にもしてくれなかった。

「そんなの関係ないよ。それに、大人は……得に先生なんて子供が話しているそんな噂を信じる訳がないでしょ」

真奈美は、やはり携帯を持っていることが不安だったのだろう。それでも持ってきたのだ。カメラに一度目をやると、すぐに徳子の手から取り、ポケットに戻した。そしてふっと息を吐くと、椅子にどっかりと身体を預ける。スカートの裾が捲れ、白い太股があらわになったが、真奈美の興奮は冷めやらない。徳子を見つめたまま、両手で頭を抱えて言う。

「それでね、お風呂に入ったから寝ようとして、二階の自分の部屋に行ったんだって」

徳子は、奈津実の家を訪れた事はないものの、彼女の姿を思い浮かべた。風呂に入った奈津実が、濡れた髪で二階へ上がる。とん、とんと軽快な足取りで階段を上がったのだろうか。バスクリンの匂いが身体から放たれ、一日の疲れが眠気を誘う。その想像の合間を縫って、真奈美の声が追いかけてくる。

「それでね、玄関脇の庭で飼っている犬が随分吠えるから、声を掛

けようと思って窓を開けたんだって。……そうしたらね」

「ほら。すぐに開場するぞ。話してばかりいるなよー」

チケットカウンターの前を、トランシーバーを持った男性社員が横切った。

「はい」

開場前の最後の確認として、社員がロビーを一通り見て廻る。今日の担当は品川のように

で、あまり厳しいことを言わないので安心する。これが、うるさい人間だとカウンターの

中まで入ってきてチェックをされる。真奈美はまだ用意を終えていなかったなので、慌てて

立ち上がると、裏にある専用の棚に走っていった。そこから電卓やチラシを持って来なければならぬ。

徳子は、真奈美の携帯に残されたメールの文面を思い出しながら、

彼女が言い終えなかつた

場面を想像した。眠る前、飼い犬の鳴き声に苛立ちながら顔を出した奈津実は無言とした。玄関先に見えたのは、吠え続ける飼い犬と、その側で四つん這いになっている男の姿。男、といってもそれは予想でしかなく、奈津実の部屋から漏れた光に照らされている部分を見る限りである。懐中電灯を取りに一階まで行く余裕もなく、両親を呼び寄せる声も出なかった。だが、子犬の押し殺したような呻き声で我に返る。

「ちよっとっ！」

かろうじて出た声は、自分で想像していたよりもかなり大きかった。深夜の住宅街に、奈津実の声が響く。同時に、飼い犬は二階を見上げ、渾身の力で鳴き続ける。何度も、何度も高い声を上げて、身体をよじり抵抗する。その者が、その時初めて顔を上げた。奈津実の部屋の灯りに、それが照らされる。

「があ……あ」

理解できない声を発したと思えば、男は飼いだの足に噛みついた。腰近くまで伸びた髪はぼさぼさで、肌は暗闇にまぎれるほどに黒い。それが体毛に覆われているのかは定かではないが、全てが圧倒されるほどの鋭さを全体から放っている。あの変質者だ。咄嗟に思ったが、その場へ行く勇氣もなかった。男は、ちらりと奈津実を見上げると、犬の口を手で押さえ込み、その後ろ足にかぶりつく。口を塞がれた状態で犬は身をよじることしか出来ない。それさえも、押さえ込むように男が押さえ込む。後ろ足に、男が何度も何度も歯を立てる。一度肉を引きちぎるように激しく動いた後、何かを吐き出すように地面に口を開く。そこから肉片と思しきものが落ちると、男は再び犬の足に食らい付く。しばらくそれを繰り返すうちに、犬が静かになっていく。すると、その者は犬の首を地面に押さえつけると、そこに噛みついたのだ。肉食動物が獲物の息の根を止めるときにする作業で、すぐに犬は動かなくなる。目の前でその光景を見ても、奈津実には現実味はなかった。これが奈津実の送ってきた長いメールの内容だった。それ以上は、真奈美が取り上げてしまい読めなかった。一通り想像した後、胃に不快感を覚えた。

映画館は開場したようで、数人の客がパラパラと入ってきた後、あちこちに分散する。すぐにチケットカウンターに来ないのは、彼らの目的が映画だけではないからだ。初老の男性は入り口から入ってくると、一直線に腰掛けたばかりの真奈美の元へやってきた。一見身なりのきちんとしたその男は、なに不自由なく暮らしているように見える。しかし、こんな朝早くから平日の多くを費やしているのを見れば、家でどういう扱いをされているのかは想像出来てしまう。なにせここで映画を見るわけでもない。カウンターや売店にいる女の子と話をするだけなのだ。そして今、彼の中では真奈美がお気に入りのようだ。バイトの中で彼が噂になっていることなど、本人は考えもしないだろう。

「おはよう」

「おはようございます」

そんな男に、丁寧に返事をする真奈美を、徳子は横目で確かめる。そしてロビーの中をうろつく客達に目を遣りながら、あのメールの続きを想像した。奈津実はその後どうしたのだろう。男はどこまでその犬を食べたのだろうか。頭からか。足からか。尻尾に肉はあるのだろうか。目玉はどんな味がするのだろうか。犬は、雑種だろうか。気分が悪くなるのに想像が先走りする。

「今日も、名前を覚えてくれないのかね」

その男の会話が危険としつこさを帯びてきた頃まで、徳子はその描写を脳裏に思い浮かべていた。時計を見ると、もう十分以上が過ぎていく。

「それじゃあ、また来るよ」

男はそう言うと、ロビーの出口から出ていった。今日も映画を見ないようだが、この後にどこへ向かうのかも興味が湧いた。真奈美は反対に頬を両手で押さえながら、ため息を吐く。終始笑顔で対応し、ほぐさないと固まってしまう。

「あのじーさん、また来たんだ」

真奈美と並んで先ほどの続きを話そうとした時、チケットカウンタ―に姿を現したのは、売店にいるはずの誉田だった。その手にポップコーン入りのカップを持ったまま、ひよろりと長い身体をカウンターに預け、こちらを覗き込んでいた。映画が始まれば、ロビーに

アルバイトの者以外、客は一人もいなくなってしまった。映画

「誉田 あ、こんな所に来たら怒られるよ」

真奈美がポケットから鏡を出し、それを見ながらマスカラをいじる。今日も彼女の化粧

は鉄仮面のような。人差し指でそれを丁寧になぞると、満足そうに鏡を戻す。

「大丈夫だよ。今日の社員は品川君だから」

品川とは、先ほどの見回りをしていた社員だ。比較的穏和な性格な

おかげでアルバイト

の動きもその日は緩みがちだ。

「はい、これプレゼントさあ」

誉田はその大きなカップ入りのポップコーンを真奈美へ差し出す。

「えー、ばっかじゃない!」

言葉とは裏腹に、真奈美はそれを受け取り、机の下、つまりカメラの死角になるポイントへと移動させた。

「それより、まなみん。あれ、知っている? 最近変な噂があるんだぜ」

誉田のその言葉に、真奈美と徳子がすぐさま顔を見合わせた。しかし、誉田はそれに気づかず、手の中に残るポップコーンを大きく口の中へ放り込んだ。口いっぱい頬張ったその顔を見ていると、バイト仲間のうちで可愛い、と騒がれるのが少し分かる気がした。細い体つきでは想像出来ないが、高校時代はあの甲子園にも出場したようで、バイトの仲間内では盛り上げ役なのが、すぐに分かった。「誉田、もしかしてそれ、変質者のこと?」

あはは、と彼が声を出して笑うと、カウンターテーブルにポップコーンの粕が飛ぶ。

「やだ! 汚い!」

真奈美は走って裏へ消えると、ティッシュを数枚掴んで戻ってきた。それを拭きながら、誉田を睨む。

「ごめん、ごめん。俺がやるって」

真奈美の手からそれを取ると、念入りにテーブルを数回往復する。それでも彼の口の中には消費しきれない物が残っている。

「だって、あの噂のこと変質者だなんて言うからよー。あれは、狂人っていうんだよ」

「そう、それ」

昨夜、徳子も使った言葉だ。同意を示すと、誉田は真奈美から徳子に目を移し、少しだけ驚いたような顔で言った。

「徳ちゃんも知っているの?」

徳子がゆっくり頷くと、誉田は今度、神妙な顔で頷いた。

「やっぱりな。どんどん広まっている。あちこちに出没している、ということか」

「ねえ、あんたはなんで知っているのよ」

真奈美が机の下から数秒おきに手を出し口へ運ぶ。おかげでカウンター一帯が、キャラメル匂いに満ちている。売店は正反對の場所にあるので、ここまで匂いがくることもない。誉田がいるからといって、社員が来ればすぐばれるだろう。だが、徳子はそれを注意するよりも、誉田の話の方が興味深かった。

「俺の専門学校の仲間の家なんだけどさ。飼っている猫が喰われたらしいんだ。見たのは友達の母親。その話を聞いていた仲間内でも、知っているっていう人間がいたんだよ。それが二週間くらい前で、いつの間にか噂になっているよ」

真奈美はじつと誉田を見つめたまま、相変わらず手だけを動かしている。

「なんだかあちこちで出没しているかもしれないし、俺の友達も猫だったからよかったけど、一部じゃ人を喰うってことも聞いたぞ。まなみん、気を付けるんだぞ」

誉田の言葉に真奈美がごぼつと吹き出し、徳子に向けて苦笑いをする。奈津実のことは話すべきではないだろう。そう思った時、真奈美のテーブル上にあるトランシーバーから回線の音が漏れる。じじ、じじじ、と途切れがちの中、あの社員の声が聞こえてきた。

「誉田あ、いつまでチケット売り場で遊んでいるんだー。持ち場に戻れえ」

間延びした声は、とても怒っているようには思えなかったが、田中は一瞬飛び上がると、後ろに備えてあるカメラに向かって腰を直角に折って頭を下げた。そして、くると方向を変え、大きく真奈美に手を振ったあと、走って売店へと帰っていった。

「うまいよねー、あいつ。社員ともうまくやっているよ。あれだって、全部見られているって分かっていて演技だよ」

あの謝罪は外面だったことへの驚きよりも、真奈美が誉田をそこまで理解していることが意外だった。

「それにしても驚くね、あの変人。ここら辺をうろついているのかな。警察は何かしてくれないとねー」

真奈美は深刻そうに言いながらも、口を動かし続ける。徳子は、その手をじっと見続けながら、その見えない噂の男のことを考えていた。

アルバイトを終えた徳子は夕方過ぎにも関わらず、大学に足を踏み入れていた。誉田や

奈津実の話が気になって仕方がない。これではいつ自分が被害者になるかもしれない。そ

んな変人、もとい狂人がここらをうろつくには、それだけの理由があるかもしれない。そ

れを知ることができないが、公園の前を通るのが怖かった。大学の門を入ると、昨日より

もまた少し桜の色が濃くなったようだった。雨が降って全て散ってしまえばいいのに、と

思う反面、花だけは綺麗なままいつまでも形を残しておいてほしいという切なさが混在し

て、つい空を見上げてしまう。青い空に映るのはまた違った姿が、そこにある。

校門入って校舎を三棟過ぎれば、次に図書館が見える。平日は八時まで開館されてい

るはずだ。都内でも有数の蔵書を誇る大学の図書館だが、徳子はどうもあの本の臭いにはなじめなかった。特に、研究書や古い小説が置かれているエリアは饴えた臭いがする。それにまるで迷路のように入り組む本棚の間で、どこから探せばいいのか分からなくなる。

テスト前でもない夕方の方、ここにいる生徒はほとんどいない。誰もがサークルや飲み会に明け暮れているのだろう。結局建物の五階

すべてを無駄に歩き回り、犯罪の図書をぺらぺらと捲ったが収穫はなかった。結局、徳子は面白そうな小説を借りると、図書館を後にした。外はほんの数十分のうちに辺りを暗闇で包み始めていた。まだ夜は肌寒い。夕飯は今夜も用意されていないのだろうか。それだけですぐに帰る気にはなれず、徳子は学食へと移動した。一階を生協が占め、学校で必要な文具用品の大半は揃っている。そればかりか、最新の小説やお菓子までが豊富に置いてあるそこは、暇つぶしに最適だ。そして、学食はその真下の地下にある。他の大学よりは狭くメニューも少ないが、安さは充分満足できるものだった。夕飯をここで食べることにして、厨房へ行くとカレーライスを注文する。

一番安いそれは、かなりの量がある。売り切れていなかったことが幸運だと、用意をしてくれたおぼちゃんと言った。だが、普段ここで昼食を取らない徳子は、注文をするだけで緊張してしまう。やっと会計を終えた頃には、今日で一番神経を使った気がした。自分の知らない、馴れていない場所というのは嫌なものだ。自分の髪に染みついたポップコーンの匂いを消すようにカレーを口に運ぶ。周りは静まり返っていたが、家にいるより妙に落ち着いた。誰かと時間を共にするというのが、今の徳子にとってこの上なく辛いことなのだと身に染みる。しばらくはここで夕飯を取ろうかと考え始めた時、いきなり目の前に現れた顔にせつかく口に含んだものを吹き出しそうになった。これでは、昨夜の父親と同じではないか。いきなり背後から現れたその女性は、徳子の顔を確認して、小さな笑みを漏らした。

「あ、やっぱり！　ね、徳子ちゃんでしょ」

徳子の記憶にはない女性だ。歳は二十代後半、いや三十代にのっているだろうか。ストレートのうす茶色の髪は腰まで綺麗に伸びていて、切れ長の目が、その澁刺さも醸し出していた。だが、知り合いに心当たりはない。徳子のきよとした顔に、彼女は苦笑いで答える。

「あ、分からないか。当然よね。私よ、加奈子。裏通りの加奈子よ」

その言葉を聞いて数秒考えてから、脳内の回線が一気に繋がった。それと同時に昔の光景が蘇り、女性の昔の姿を思い出した。

「あ、かなちゃん？ 裏通りのかなちゃん！」

徳子の気分がここまで盛り上がったのも、大学へ入ってから初めてのことだ。加奈子は、自分の持っていたトレーを徳子の前に置くと、椅子に腰掛けた。

「よく分かったね。あたし、随分変わったと思うけど」

徳子はスプーンを置くと、加奈子の顔をじっと見て言った。反対に、加奈子は刺身の乗ったどんぶりに手を合わせると、割り箸を勢いよく割った。加奈子とは十歳ほど離れているが、徳子が小学生に入ったばかりの頃に時々遊んでくれた。それまでも、随分世話をし、貰い、徳子もなついていた。しかし、年齢を重ねるに連れて会う機会も減り、そして加奈子はいつの間にか街を出ていつていた。忘れたわけではないが、記憶の中に眠る思い出の人になりかけていた。しかし、そんな彼女が突然目の前に現れた。

「実はね、母に聞いたのよ。徳子ちゃんがこの大学に入ったってね。お母さん達が話したんじゃないかしら。それでね、もしかしたら会えるかな、って思っていたの」

「え、でも。かなちゃん、結婚したんじゃないの？」

言ってから、まづかったかな、と思い口の中で舌打ちをする。結婚が順調ならば、ここにいるはずがないではないか。いわば、加奈子は舞い戻ってきたのだ。案の定寂しそうに顔を伏せた後、加奈子は言った。

「……離婚。今じゃ珍しくないとっても、実家には戻りづらくてね。この近くに部屋を借りているの。で、私もこの大学を出ているから、知り合いの先生のツテで仕事を世話して貰って。徳子ちゃん、文学部でしよう？」

「あ、うん」

徳子は、ゆっくりと頷いた。昔は、綺麗で優しい加奈子に憧れていた。その彼女が離婚

したことの衝撃と、また会えたことの嬉しさで頷くことしかできない。彼女は徳子の前で、よく食べ、よく話した。

「私は理学部だから学部は違うけど、また一緒に過ごせる時間があるかもしれないね。つて、もうこんなおばさんじゃ嫌かしら」

自嘲気味に言うその顔も年よりもだいぶ若く見え、徳子は慌てて首を振った。

「ありがと。またよろしくね」

加奈子は、にっこりと笑う。

「お母さんに聞いたあとね、私、たまたま講習会の名簿で徳子ちゃんの名前を見つけてね。

顔を出したの、先週だったかな」

それも徳子に覚えがあった。半年後にある資格試験のための講習、その説明会だ。あ、と徳子の口が開いたのに、加奈子が頷く。

「本当は名簿でどの娘か分かったんだけど、友達と一緒にみたいだから遠慮したの」

隣にいたのは、恵だ。景気は常に変動し、それでなくとも世間はリストラだ、解雇だと騒いでいる。学生時代から耳にするその言葉のおかげで、徳子の世代は神経質になっている。大学へ入ったものの文学部である徳子と恵は、まずその資格を取ろうかと相談し、説明会に参加したのだ。そういえば、教室の隅に加奈子が立っていた。しかし、その時は彼女だと想像もしていなかったし、忘れていた。だが、なんという巡りあわせだ。加奈子は昔から徳子の悩みを聞いてくれた。

「そういえば、ご家族は元気？ 昔はおばあさんの焼きたてクッキー、私好きだったのよ」

あっという間にドンブリを食べ終えた加奈子が、箸を置き、グラスの水に手を伸ばす。反対に、徳子は目を逸らすようにスプーンを取り、そして再び食べ始めた。数回口に運んでから言う。

「おばーちゃん、半年ちよつと前に、亡くなったの」

それを思い出すだけで、一気にカレーの味がしなくなった。まだ半分は残っているのに、まるでおいしそうには見えなくなる。いつも封じこめているはずの悲しみが溢れ、止めようとする意志に反して、瞬時に瞳に膜が張る。それを隠そうと、また俯いた。

「そうだったの。ごめんなさい。母に聞いてなかったの」

加奈子が申し訳なさそうに言った。それを吹っ切るようにして、徳子は顔を上げた。学食には小さな音量で流行りのポップスがながれている。徳子にしてみれば、まだ消化出来ない過去の一つだ。祖母はいつも徳子の側にいて、家を空けがちな両親の変わりに面倒を見てくれた。素っ気ない兄とは違い、徳子は始終祖母の後ろを歩いていた。その時は幸せで、それを失った時にどれだけ自分が虚無感を味わうかなど想像することもなかった。

あの立っていられないほどの失望を味わうくらいなら、大切なものを増やさなければいい、そう考えたのは、祖母を失って四十九日を過ぎた頃だった。

「ううん。でも、もう平気。結構歳だったしね。あたし達も半分大人だし、家族は結構勝手にやっているよ」

「そうだったの」

「でもね、」

そう言いかけてから、徳子は自然と口を噤んだ。加奈子が目の前で徳子に対して首を傾

げて見ている。その透き通る瞳を見て、徳子は何も言えなくなった。祖母の死についての

疑問を言えるはずがなかった。

「それじゃあ、私はもう行かなきゃ」

空っぽの皿が載ったトレイを持って、加奈子が立ち上がる。

「かなちゃん、一緒に……。て、そっか。家が違うか」

同じ方向である家に帰るならば、この暗闇も怖くなかった。だが、加奈子が帰るのは実

家ではない。口を滑らせた自分に舌打ちして謝ろうとした時だった。加奈子が、あの微笑みを徳子へ向けて言った。

「私、離婚してから実家付近へ行きたくなくてね。なんか負い目を感じているの。両親は気にするなって言ってくれるし、私自身も気にする必要はないって分かっているんだけどね」

「ごめんなさい……」

「ううん。そうじゃなくて。ここまで来ているのに、最後の数歩がずっと届かなかったんだけど。でも、徳子ちゃんに会えたおかげで、そのうち帰れる日がぐんと近づいた気がするの。その時は一緒に帰ってくれるかしら」

こんな時、どんな反応をすればいいのか分からず、徳子はただ何度も、勢いよく首を縦に振った。

「ありがと」

そう言って、加奈子は食堂を颯爽と後にした。徳子の周りに残ったのは、カレーでもど

んぶりの匂いでもなく、加奈子がつけていたのであろう香水の、薄いレモンの香りだった。

＊

最寄りの駅に戻った徳子は、そこからは自転車に乗る。映画館の前を通ると、今日は毎

月一度だけある誰もが千円で見られる日ということもあって、夜はかなり混み合っているようだ。ガラス張りの外からでもそれが見て取れた。二階では制服を着た人間が整列させている。誉田の姿も小さく見えて、彼が朝から働き続けていることに苦笑いを漏らす。間にたっぷりと休憩時間を貰い、社員並に八時間労働だ。それを可能

にするほど内部の管理はずさんでもあり、居心地がよくもあった。今度の出勤は二日後だ。それまで、学校以外の時間をどうやって潰そうかと考える。やりたいことも見つからないまま、徳子はただ自転車のペダルを漕ぐ足に力を込めた。

恐怖とは、その時まで忘れているのに、気づいたら眠れなくなるほど神経を削る。しか

し、人間はそれでも恐怖に触れようとする。この時の徳子もそうだった。自転車を漕ぎ進めると、あの公園が近づいてくる。こんもりと並ぶ木立が、中の様子を隠している。数年前、囲いが不審者を増やすのではないかと疑問視されたが、状況はいまだに変わらない。徳子は決してスピードを緩めることなく走りすぎたが、それでも一瞬視界にはつきりと何かをおさめた。昨夜と同じく、今日も平凡に通過するだけのはずだった。しかし、その一瞬で捕らえた光景に違和感を覚え、急ブレーキをかける。コンビニの袋をぶら下げた男性が訝しげな顔を向けた。両足をしっかりと地面に下ろし、高鳴る心臓を押さえようと、ゆっくり深呼吸を繰り返す。店から溢れる蛍光灯の光が現実的で、今見たものを確かめたい衝動にかられる。サラリーマンは缶ビールが数本入った袋を揺らし、徳子の前を横切って行く。駅に電車が来たのだろう、徳子と同じ道を後方からやってきた帰宅者たちが、迷惑そうに追い越していく。数人見送ってから、ゆっくりとペダルに足をかける。確かめたいのに、見てはいけな気がした。徳子が一瞬見たのは公園に立ち尽くす男の姿だった、ように思う。詳しい背格好は分からない。だが、妙な不安と興奮の入り混じった感情が心を掻き立てる。

誰か通らないかと思うも、こんな時こそ人影一つない。入口には自転車が入れないように柵があるので、一旦下りる。覚悟を決め、自転車の向きを反対に動かした。盗まれることも心配だったが、長くかからないだろうと鍵はそのままにする。少なくとも、自転車の一部に住所と名前は大きく書いてある。それよりも、今は一刻も早く確かめたかった。鞆をしっかりと握りしめると公園の入口に踏み込

む。子供がいらないそこはまるで別世界のように不気味な臭いがした。入口からすぐの左側にテニスコートが二面敷かれている。その前に公衆トイレがあり、反対側に遊具がおかれている。こちら一帯では比較的大きい公園で、徳子も幼少時代は兄とよく来ていた。そう、加奈子も交えて。いや、加奈子に連れて来てもらったのだ。左右に目を走らせながら、いつでも逃げられるように心構えをする。どうしてこんな危険な目に遭ってまで確かめたいのか自分でも分からないう。に引き寄せられるように公園の中心まで進んで行く。一步、一步と踏み出すたびに、闇が深くなる。月明かりと公園の街灯で意外と足元が見えると予測したのは誤算であった。恐怖をごまかすように携帯を取ろうと鞆に左手を突っ込んだ時だった。徳子の視界の隅に、何かが写った。そして、その何かも、徳子に気づいたからか動きを止めた。それは噂をほとんど証明するべき、まさに正常な人間とは思えない外見だった。男だと分かるのは、その容貌からだ。ボサボサに伸びた髪の毛が、普通の三倍の量となって頭部で暴れている。全身をすっぽりと覆うようにしてコートを着ている。暗闇の中でさらに一体化しているように見えるのは、どうやら男の全身が土にまみれているからだろう。背丈は徳子より多少高いくらいであろうか。じつと徳子を見つめて動かないコートの男。その下がどうなっているのかは見当もつかない。ただ、人間と確実に違うことが一つ。彼の口がくわえているのは、小さな白い猫だった。

「……あ」

あまりの衝撃に徳子の膝が震える。しかし、言葉とは裏腹に言葉はしっかりと空を抜けた。男もその言葉で我に返ったようだ。ぴく、と頬を引きつらせた後、子猫を腕の中へと移した。それはまるで母親のようなくわえ方で、子猫も腕の中で安心して見えるように見えた。全体的に真っ白だが、四本の手足の先端が黒い靴下を履いているようだ。そして、背中にも黒い楕円系の模様がかった。それを愛しように撫でる男を見て、徳子はあの噂が嘘なのではないかと思いはじめた。猫は甘えたような声で、男を見上げて鳴き声を上げる。

「ねえ……」

そう声を掛けたが、男はもう徳子に興味を失ったらしい。木の茂みまで歩いていくと、そこに胡座を掻いて座った。暗い公園で猫を抱く男。奈津実が言っていたのはきつと冗談か、何かの間違いだ。本当にそんな人物がいても、この人ではない。徳子がそう考えて帰ろうとした時だった。背後から、突然猫の甲高い悲鳴らしき鳴き声が追いかけてきた。驚いて振りかえると、それは徳子が今まで見たことのないものだった。

毛むくじやらの男が大口を開き、子猫の後ろ左足にかぶりついているではないか。それは遠慮など毛頭無く、甘噛みだとはとても思えないものだった。なにより、子猫がつぶらな瞳で、助けを求めるように徳子をじっと見ていた。男は徳子を見無視して猫の足をかみ切った。豪快に、引きちぎるように足をもぐ。猫が逃げるように身体を動かすが、それを予想していたのかすぐに押さえつけた。両前足を片手で掴み、もう一方で首を押さえた。威嚇するように猫が鳴き続けるが、言葉が話せない彼らが鳴いていても、人間が助けにくることはない。

徳子は、男を止めようとも衝動的にその場から逃げたいとも思わない自分に驚いた。目が自然と吸い寄せられる。猫は足を引きちぎられたが、それでもまだ逃走を諦めようとはしない。藻掻くように身体全体が波を打つ。それでも猫はじっと徳子を見続けた。足の付け根からは血が滴り落ち皮が剥がれる。男が時々骨と思える破片を、茂みの中へ吹き出す。

そのうち猫は身体を奇妙に折り曲げ、目を開けたまま動かなくなった。男が自分の歯で開腹したのだ。そこからピンク色の袋がずりと落ちる。一つが転がったのを機に、数個の内臓と思えるものが数珠状に連なって出てきた。男はその中から何かを選ぶように指で袋を取り分けると、一番小さな物を口に放り込む。彼の口の周りは、猫の生命の印でもあった血で真っ赤に汚れている。そしてコートには、あちこちに白猫の毛が付着していた。徳子がそれを見ていると、

男はやつと顔を上げた。再び、膝が震え出す。ここで襲われたら助けを呼ぶことは不可能に近い。猫をあんな残酷に食する男が、のろまとは思えなかった。

俊敏な動きをされれば、足に自信のない徳子が走っても追いつかれてしまうだろう。殺されるだろうか。ぼんやりとその言葉が徳子の脳裏に浮かんだ時、男が動いた。身構えた徳子に対して、しかし男が取った行動は殊の外戦闘態勢ではなかった。地面に落ちた臓器を拾うと、自らコートのポケットに忍ばせる。そして血で濡れた地面に、周りの土を足でかぶせていく。よく見れば裸足である。男は猫の血を相当呑んだのだろう。零れていたのは、極少量だった。そして、全てを終えるとゆっくりと立ち上がる。徳子にとってはまさに映画のワンシーンのように現実味のないものだった。

そして、男は徳子を一瞥すると、公園の奥へ歩いていく。その手には、ただの皮となった猫が、両前足と頭部を残して握られていた。ひた、ひた、と裸足で歩くその後ろ姿を、徳子は追いかける気にはなれなかったし、最早足が動かなかった。奈津実の気持ちちはつきりと分かる。悲鳴を上げる声さえ失う。しばらく男の後ろ姿を見ていたが、ふとした瞬間に茂みの中へと消えた。そこでやっと金縛りが解けたように身体が自由になる。微かに口を開くと、すべての水分も失ったかのごとく乾燥していた。舌先で唇を舐めると、急に吐き気がこみ上げる。両手の拳をぎゅっと握りしめ、徳子も歩き始めた。公園から出ると、そこには何も変わらない世界が待っていた。自転車もその場に置かれたままだ。誰かに見られはしなかっただろうかと辺りを見回すが、相変わらず人気はない。都会とはまるで言い難いここは、徳子の帰ってきた電車から終電までの間、本数がぐっと落ちるのだ。自転車に鞍を戻し、サドルに腰掛ける。そして何事もなかったかのように自転車を発進させる。息が荒くなるのは、自転車のせいではない。徳子は、自分が今見た光景に興奮していたのだ。間違いなく、あの男は噂の男に違いない。真奈美や恵に話せば、信じてくれるだろうか。どうしてあの男はあんなことをしてい

るのだろう。一体誰なのだ。徳子は、めくるめく疑問を頭の中で巡らせながら、今夜もまた、あのコンビニの角を曲がる。

3 他人か友人か

「で、どういうことなの？ 徳。それ、本当？」

翌日、恵の授業のない時間に合わせて、徳子は自主休講した。公園での出来事を話した

くて、昨晩家に帰ってから恵にメールをしたのだ。そして今、詳しく聞いて貰えることになった。

興奮した徳子の話をじっと聞いていた、恵の最初の答えがそれだった。

「信じられないかも知れないけど、本当なの。あの男は人間ではなかったよ。ううん。人間だったけど、あんなことをするなんて」

徳子は、自分が見た物が間違いだとは到底思えなかった。恵がたとえ信じてくれなくとも、確かに目の前で行われた行為だ。幻覚ではない。それに、噂と

はいえ証人の真奈美や

奈津子もいる。誉田の知り合いも、見たと言っているのだ。

「徳は、真奈美が言っているから信じるの？」

真奈美と恵は中学時の同級生ということもあり、彼女の噂を信じたことで拗ねているの

だと思った。映画館でアルバイトをする時間も長く、恵と過ごす時間は高校時代よりも圧倒的に短くなっている。だからこそ、恵を傷つけないように宥めるように言った。

「それが確かだっている証明にはならないけどね。でも、実際に自分で見ているし」

この空き教室は大学内でも特に狭い。その中で二人は声を潜めていた。新しく去年建て

られたというこの校舎の暖房設備も万全で、ほとんどの授業がこの

建物内で行われている。

教授の部屋はこの上層階に、保健室や学生課などは下層階に設置され、各種が無理な移動

なく済ませられるように建てられた敷地の主要部分だ。教室もやたらと多いが、その分部

屋も狭かったりする。話の内容を少しだけ話していたので、恵は朝から浮かない顔をして

いた。相槌も打たずに、ただ何かを考え込んでいた。

「それ、徳子は関わらない方がいいと思う」

次に発した言葉も予想通りのものだった。まさか一緒に見に行こう、だなど普通の人間

がいうことではない。反対の立場なら徳子もそう言っただろう。

「徳にはね、これから友達になるだろうから、絶対に言わないって決めていたんだけどね」

恵は机に台本があるのではないかと思うほどに俯きながら話す。彼女がこんなに暗い顔

で物事を告げるのは、あの時以来だ。それは、徳子が高校の時に彼氏と別れた、あの日と

いうことになる。

「何？」

徳子はそんな恵に対して首を傾げた。ただ聞いて貰っただけで充分だ。恵の次の言葉に、

余計な言葉が入っていないかに緊張した。警察に行こうと促されたら厄介だ。

「あのね、真奈美とはどう？」

「どうって、どういうこと？」

恵と真奈美は連絡先を知っているくらいの関係だと聞いている。だからこそ、三人で遊

ぼうという話に発展はしていない。恵が気遣っていてくれているのかもしれないが、真奈美

とそれ以上親しくなるつもりはない。恵の顔が一瞬曇り申し訳なさそうに告げる。

「あの子に対して、違和感を持ったことはない？」

恵が何を言おうとしているのか理解すると、徳子の顔も歪んだ。どうプラスに捕らえて

も、そこには恵の彼女に対する嫌悪感が表れていた。

「違和感……？」

徳子は、脳内に真奈美の笑顔を思い浮かべた。何度断つてもご飯に誘ってくれるし、困

ってれば助けてくれる。これといって嫌な目に遭わされた訳ではない。反対に、一番気

遣ってくれる同僚という位置をキープしている。

「特にないけど。例えば？」

恵は、困ったような顔で続ける。

「実は、これからバイトと一緒にするって聞いた時から言おうか迷っていたんだけど。仲間

間になるのに余計なことかと思って」

徳子が頷くと、安心したように恵が言った。

「あの子、悪戯が好きなの。ううん、普通の笑えるものだったら構わないの。で

もね、こう……」

「いいよ。めぐ。はっきり言って」

それでも何度か逡巡させるように顔を背けた後、やっと恵は口を開いた。

「特に……気に入らない子に対しては、やり方がきつい時があるのね」

その言葉に、徳子は固まらざるを得なかった。心当たりはある。あれだけ誘いを断って

いたのだから、真奈美が徳子をよく思っていないかもしれない。それはいい。それなら、これは

嫌がらせ、ということになるのだろうか。

「中学の時もあったの。悪戯っていうか……それも巧妙だったりするの。周りに手を回し

て、絶対嘘だと見抜かれないようにしておいて、あとで信じた人を馬鹿にしたりして」

周りに罠を敷き、最後に信じた者を馬鹿にする。徳子の心臓がきゅっと苦しい音を上げ

た。あまりに自分の置かれた状況に似通っている。自分は嫌われているということか。奈

津子の携帯で送られたというメールも誉田の噂もすべて真奈美の作り上げた落とし穴なの

か。恵が嘘をいうわけではない。だが、騙されているかも知れないと思うと、反発したくなる。

「でもね、奈津子っていう同じバイトの子もそうなの。あの子の犬も同じ目に遭ったの。」

それで、真奈美にその内容のメールが送られてきて……」

「徳。端から端まで、全部ちゃんと読んだ？ 日付も、時間も。差出人も」

あの時、そんな余裕はなかった。監視カメラに注意は逸れ、長文を必死でスクロールさ

せ流し読みしただけだ。だが、悔しさから素直に頷くことは出来なかった。確かに、読め

なかった部分も真奈美が補足の説明をしてくれたに過ぎない。そんな徳子の様子を見て、

恵は視線を逸らすことなく言った。

「それって計画性が高いじゃない。だって、メールを見せるなんて休憩時間でも出来たで

しょう？ それなのにそんな暗い所で見せたってことは、結局その証拠に自信がないって

ことじゃない」

確かにそうである。あの時を狙って、わざと真奈美はあのメールを徳子に見せたのだ。

毎日他人のシフトを確認などしない。昨日、奈津子が休んだのか、元々休みだったのか定かではない。それでも、唯一の頼みの綱がある。

「でもね、売店に誉田っていう男の子もいるのね。その人の知り合いの家もやられたって。あの男が噂になっているって言っていたよ。だからこそ、あたしは……」

「誉田ねえ、聞いたことないな。その人は同い年なの？ 真奈美の味方をしているんじゃないの？」

恵には、もう容赦がなかった。それが徳子の目を覚ますことが目的だとしても、恵がここまで強く言うことはない。教室の静けさがやけに身に染みる。

「味方……」

真奈美にポップコーンを手渡す男の姿が脳裏に浮かぶ。そうだ。

誉田はいつも真奈美に何かを持ってくる。気を引こうとしているのは、徳子にもすぐに分かった。それならば、誉田が真奈美の思惑通りに、徳子を騙そうとしても意外ではないだろう。

「でも……。あたし、見たんだよ、あの人。確かに見間違いじゃなかったんだよ」

徳子の言葉は、また恵によって遮られる。

「それだって、真奈美が手を引いていることかもしれないのよ。知り合いの男に、わざとそれらしきことをやらせたっていうのもあり得るじゃない。そんなタイミングよく会えるなんて信じられない」

恵の言うことはいちいち正しい。徳子はどう言い返すことも出来ず、ただ項垂れるしかない。そんな二人の間に、授業終了を告げるチャイムが虚しく響く。恵が、おなじみのバックを背中に背負い立ち上がる。彼女は昼から他大のテニスコートへ練習に行くらしい。こんな気持ちのまま残されたくなくて、徳子は縋るように恵を見た。

自分から線を引いているくせに、いざとなると怖くて足が震えそうになる。強くなろうと藻掻いているだけで、いくら虚勢を張っても弱いままだ。それでも、強気な自分が顔を出し、助けて欲しいとも言えない。どうしたらいいか、そう答えを求めることさえ躊躇する。「めぐ……」

恵は、徳子を見下ろし子供を叱る母親のような目をしていたが、ふとその頬を緩ませる。そして、今度は慰めるような声音で言った。「徳子。徳がね、高校の時に辛い思いをしたのを知っているから、私は周りに壁を作ることにも何も言わなかった。でもね、自分で世界を狭めたら、きっと後悔するよ」

狭めたくて誰かと遊ぶこともない。今、自分がしていることは間違いのだろうか。

「余計なことならごめんね。でも、私は徳の味方だっていうこと、忘れないで」

恵のそれに、徳子はかろうじて頷いた。どうしたって傷つくではないか。いくら世界を狭めても、誰かが自分に干渉しようとする。なぜ、放っておいてくれない。不幸の底にいる時、引き上げてくれる手はないのに、拒絶する時には構わず頭を上から押さえ付けられているようだ。

「じゃあ行くね。またメールしてよ」

それには曖昧に頷いた。恵が教えてくれなければ、バイト先で笑われただろうか。傷つきたくなくて、親しくなろうとしない。この状況ですでに笑われているのか。バイトに入るのは明日だ。今までは大学以外の時間を潰すのに都合良かったが、一気に気だるくなってしまう。教室を楽しむそうに出ていく恵の背中を目で追い掛けると、自分が情けなくなった。逃げているだけなのか。家族からも。友達からも。大切な人を失ったときの、あの喪失感からも。徳子は、これから待たせよう問題に気分が沈み、机に額をつけて突っ伏した。誰でもいい。答えをちょうだい。そう心の中で叫んだ声は、騒がしくなっている廊下を前にして、徳子自身に虚しく響いた。

＊

恵の言った事を考えながら、徳子は大学からの帰路を辿る。明日どんな顔をして真奈美

に会えばいいのだ。彼女が同じシフトだったとすれば、隣に座る確率も上がる。平日はカウンターに平均二、三人なので、誰とでも話せる彼女が真ん中に座ることが多い。大体シフトは組む人間も同じになる。まだ騙されている振りをするべきか。大学で教職を選択している徳子は、週に一度だけこうして最後の授業まで残る日がある。これが一年生ならまだ余裕のあるほうで、二年生になれば週の半分以上がほとんど講義で埋まる。教師である親の手前、この資格を取得するとなると精神的にもかなりの負担となる。今はまだ精神的な重荷はないが、最後の時間まで大学に残っていることだけが面倒であり肉体的にも苦しかった。恵と別れてからも空き教室で考え続けた結果、今日だけは時間が経つのは早く感じられた。駅からいつものように自転車に乗ると、気付けば昨夜と同じ時間である。最近では当たり前になってしまったように、公園の前で少し立ち止まる。自転車に乗ったまま、公園の中を覗くも、やはりいつもの光景と変わらない。やはり、あれは真奈美が計画して作り上げた産物だったのだろうか。徳子は悔しい思いをペダルに乗せ、自転車を思い切り発進させた。夜の空、満天とはいかないまでも星が綺麗に瞬いている。誰もいない道で、時々徳子は空を見上げて快走する。上を向くと、風が喉にあたり気持ちがいい。コンビニの角を曲がると、あと是一直線だ。すーっと冷える風が、汚れた心を浄化してくれる。たとえば、からかわれたとしてもいいではないか。アルバイトはそのまま続けてみよう。そして、恵にはそれを報告しなければ、そう思いながらさらにペダルを漕ぐ足に力を込めた時だった。

徳子の自転車に突如衝撃が走り、視界が反転した。なぜか前のめりになったかと思うと、身体が空中に投げ出される。右半身に痛みを覚えた時、身体は道路に横たわっていた。空中に浮かんだ瞬間に固く閉じた瞼をそっと開けると、顔の上で街灯が光っている。あと数

センチ横にずれていれば、電柱に激突していただろう。それを考えただけでぞっとしながら、問題の自転車を目で探す。身体を起こすと、思った以上に右半身に痛みが走った。シャツの袖を捲ってみると、手首から肘まで辺りの薄皮が擦れて剥けていた。右の足首も捻ったようで、立ち上がろうとしただけで違和感がある。

自転車まで這うようにして動き、倒れた自転車を立たせて寄りかかる。そこでため息をついてから、なぜ自分が転んだかに気づいた。徳子の視線の先に佇む者、それが原因だったのだ。徳子が転んだのは、自転車が何かにぶつかったからだ。それも小石など小さな物ではない。それに、徳子がこの道をああして快走するのは初めてではない。だが、こんなことは初めてだ。その原因は、徳子をじっと見つめたまま固まっていた。そこにいたのはあの男だった。フードを目深に被り、髪の毛がそこから溢れている。あの猫を食らう男だ。だが、彼は道路に立っているわけではない。そこにあるマンホールの蓋を開けた状態で顔だけ出しているのだ。徳子が転ぶはずである。その瞳ははっきりと見開かれていて、驚いたように徳子を見つめている。

「あれ……」

徳子が声を出すと、男がびくっと震えた。彼の蓋を開けている手が震えている。そのやせ細った腕には重いのだろう。徳子は混乱で、頭がうまく回らなかった。恵の言うことが正しければこれも真奈美の罠になる。だが、ここまでの偶然が果たして存在するだろうか。こんなにまでする得が、真奈美にあるだろうか。徳子が迷っていると、男がすっとマンホールから全身を現した。その身のこなしは俊敏で、身体を出すとマンホールの蓋をさっと元に戻す。その手慣れた仕草から、彼がこの行動を取るのが初めてではないと確信する。男は、徳子からまるで逃げるようにその場から走り去る。徳子は、一瞬呆気にとられたものの、すぐにその後を追いかける。自転車を引き、痛む右半身を庇いながら走る。普段の半分の速度しか出ない。足も速い男に、すぐに離されてしまう。だが、コンビニの角まで行

くと、一瞬男がためらうのがみてとれた。追いかけるながら様子を窺うと、どうやら人影がないときを見計らって店の前を通るようだ。この時間に、人通りは少ない。この男は、こうして住宅街を駆け抜けているのだと、徳子は感心してしまう。結局徳子が男に追いついたのは、また公園に戻ってきた時だった。自転車を入り口で放り出し中へ駆け込むと、まさか追いかけてくるとは思っていなかったのか、男が茂みの陰で踞っている。

「あなたは、誰なの？ 真奈美の回し者？」

右腕をだらんと下げ、左手で腰をさすりながら、徳子は男の背後から声を掛けた。ぎょつとした表情で振り返った男は、怯えたように尻餅をつく。そこで一瞬徳子是不審に思った。昨日は、あんなに徳子が目の前にいても意に介さず猫を食らっていた男が、なぜ今日は怯えているのだ。徳子に何かされると思っているのだろうか。

「あ、ちよつと待って」

徳子は男に向け両手を広げ、武器を持っていないことを示し、鞆のチャックを開けようとする。その音でさえ、男は肩を揺らした。教科書やノート、財布などの中身を漁ったあと、徳子は一つだけ持っていた菓子パンを取り出した。男は訝しげな様子だったが、それでも視線はパンから離れない。徳子はそれを確かめると、音を立てないようにそっと開封する。メロンの味がするその丸いパンは、嫌いだという者を聞いたことがない。一口だけ千切ると、徳子はそれを自分の口に放り込む。男が見ている前で、ゆっくりと、だ。旨そうに噛みしめ、出来るだけ極上の笑顔を男に向ける。そして中身を半分にすると、徳子はそれを男の前に差し出した。警戒する犬のような体勢をしている男、徳子はそのパンを地面にそっと置き数メートル下がる。すると、男はさっとジャンプをしてパンに飛びついた。まるで徳子に飛び掛かるのではないかと思われるそれに、悲鳴を上げかけた。男はパンを口に放り込み、噛まずに飲み下した。そして徳子をじっと見る。そこにもう警戒心はなくなっており、徳子は男に向かって残りのパンを差し出した。

「欲しい？ 食べていいよ」

そう言い、腕を軽く振る。吸い寄せられるように近づいてきた男。彼は何度か身体を左右に揺らした後、手を出す。そして今度も口の中へ押し込む。やはり、これが真奈美の回し者のはずがない。ここまでする必要がないではないか。男は逃げる気もなくなったように、草の生えた部分に胡座を掻いた。腕から掌まで土まみれだが、洗うことを促す必要もないだろう。徳子はもう一度なにもないことを示すように両手を広げて見せた後、隣に腰を下ろす。

「あなたは、誰？ どこからきたの。名前は？」

徳子がパンを夢中で飲み下す男に言う。一瞬間を上げたあと、彼は徳子を穴の開くほど凝視し、数秒経ってから首を傾げた。

「な、ま、え。分かる？」

大きく口を開き、はつきりと発音する。すると、男は目線を公園内を何度か往復させてから、ゆっくりと言った。

「だ……わ。げ、んじ……ん」

腹の底に響くほど低い声で、さらに小さく聞き取りにくい。ただ、それだけで男が言葉を話せる証拠を得た。少なからず会話は出来るのだ。本当のことを教えて欲しいだけだ。

「何、それ。だ……わけ。んじん？」

徳子が確認するように言ったが、その時にはすでに男の興味は逸れていた。地面に落ち

たパンの粕を拾い、コートのポケットへ入れる。昨夜の猫の内臓を思い出し、徳子が男の服をちらりと見たが、そこにはないようだった。男は、徳子がもう食料を持っていないと

確信したのか、すっと立ち上がる。そして振り返ることもなく、そこからまた公園の奥へ

と去って行った。そういえば、あの奥にもマンホールはある。あれ

を通路にして街を移動

しているのだろう。

「だわけ、んじ、ん。だ、わけん、じん」

なんのことだろうか。徳子は口の中で何度もその言葉を繰り返す。

何かの手掛かりにな

るのか。奈津子も真奈美も確かな仲間になりえない。恵に話しても、また遊ばれていると

諭されることだろう。勿論両親など論外だ。それならば、これを誰に相談すればいいとい

うのだ。徳子は立ち上がり、同時に身体に走る痛みに顔を歪めながら呻いた。マンホール

の蓋の底から現れたその男に、徳子は怒りや恐怖よりも、興味を覚えて家路を辿った。

＊

翌日、徳子はアルバイトを終えるとまた大学へ来た。数日前、ここで夕食を取れること

に気づいてから、バイトの後から自宅へ帰るまでの時間潰しに有効だと気づいたのだ。からあげ定食を注文し、数秒で出てきたそれをおばちゃんから受け取りトレーに載せる。レジに着いたところで、あら、と声がかかる。顔を上げると、そこに立っていたのは加奈子だった。

「かなちゃん！」

思わず、声が大きくなる。彼女なら分かってくれるかもしれない。咄嗟にそう思いついた。

「どうしたの、その歩き方。片寄っているっていうか、右足引きずっているの？」

ちよっと待ってね、と言うと、加奈子は一度走り去ったがすぐに戻ってきた。自分の食事の乗ったトレーをテーブルに置いてきたように、徳子の手からトレーを引き取る。

「どうしたのよ、怪我でもした？」

驚く加奈子に苦笑いを浮かべ、徳子はレジで金を払う。それだけで体が悲鳴を上げるのだから、加奈子の行動は有り難かった。今日は自転車にも乗れず、アルバイトでも一つ一つの作業に時間がかかった。それでも、痛みに堪えるほうが、家にいることよりマシだった。お釣りを財布に入れるのも億劫で適当にポケットに突っ込む。そして、歩き出した加奈子の背中に向かって言った。怪我の部位は服で隠しているが、動きは直せない。

「昨日、自転車で転んじやって」

「え！ どうして！」

加奈子がすぐに立ち止まる。レジ脇で、一つのサークルが十人ほどで和を作っている。その彼女たちが、加奈子の叫び声に一斉に顔を向けた。テーブルに台本らしき物が並べられているのを見ても、どうやら演劇関係のようだ。

「あっち、行こ」

立ち止まったままの加奈子を、徳子が促す。仕方なく食堂の一番隅まで歩くと、椅子に腰掛け右半身を摩る。痛みは昨夜風呂に入った時がピークだったように思う。朝、着替える時には痣がどれほどひどいのか見るのが怖くてほとんど確かめることができなかった。

「ねえ転んだって、車にぶつけられた？」

徳子は驚き否定する。大袈裟に両手を振ると、また痛みが走る。だが、今度はそれを顔に出さないように我慢する。

「え！ 違うよ。そんなじゃないから大丈夫」

そう言うで一瞬ホッとしたように見えた加奈子は、次に困った顔をする。

「じゃあ、とくちゃん、変なことを聞いてごめんね。……誰かに、何かされたの？」

初めは、彼女が何を言おうとしているのか分からなかった。しかしその心配そうな表情とは対照的な鋭い目つきで、その意図を感じ取る。

「あ、もしかしてイジメとか想像している？ 大丈夫。本当にそん

なのとは違うの。確かに友達は数人もいないけど、わざと関わらないようにしているんだから」

そこで、今度は驚いた表情をする。当然だ。普通、大学生ならば友達と騒ぐことを目的としてもおかしくはない。だが、加奈子の反応に、自分の事ながら笑いが漏れる。そうか、そんなにひどく見えるのか。

「まあ、人っていうのは合っているかも。男だし」

「え!？」

「あ、変な意味じゃないから大丈夫だよ。さ、食べよ」

徳子は、左手で持ったフォークで唐揚げを刺し、口へ放り込む。なるべくなら箸を使いたくなかった。加奈子が食べるのはまたドンブリだ。好きなのだろう、すぐに箸を割る。

「心配だから。徳ちゃん、話してくれないかな」

彼女を見た時、話したくなったのは徳子のほうだ。続けざまに飲み下すと、徳子はやっと顔を上げる。

「だわけ、んじん」

え? と手を止める加奈子に、徳子がもう一度言う。

「だ、わけん、じん。これ、なんだと思う?」

笑われるか妄想だと引かれるかと思った。それでも徳子は彼女に話したい衝動を抑えられなかった。初めから少しずつ説明していく。噂を聞いたこと、男を見かけたこと。そして昨夜、マンホールから出てきた男に気づかずぶつかり飛ばされたこと。追いかけて、パンをあげたこと。だわけ、んじ、ん。と呟くように男が言ったこと。徳子は話しながらも、ご飯やキャベツにフォークを伸ばしたが、加奈子は一口も食えることなく話を聞いてくれた。初めは怯えた顔。真奈美に騙されているかと考えた部分では少し怒りの表情。そして、自転車で吹っ飛んだシーンでは小さく悲鳴を上げた。ドンブリが冷めることを心配したが、彼女はそれ以上に真剣に聞いてくれた。

「どう思う? かなちゃん。あたしにはさっぱり分からないんだけど、あの人なんて言ったんだろう」

徳子が言うと、加奈子は何度もその単語を口の中でも繰り返す。訝しげに顔をしかめた後、何かに思い当たったように驚きの表情を浮かべたが、すぐに首を振る。

「何！　かなちゃん、何か分かるの？」

徳子がフォークを置き問い詰めると、彼女は自分の想像に呆れたように笑う。

「ううん、まさか。そんなことないわ」

「何？　思い当たることがあるならなんでも言って！」

「……そうね。有り得ないんだけど、その人の風貌、つまり見た目をもう少し詳しく分かるかしら」

徳子は暗闇の中、俊敏に動くあの男を脳裏に思い浮かべる。やせ細っているくせに、どこに残っているのか問いたくなるほどの力。猫を噛み切る顎、歯の強靱さ。ぼさぼさに膨張した黒髪。髭。

「背は、そこまで高くないかな。コートを着て、そのフードに頭もすっぽり被っているよ。それに身体中が土に塗れているの。髪の毛や髭で顔はよくわからないけど、明かりの下に行った時、そんなにぶさいくじゃなかったよ。目の下に黒子があったかな」

徳子が説明していくうちに、加奈子の顔色が変化していく。不安そうだったものが驚きに変わり、最後は興奮のしているようだ。

「かなちゃん。よく聞いて。口の中で何回か繰り返してみて」

加奈子が真剣に言うので徳子は呟くが、それは何度も自分でやってみた。答えは変わらない。そう言うように、首を左右に振り肩を竦める。

「私にはこう聞こえるの。だわ、げ、ん、じ、んってね」

それでも意味が分からない。

「これでどうかしら。じゃ、わ、げんじん。ジャワ原人よ」

「ええー？」

思いもよらない加奈子の発想に、徳子が悲鳴を上げる。あのサークルが再び一斉に顔を上げた。徳子は口をつぐみ、唾を飲み込む。動揺を抑えきれないまま、加奈子に言う。

「それって、あの歴史で習う？ まさか原人って、待ってよ。有り得ない！」

人間の先祖である。その生き残りだともいうのか。コートを着ている原人などあり得ない。だが、あの俊敏な動き、力。世界はおかしなことで溢れている。

「あたしの専攻、知っている？ 歴史学科よ。といっても、専門は江戸だけど」

それでも徳子は疑わしげに加奈子を見る。

「でも！ 全般的に詳しいわよ。実際、日本で天狗や河童、それに妖怪の話は存在するよ。徳ちゃん、すごい発見かもしれない」

徳子は正解を求めて彼女に相談したかったわけではない。ただ、徳子が考えているのとはまた違った理由で加奈子の気持ちが盛り上がっているのがわかり、戸惑う。

「かなちゃん。原人って、昔の人でしょ。それならどのくらい生きるんだろう」

奈子は一瞬困った顔をしたが、うーん、と唸った後に言う。

「これは想像でしかないけど、彼等が子孫を残す手立ては限られている。昔の寿命は短かったけれど、どこかで隠れて生存していたのかもしれない」

加奈子の言葉に徳子の心が今度は踊る。徳子が周りをよせつけなのは、いつかみんな側からいなくなるからだ。もし、あの男が想像以上に長く生きる男であれば、それは仲間になるには一番いい相手といえるのではないだろうか。またあの男に会えるだろうか。公園に行けば会えるだろうか。その疑問ばかりが脳内を渦巻く。

「とにかく、気を付けてよ、とくちゃん。そんな怪我をしたらご家族も心配するでしょう」

そこでやっと加奈子は器に手を付ける。家族、それは一緒の家にいるだけの存在で今の徳子にとってなんの価値もない存在だった。

「心配なんてしないよ。この怪我の手当だって自分でしたの。多分親は気づいてもいないと思う」

加奈子は一瞬大きく目を見張ると、大きく首を左右に振った。

「そんなはずない。とくちゃんのお家は凄く仲がよかったじゃない。私覚えているのよ。ご両親はもちろん、お兄さんもおばあさんも優しかったわ」

仲が良い。それほど単純であり、もろいものは他に存在するのだろうか。家という膜に覆われた中で、実際に何が行われているかなど他人には分からない。却ってそこで大きな問題があるほど、それをごまかそうと外の人間に悟られないように繕うばかり。それに気づいているのに止められない。繕うという中毒にかかると、優しくしてほしいのに、優しく出来なくなってしまう。

「今は全然。特に、お兄ちゃんが大学へ入って、おばあちゃんが死んでからは。特にね」

自嘲気味に言い放つと、加奈子は箸を置いた。

「ねえ、とくちゃん。今日、うちに泊まりに来ない？ 私一人暮らしだし、ここから本当に

に数分なのよ。電車に乗って帰るより楽じゃないかしら。散らかっているけどね」

その申し出に、今度は徳子が驚く番だった。

「久しぶりじゃない？ 一回だけ、とくちゃんが私の家にお泊まりしたの、覚えているかな。いいじゃない。思い出話でもしようよ」

加奈子は楽しそうな表情で、はしゃぎながら手を叩く。徳子も家に帰るより、それも悪

くないと思った。あの空間から逃げられるなら、今はどこでもいい。あの湿った空気の、

いるだけで息苦しくなる地獄から。早々に食堂を切り上げ、加奈子の家に向かう。加奈子

はよく気が付き、頻りに遠慮する徳子の食器を片づけ、そして鞆まで持ってくれた。こん

な彼女が離婚したとは、相当に相手が悪かったのだろう。そうとし

か思えなかった。こんな素敵な女性を残して離婚する男と、体裁を守って一緒にいるだけで会えばきこちない会

話しかない夫婦のどちらが幸せであり、正しいのだろう。年配の人間から見れば、別れ

ないのが当然で、離婚すればすぐに我慢が足りない、根性がないなどと白い目で見られる。しかし、彼は本当に同じ問題を乗り越えてきたのだろうか。彼らには彼らの時代の、徳

子達には今の時代の悩みがある。それから逃げることは、果たしていけないことなのだろう。

うか。自分が辛いと思う問題から目を背けるのは、弱いことなのだろうか。あの身が竦

むような恐怖を味わい続け、揺れる足下を精一杯踏ん張ってその場に立ち続けることが、

自分の将来を左右する結果を生むのだろうか。

「とくちゃん。大丈夫？ その先のマンションだからね」

加奈子の声に、徳子ははっと顔を上げる。大学を出てから本当に三分ほどの所に、加奈

子の家はあった。大学の敷地から二本裏道に入ったところで、それは小高い丘の上に立っ

ていた。建物は仰々しい門を入り坂を上ったところにある。そこだけが守られているように、

に、入り口には守衛である中年の男が立っていた。

「なんか、すごいね。かなちゃん」

そうすると、くすり、と加奈子が笑う。

「ここね、大学の寮なのよ。さっき門のところに書いてあったの見えなかった？」

加奈子は丘を登りながら、徳子を気遣うように振り返り、笑う。マンションに見えるそれは、寮だったのだ。

「え、全然気づかなかった。そんなの書いてあったんだ」

守衛が加奈子に気づいた時に、軽く手を上げたのは、そのせいかな。

「教授の知り合いで、一部屋貸して貰えたの。通っている学生が知らないほど、最近入居

者が減っているみたいだから、ちょうどいいって。家賃に光熱費も入っているし、ご飯も

出るし、有り難いのよ」

「え？ それなら食堂で食べなくても」

「私のような助手は一人で、みんな学生さんよ。申し訳なくてね。

それに、基本寮って人

を泊めることが禁止なのよ」

「そうなの？ あたし、泊まって平気かな」

こんもりとした木立が、一本道の両脇を覆う。一度カーブを曲がると、その建物は見えた。淡いクリーム色で塗られた外壁に、あちこちの部屋で灯りがともっている。しかし、それも大した数ではないのは、加奈子が言った通り入居者が少ないのか、遊んで帰宅が遅いのか。

「大丈夫。学生さんの話だから。それを許してしまうと、人がなだれ込むでしょう。帰る電車がいないから泊めてくれって子も出てくる。そうなれば、先は見えているわ」

確かにそうだ。酒を持ち込み、宴会が始まるのに時間はかからないだろう。

「そうなんだ」

「だから私も寮に住んでいるって言わないようにしているの。仲良くなる生徒さんもあるし、今度は断りにくくなるでしょう。だから、とくちゃんは、特別」

そんな些細な言葉に、ほんのりと心にあたたかさが宿る。言葉ではなんとでも言える。

そう分かっているはずなのに、貰える優しい言葉は心を離さない。それだけで、少し救われ、加奈子に対しての信頼が表れる。玄関を

入ると、すぐ目の前の食堂で騒ぎ声がする。

「こっちよ」

スリッパを足下にそろえて出され、靴から履き替える。

「ごめんね。エレベーターがないから階段で頑張っただけ。三階だから」

頷いたは良いものの、階段を三階まで上るのは苦勞した。上った先にあつた加奈子の部屋は、想像以上に綺麗だった。階段で何人かの生徒とすれ違ったが、加奈子に頭を下げる

ものもいたが、素通りするものが大半だった。

「ごめんね。かなちゃんが、後で白い目で見られないかな」

生徒に禁止されていることを、上がやれば反感をもたれるだろう。

しかし、加奈子は服

を全て脱ぎ捨てジャージに着替えると、笑って言う。

「大丈夫よ。私ね、一応この寮母ってことにもなっているの。だから、何を言われても

平気なのよ。……多分ね」

ぺろりと舌を出して笑う加奈子に、余計まずいのではないか、という考えは言っても無駄だろう、と飲み込む。

「そうなんだ。ありがとう」

徳子は加奈子が入れてくれた、グラスに入ったオレンジジュースを受け取ると、それをテーブルの上に置きソファに腰掛ける。六畳ほどの部屋に、ベッドと簡素な机、ソファに小さな冷蔵庫がある。

「ごめんね。あんまり物がなくて。つまらないでしょう」

加奈子がそう言ってソファの隣に腰を下ろすが、徳子は笑った。

「かなちゃん。私もう大学生よ。おもちゃがなくても平気。あたしの部屋もこれに似ているよ」

安心したように加奈子が微笑むと、今度は真剣な顔になる。

「そう。その怪我だと、お風呂も大変そうね。言ってくれれば、何でも手伝うからね」

加奈子の言葉に、徳子も素直に頷く。家に帰りたくないからここへ来てしまった。それ

は身体が痛いということも重なっていたが、一番の本心は相談したかったからだ。あの男

のことではない。加奈子という、徳子の家族を知っている一人の身近な人間として、まさ

かの事態があり得るのかどうか、を。加奈子は徳子が半分ほど飲み干したグラスにジュー

スを足すと、それをテーブルの上に置く。注がれると呑まなければならぬ気がしてしま

うが、それでも徳子はもう手を伸ばさない。覚悟を決めて、加奈子を見つめる。

「とくちゃん、相談があるなら何でも言ってね。私も、力になるから。心配だったのよ。その変質者の話は別として、とくちゃんの顔色は悪いし、何かあるんじゃないかって」

加奈子の言葉に、さらに決心がついた。

「さすがだね。昔から、かなちゃんはそうだった。相談する前から察してくれる。あたし、かなちゃんが結婚していなくなったって聞いた時、ちよっぴりショックだったんだよ」

加奈子が寂しそうに微笑んだ。それでも徳子は彼女が幸せになることを願っていた。

「あのね、ちよっと前から家族がおかしいの。前からそこまでべたべたしている家ではなかったけど、もっと違う雰囲気。息苦しいの」「ご両親に何かあったのかしら」

夫婦が別れる経験をした加奈子。そんな彼女にしている話かとも迷った。しかし、だからこそ分かって貰えるかもしれない。それに、徳子の中でくすぶる疑問はもっと大きい。それを誰にも相談することはできなかった。

「おばーちゃんは、殺されたかもしれないの」

徳子の言葉に、加奈子が目を見張る。思いもかけない話だったの

だろう。徳子でさえ、口に出してみればそれがどんなにか無駄な想像でしかないのか、思い知らされる。それでも、誰かに否定してもらわなければ、気が済まないのだ。恵に話しても、きっと頭から否定されるに違いないと分かっていた。話を聞いた上で、納得のいく否定が欲しかった。加奈子なら恵よりより身近に家族を知っている。それに、加奈子はあの男のことも笑わなかった。それなら、この話も分かってくれるだろうと希望が浮かんでやまない。

「どういうこと？」

数秒遅れて、しかしふざけることなく加奈子が言う。ここまで来れば、後には引けない。そんな苦しさ、反対に自分を前に押し出してくれる。

「おばあちゃんは、半年前に死んだの。でも、急だった」

「そうね。そう言っていたわね。ご病気？」

「……分らないの」

これも、事実だ。あの瞬間を思い出すと、今でも混乱してしまう。あの日、徳子が家に帰ると祖母は死んでいた。前兆も何もない。呆気ない終わり方だった。

「分らないって」

「訳の分らないことばかり言ってごめんなさい。でもあの日、受験勉強の真最中だったあたしが家に帰ると、おばあちゃんは死んでいたの」

「その日に、ってこと？」

「……うん。私が帰った時には、おばあちゃんは布団に寝かされていて、顔に白い布をかけてあったの」

加奈子が一瞬戸惑うように窓の外に目を遣る。徳子の話をもう聞いてくれないのではないかと不安になったものの、次に彼女と目が合った時には真剣な眼差しに戻っていた。

「今までに、何かご両親に聞かなかったの？」

これも聞かれて当然のことだ。それが叶わなくて、諦めかけていた。「聞いても教えてくれないの。それから、家はおかしくなった」

加奈子はぐくりと、唾を飲み込んで言う。この話の意味するところは重大だ。家族を疑っている以上、目を逸らすわけにはいかない。「さっき言っていた、殺されたってどういうこと？」

どくん、と心臓が暴れる。それは推測でしかない。今まで、徳子の心の奥底に秘めてきた、ただの考えだ。

「それは……本当にあたしの考え。あの日から、お兄ちゃんも家に帰ってこなくなったの」

「お兄ちゃんって、信ちゃんのこと？」

そのあだ名を、徳子は久しぶりに聞いた。兄は誰からでも信ちゃん、信ちゃんと呼ばれ可愛がられていた。その背中を必死に追いかけていた自分と、決して後ろを振り返ってはくれない兄。

「もう信ちゃん、なんて可愛くないけどね。まあ、そう」

加奈子は苦笑いをする、先を促す。こんなきちんと聞いて貰えるとは思っていなかったの、却って頭の整理が出来ていない徳子がたじろぐほどだ。

「お兄ちゃんは、一年前に都内の大学に進学して、その近くのアパートで一人暮らしをしているの。あの人寂しがりだからさ、半年近くはとても頻繁に帰ってきたの。バイクを買って、電車の時間を気にしなくて済むからって」

「……バイク？」

そこで驚く加奈子に、徳子が今度は苦笑いをする。兄は幼少時代から大人しく、木陰で本を読む色白な男の子だった。おかげで勉強はもの凄く出来たが、バイクを乗る印象とはかけ離れている。

「意外、でしょ」

口をぽかんと開いたまま、加奈子は止まったままだ。おそらく、木に登ることさえも嫌がって大泣きした「信ちゃん」を思い出しているのだろう。

「うん。信ちゃんがそういう感じになっているなんてね。最後に会ったのはいつだったかしら」

真剣に記憶を遡ろうとする加奈子に歯止めをかけるためにも、徳

子はさらに続ける。

「とにかくね、それでバイクに乗って帰ってきたのがぴたりと止んだの。バイクももう誰も乗っていなくて車庫に放置されているよ」そこで、さらに加奈子の顔色が変化する。頬が痙攣したように上下に動き、唇の端が引きつる。徳子の考えが分かったのだろう。加奈子と目を合わせ、ゆっくりと頷いた。

「もしかして、徳ちゃんの考えていうのは……」

「……うん。お兄ちゃんがおばあちゃんを殺したんじゃないかって思うの。バイクで」

徳子の言葉が、虚しく部屋に響く。じっと見つめ合う二人は、その答えを出すことは出来ず、ただお互いの思いを画策するしかなかった。徳子の願い通り、加奈子が簡単に否定はしなかった。これからどうしていくかさえ分からないまま、夜は静かに更けていった。

4 朝か夜か

一夜は簡単に明けた。どんなに笑おうとも泣こうとも、はしゃぐとも癒されようとも、誰でも夜は明ける。徳子がカーテンから漏れる日の光に目を開けると、すでに加奈子の姿はない。この寮に誰かが泊まりにくることは本当にないらしく、客用の布団などはなかった。何度断っても加奈子は徳子にベッドへ寝るようお願い続け、結局押し切られる形となった。

「あ、目が醒めた？ これ、飲んで」

徳子が起きあがると、加奈子がマグカップを手渡してくれる。中は湯気の上がつたホットミルクだった。こんなのを飲んだのはいつぶりだろうか。礼を言って受け取り、そっと口元へ運ぶ。一口含むと、それだけで身体が暖まった。加奈子に話したことで何かが解決したわけではない。だが、この部屋にはミルクの中に含まれている砂糖の分だけ優しさで満ちている気がした。

「ごめんね。急だったし、私朝食べないからこれしかなくて」

加奈子がソファに座りながら化粧を始める。その手際の良さに思わず見とれた。

「ううん。ありがとう。話も聞いてくれて、楽になったよ」

徳子は一気にホットミルクを喉に流し込むと、コップを持ってベッドに座り直した。ビ

ューラーで睫毛を上げていた手を止め、加奈子がまっすぐに徳子を見た。

「昨日の話。疑うわけじゃないけど、まだ完全には信じられない。でも、とくちゃんの話

が分からなくもないんだよ。……ごめん」

いきなり否定しなかっただけマシだと思いたい。徳子は静かに首を振った。

「いいの。あたしこそ、ごめんね。かなちゃんに聞き役になって貰

っちゃったけど、もう

忘れてくれて大丈夫」

「でもね、もし、徳ちゃんがそれでも信じられないっていうなら、私は協力するから」

加奈子が、徳子の言葉を遮るようにして言う。驚く徳子に、加奈子は続ける。

「すぐには信じられないけど、これからやっぱり家族として生きていくためにも、ここで

疑問は取り除いて置いたほうがいいと思うの。一生悩むより、真実を知ったほうがいいわ」それは、どういうことなのだろう。徳子は目を見張ったまま、真剣に話す加奈子を見つめる。物事が、徳子の望んでいる方向へと動き出している気配がする。

「もし、徳ちゃんにその気があるのなら、私がその手伝いをするからね」

そんなことが出来るのだろうか。その結果に何が待っているのだろうか。

「でも、かなちゃんは仕事……」

「それは大丈夫。私はただの助手。反対に自由が利くかもしれない。それにね」

少しだけ気まずそうに口を噤んだあと、加奈子は神妙な面もちで言った。

「私ね、こっちへ戻ってきてから実家の周りに帰ったことないのよ。両親は気にするなっ

て言うんだけど、少し負い目みたいのがあるでしょう？ 彼とは結構強引に結婚したの」

徳子が加奈子の姿を見たことは、数年前の結婚を機になかった。だからこそ、名前を言われなければ分からなかったのだ。といっても、あまり地域での交流が盛んなほうではないし、近所での噂話に花を咲かせる年齢でもない。それに徳子の母親はそういう類の話を好ん

でするほうでもなかった。

「でも、徳ちゃんが一緒にいてくれれば、私も何気なく帰れそうなのがするよ」

加奈子の気持ちがあり難かったし、自分が少しでも力になれるような気がして、徳子は

素直に頷いた。

「それじゃあ、今度一緒に徳ちゃんのお家にお邪魔しようかな」

加奈子は想像以上に理解してくれていたのだ。徳子には、本当に兄が祖母をひき殺した

のではないかと、怯える心が存在した。それを彼女は知っているのだろうか。今日は、ア

ルバイトもない。大学の講義が午後に一つ入っているが、それほど重要なものでもないの

で、このまま自宅に戻ることにした。

二人が寮を出る頃には、中では掃除をする学生が目立った。その間を縫って、またあの

坂を下る。門の前で別れた二人は、それぞれの道を辿ることになった。その二人の背中を、昨夜と同じ警備員がじつと見つめていた。

＊

徳子は、加奈子の寮から自宅に帰るのも一苦労だった。大学の最寄りの駅まで歩くこと

さえままならず、かといって病院に行く気にはなれず、賢明に足を動かすしかなかった。昨日は必修単位の授業でもあり、代返を頼む友達すらいいことから、仕方なく身体を引きずってきた。しかし、それは奇跡に近かったのではないかと改めて思い知らされた。結局電車に乗ることを諦め、駅までたどり着かずに大学近くでタクシーに乗った。電車で数駅。田舎とはいえ、二千円ちょっとで家まで帰ることが出来た。だが、これを数日続けたら破産だ。小遣いも貰ってはいるが、それは毎月の携帯料金、食事代などで消えていく。いくら付き合いが少ないと言っても、人間が存在するというだけでそ

れなりの出費になる。

「ただいまー」

家の門をくぐり、玄関を開ける。父親は学校へ行っているはずだし、母親は兄のところだろう。そんな算段をしていたのが、思い違いだったようだ。

「昨日、どこへ行っていたの」

顔を上げると、リビングから顔を出したのは、母親だった。久しぶりに見るその顔の、

頬がこけて見えるのは気のせいではない。玄関のたたきを見ると、なるほどいつもより一

足靴が多い。帰る前に家に電話を入れればよかった、と後悔する。

「友達のところ」

吐き捨てるようにそう言って、靴を脱ぎ廊下へ上がる。母親と話することなどない。徳子

はすぐに階段を上っていこうとした。

「待ちなさい」

背中から追いかけてくる声に、無意識に足が停止した。嫌でも、親の言うことはきかな

ければいけないと刷り込まれてきた身体と心が、無視出来ない。このまま二階に上がれば、

後悔して一階に下りられなくなる弱い自分がすでに見えた。仕方なく、踵を返してリビング

グへ向かう。

「何」

顔だけ出して母親に向かうと、彼女はテレビを見ながらこたつに入っている。もう冬が

終わったというのに、家は衣替えをしていない。それだけ母親が今何もしないのだ。

「お父さん、昨日心配していたわよ」

「……ごめん」

いつも自分だって帰って来ないじゃない。そう言いたいのをぐっと堪えて、とりあえずは返事をする。だが、それだけで彼女の怒りは治まらないようだ。首だけ振り向かせ、徳子を睨む。

「お父さんはね、仕事をして帰ってくるんだから、せめてご飯の支度はしてあげてほしいの」

自分がして行けばいいじゃない。心の底からその言葉を言いたかった。拳を作り、自分の太股を思い切り叩く。

「……分かった」

しかし、実際には言う勇氣などない。言えば、彼女は物凄く驚いた顔で徳子を見て、ため息をつくに決まっているのだ。そんな思いをしてまで一緒にいたくはない。

「明日の夜、お母さんはまたお兄ちゃんの所にいるから」

「また？」

思わず苛々が爆発しそうになる。もう一度、太股を強く叩く。それだけでは飽きたらずに、服の上から抓る。

「仕方ないでしょう。お兄ちゃんは、一人で生活しているんだから。誰かが助けてあげないと」

母が兄に対して熱く世話するのは昔からだった。徳子の僻み根性もまた人一倍で、中学時代はそれがストレスとなり、胃潰瘍になった。それも最近では諦めに変化していたが、この横暴に押さえ込んでいたものがふつふつと湧き出してくる。

「そんなのお兄ちゃんの勝手でしょ。どうしてそこまでやる必要があるのよ。どうせ遊び回っているんじゃないの」

母親は、目の前にいる徳子の怪我に気づくことさええない。労って貰いたいわけでも、可愛がって貰いたいとも、もう思わない。せめて視界に入れて欲しい、と願うだけだ。それを許してくれなければ、もうここにいることさえ嫌になってしまいうだった。

「あのね、一人がどれだけ寂しいか、分らないの？」

同じ事を言ってやりたかった。目的を持って一人暮らしをしている兄と、家族が一緒に

いるはずの家で一人ぼっちの徳子と、どちらが可哀相だというのだ。抓っている感覚がま

るで無くなった時、徳子の口は勝手に動いていた。

「いい加減にして。お母さん達おかしいよ。どうしてそんなにお兄ちゃんを庇うのよ。絶

対に変よ！ 何を隠しているの」

一気に胸にあったものを吐き出すと、頭がすーっと冷えるように冷静になった。そして、

加奈子の顔を思い出す。ここで爆発するべきではなかっただろう。だが、もう遅い。言葉に出していたことは、母親の顔を見れば間違いなかった。

「何を言っているの。隠しているなんて、どうして思うの」
まるで息をひそめるような声で言う。さっきまでの迫力はもうない。不審そうに徳子を見

てから、テレビに目を戻す。それだけで、自分の勘がはずれていないと確信出来る気が

した。テレビを見ている母親の、どく、どくと脈打つ音が空気を振動して伝わってくるようだった。

「どうしてって……」

はつきりと言い切るには何も持っていない。様子がおかしいだけでは、意味がない。徳

子がそれ以上を言わないことに安心したのか、母親はほっと息を吐く。そして、少し高

なった声で、また呆れたように言い放つ。

「変なことを言わないでよ。徳子。アルバイトもいいけど、これだけは言っておく。きち

んと帰ってきなさい」

「……はい」
話は原点に戻ってしまった。それで終わりだった。母親は、それ以

上何も言うことなく、
またテレビの画面に夢中になった。徳子は痛む身体をさすりながら、階段を必死で上っていった。結局、怪我には気づいてもらえない。この家にいる存在の無意味さに悔しくて、唇を噛みしめながら、泣いてはいけなさと何度も自分に言い聞かせた。

二階の隅にある徳子の部屋は、電気をつけないと夜は真っ暗だ。駅前の灯りが到底届くはずもなく、それ以外にこの近辺にビルも存在しない住宅街だ。一度眠れば、ほとんど目覚めることもないのだが、その闇を引き裂くように今夜は女性の鋭い声が響いた。夢かと思ったが、確かに自分の部屋である。次に空耳かと思ったが、それも違った。階下で言い争う声は今も聞こえる。ふと枕元に置いてある携帯を開くと、画面の光が徳子の顔を照らす。そこには十時半と刻まれていた。母親と揉めた後、徳子は二階に上がり、傷口の消毒をして布団に入ると、すぐに瞼が重くなってしまったのだ。そのまま寝入ること、数時間以上。昨夜は遅くまで加奈子と話していたこともあり、身体も疲れていたのだろう。

階下の叫び声は母親に違いない。だが、何を言っているのかまでは聞き取れなかった。ゆっくり身体を起こすと、熟睡したからか幾分軽くなっているように感じた。傷の痛みも、朝よりも断然良い。これならば明日から普通に起きられるだろうと思ってから、ゆっくりと部屋のドアを開く。そこでもまだ内容まで聞こえない。リビングのドアも閉めているのだろう。一段、一段と足音を殺して階段を下る。少し前までは祖母も一緒に暮らしていたため家の至る所に手摺りがある。もちろん階段も例外ではなく、今の徳子にはだからこそゆっくりと下りることが出来た。少しずつ母親の声が鮮明になっていく。

「どうして分からないの！ 全てあなたのためでしょう」

母親の声がひときわ甲高くなる。

「おいっ！ 徳子に聞こえるだろう！」

やはり、二人には隠し事があったのだ。母親が、それを遮るよう
にまた叫ぶ。

「あの子は勘づいているわ。きっとあの子もあの声を聞いたのよ！」
声……。徳子は階段の中腹で腰掛けると、じっと耳を澄ませながら
も首を傾げた。声と

は誰の声のことだ。それが最近のこの不穏な家の空気と関係がある
のか。

「それは、お前の気のせいだ」

幾分冷静になったような父の声がする。

「気のせいだと思うなら、一日家の中にいてみなさいよ。聞こえる
のよ。それが間違いな

ら、きっと誰かに知られたのよ。そうよ」

「やめろ！」

父親が怒鳴るなど滅多にない。おかげで、徳子の身体も飛び跳ねて
しまった。

「とにかく、車庫に近づかせるな。なんとしても隠せば平気だ」

父親のそれに、今度は身体に震えが走る。車庫、ということはやは
り徳子の想像はあな

がち間違いではないということだ。やはりこの家は崩れかけている。
徳子は痛む身体を押さえて部屋へと戻った。後ろから、母親の金切
り声が追いかけてくる。このことは加奈子に告げるとして、これ以
上今は知りたくはない。部屋のドアを閉めても、声が微かに漏れて
きて、内容が聞こえないのが却って気になってしまう。

部屋の窓を開けると、ちょうど窓の下には屋根がある。一階の和室
が庭に突き出るように造られていて、そこが瓦屋根になっているの
だ。ほとんど悪事を働いたことのない徳子も、昔読んだ漫画に憧れ
部屋からの脱出を試みたことは数度ある。あの時も家に嫌気が指し
ていたが、なによりも抜け出してみたかったのだ。それは見事に成

功したが、外に出ても楽しいことなどなかった。夜の住宅街などなにもないし、それに暗闇に開放感を味わうよりも恐怖が先に立った。その時も、徳子は変な男に遭遇した。あれは小学生の頃だっただろうか。しつけの厳しい祖母と、家にあまりいない父親に愚痴を吐く母親に嫌気が差した夜だった。あの時もこれくらいの時間だった。昔はこの時間に起きていることなどなく、それだけでいけないことをしているようだった。

「こんな時間にどうしたの？」

適当に住宅街をうろついていると、背後から声をかけられた。振り返ると、そこに立っていたのは、当時の父親より若干年上に見える背広を着た男だった。頭が禿げているのは小学校の校長にそっくりで、なぜか嫌悪感はなかった。

「別に」

それでも常識はあった。知らない人間についていくほど、馬鹿ではないはずだった。

「君、徳子ちゃんでしょう。おじさん、通りが一本向の家に住んでいて、お父さんとよく話すんだよ」

「え？ 本当？」

ほとんど昼間家にいることない父親の世代は、子供達にとっては未知の世界だ。そう言

われると、素直に信じて安心すると同時に、家を抜け出したことを告げ口されるのではな

いかと不安になる。

「大丈夫。今日のことは誰にも言わないから、おじさんの家においてよ」

なんと無知だったのかと思う。今だったら、当時の自分に張り手を食らわせてやりたい。

だが、徳子は行き場所があったわけでもなく、ただその男についていった。裏の道だと言

ったから。やばいのではないか、という気持ちと同時に、冒険をし

ているような気分にな

った。だが、徳子の前を歩く男は住宅街をまっすぐに突っ切ると、原っぱの前で言ったの

だ。当時、まだこの辺りには新しく家が並び始めるピークの時だった。おかげで森は切ら

れ電車が通るようになり大人達は喜んだが、子供達の遊び場所は減っていった。その

中でも、公園の次に空き地として放置されている場所があった。男はその前で言ったのだ。

「おじさんトイレに行きたくなっちゃった。ちよつとここに寄ってこうよ」

そこは徳子がたまに友達と遊ぶ場所で、グラウンドのように広くはないが、土は軟らか

く、危ないゴミも落ちていない。反対に、何もないこと、それがよかった。数本植えられ

ている木にも登れたし、かけっこをするには充分だった。だが、公園と違って、そこにト

イレなどない。それに家が近いのならば、家に早く帰ればいい。どうしても我慢できない

のなら走ってもいい。痛いほどに腕を掴まれ、恐怖で声が出なかった。連れられて入った

広場は、いつもの通り何もなかった。どうしようもない恐怖から、徳子も尿意を催してき

た。恥ずかしくて言えるはずもなく、ただじっと男の用が済むのを待とうとした。学校か

ら帰ってきた服そのまま、スカートを履いていることも誤算だった。夜風に足の間がス

ースーと冷える。

「とくちゃん、おじさん手が使えないんだ。こっちへ来て手伝ってくれないかな」

嫌だ、咄嗟にそう思ったが、弱みを握られているようで逆らえなかった。土を踏みしめながら、そっと近寄る。だが、口に出せなかった。気持ち悪いという感情が生まれ、一気に帰りたくなったのだ。暗闇に浮かぶあの男の姿を、徳子は今でもはっきりと覚えている。顔はぼんやりとしか思い出せない。心が忘れようとしているのか、それとも本当に記憶から消されてしまったのかは定かではない。だが、確かにあの男に徳子は傷つけられた。

「どう？ おじさんの、綺麗？」

小さく悲鳴が漏れたのは覚えている。それが自分の口から出た物だと気づいた時には、

正氣に戻った。その男の手が使えないというのは真っ赤な嘘だ。そいつは完全に自分の一

物を外に出し、そこから黄色い液体を放っていたのだ。振り返った男のそれが、近寄った

徳子へ向けられ、放物線を描いて靴にかかった。

「いやだ！」

初めて本音が漏れたが、男は動じない。そっと口元に人差し指を当てて静かにするよう

に示すと、さらに徳子の方へと迫ってくる。そして、息を乱し、瞬きのしない目で言った

のだ。

「おじさんのここ、掃除してくれないかな」

液体を出し続けたまま、そいつは徳子の方へとにじり寄ってきた。

すでに靴にはじんわ

りと温かさがしみこみ、それが尿だと思うだけで吐き気がこみ上げた。ちょぽぽ、とい

う最後の液を出し切ると、急にすーっと足下が冷える。萎びた男の物が、だらしなく垂れ

た。それが合図だった。徳子は濡れる足下を必死で前に動かして家までの道に戻った。何

度も後ろを振り返ったが、男は追いかけてはこなかった。あの時は両親に言うことも出来

ず、靴もゴミ袋に入れて学校の焼却炉へ放り込んだ。誰にも言えず、じっと心にしまい込

んでいたもの。ふとした瞬間に思い出して、あれは悪い夢だと自分に言い聞かせる日々。あれ以来抜け出すことはやめていた。家が嫌で抜け出しても、また嫌な目に遭う。逃げ

だし続けても、嫌な目に遭うならその場所へ留まっても同じだと思っていた。でも、今は

それでも抜け出そうと、あの日から初めて思えた。身体はまだまだ痛む。それを我慢して

屋根にそつと足を下ろす。

そこからは、庭に置いてあるガラスケースに足を下ろす。中にはサボテンや、小さな籠

に入った花が置かれているが、案外それが丈夫なのは承知だ。ただ、靴がない。庭にジャ

ンプすると、多少の痛みで呻き声を上げる。家の雨戸はぴつちりと閉められ灯りも漏れて

いない。今の声が聞こえていることもないだろう。そつと庭に置いてあるサンダルを履く

と、徳子はそのままそつと門から外へ出た。そこらが問題だ。昔と同じように、徳子に

行く場所はない。これからどうするかと考えて、唯一持ってきた財布と携帯をポケットか

ら取り出す。そして、最初に履歴に残っている恵の番号を押した。何度かコール音が鳴り

響くが、相手が取ることではない。恵は総菜屋でアルバイトをしているので、おそらくそれ

か、仲間内での飲み会に参加しているのだろう。ため息を吐き、とりあえずコンビニに向

かう。サンダルであること、身体の痛みを考えれば行動範囲は限られる。加奈子のところ

へ行こうかと考えながらコンビニへ入ると、十一時を回った今、人はほとんどいない。レ

ジに男が二人と、雑誌を立ち読みしている女の子が一人。ここら辺は徳子の大学の学生が

一人暮らしをしていたりもするが、見たことのない顔だ。

「いらっしやいませー」

気だるそうな店員の声は儀礼的なものでしかなく、徳子の顔を見ようともしない。それ

でも、足下が気になり店の奥へと逃げる。そこで飲み物を選ぶ振りをしながら、徳子はこ

れからどうしようかと考えた。その時だった。手に持ったままの携帯が振動する。恵かと

喜び画面を開くと、そこには知らない番号が表示されている。一瞬、このまま放置してお

うかとも考えた。だが、もしも救いの手だとすれば、助けて欲しいと思ってしまうのだ

から、まだまだである。加奈子には二日連続で世話になるわけにはいかないと思い直し、

どうにかしなければと考えていた矢先だ。

「もしもし？」

徳子が警戒して声を出さずに電話に出ると、相手もさらに慎重な声で話しかけてきた。相手は男だが、心当たりはない。

「もしもし？ 徳ちゃん？」

低い声でそう言われ、心臓が瞬時に跳ね上がる。電話での声だけで相手を判別するのは難解だ。だが、それが期待していたものであるかもしれないと、手が震えた。かろうじて声を出そうとした時、

もう一度相手の声がする。

「徳ちゃんだよな？ 俺、誉田だよー」

急に元氣を取り戻したそれは、反対に徳子の心を大きく沈めた。昔、徳子の携帯にたくさんかけてきた、あの田辺だと思った自分が情けなかった。過去を引きずっている自分を、思い切り笑ってやりたくなる。

「徳ちゃん？ 大丈夫？」

「ああ、うん。大丈夫」

この馴れ馴れしさが徳子は苦手だ。だが、バイトを辞めるつもりもないので、あまり無下にするわけにもいかない。

「ねえねえ、今話しても大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫」

そう言いながら、コンビニの中で話し続けるのも気が引けて、おにぎり数個を掴むとレジへ持っていく。

「ちょっと待ってね」

誉田に了解を取って電話を一度レジに置き、支払いを済ませる。袋をぶら下げてコンビニ

ニを出ると、電話を耳に当てる。急いで徳子は電話に出たが、誉田は電話の向こうで、部屋に大音量でかかる音楽に合わせて熱唱していた。

「ちよっと！」

あまりの大きさに徳子が叫び返すと、誉田は音楽を止め、大きな声で笑った。

「ごめん、ごめん。俺、専門学校に行っているんだけど、明日発表でさ。で、何だっけ」

「え？ 誉田君がかけてきたんじゃない」

徳子が不審気にそう返すと、さらに誉田は電話の向こうで声を上げて笑った。

「ジョーク、ジョーク！ 通じないね！ とくちゃん」

ポップコーンのケースを持って、真奈美に絡む誉田の姿が脳裏に浮かぶ。徳子は困って

無言で応戦する。こういうタイプが一番苦手だ。誉田もそれが分かったのか、咳払いを軽くしたあと、神妙な声で呟いた。

「話があるんだ」

その切り出しに、徳子が今度は咽せてしまう。

「……何？」

誉田とは、まともに話したこともない。いつも真奈美に絡んでくるのを横で見ただけだ。誉田はそれでもなかなか話し出さなかった。そしてやっと声

を出した時、内容は徳

子の予想したものとはまた違っていた。

「あのさ、真奈美のこと、徳ちゃんはどう思う？」

真奈美のこと。誉田が知りたいのは何なのだ。徳子に関することならまだしも、余裕のないときにそんなことを言われても、まともに答えられるわけがないだろう。助けてくれるどころか、追い打ちをかけられそうで不快感から逃げたくなる。

「どういうこと？ 意味が分からないんだけど」

誉田が自分に好意を寄せているかも知れないと思ったことが恥ずかしくなる。携帯の番号は誉田に教えていない。そうなれば、真奈美に聞いたか、事務所の緊急連絡先を見たに違いない。そこまですることに強い意志を感じたはずなのに、検討違いだったようだ。この男は、真奈美に対する徳子の評価を聞くために電話をしてきたのだ。

「いや、大したことじゃないんだ。ただ、どう思うかな、とね」

「私が嫌な子だって言ったら、どうする？」

恵が言っていた、真奈美の姿を思い出す。人を使って悪巧みをする嫌な子。それが彼女

の本当の姿だとすれば、誉田も幻滅するだろうか。

「それは……、そう思うの？」

誉田の心配そうな声を聞くと、徳子の口からふっと笑いが漏れた。結局、最後まで残酷

になれないのは、自分が弱いせいだろうか。いくら他人と距離を取ろうとしても、傷つけることは出来ない。

「ごめん。嘘だよ。真奈美はいい子だと思う。本当だよ」

幾分安心したようにため息をついた誉田だったが、それでも食い下がる。

「徳ちゃん。本当にそう思う？」

真面目に弁護するのもなんだか悔しくて、無言で応戦する。

「え？ どう？ 本当にそう思うの？」

「誉田君は、真奈美のことを好きなんですよ。それなら、それでいいと思うよ」

周りに評価されることを目標としてはいけない。それは友達だけでなく、恋人なら尚更

だ。自分がいいと思わなければ意味がない。誉田は素っ頓狂な声を上げると、当然のことながら焦って否定する。

「違う！ 違うよ！」

「大丈夫。本人には言わないから心配しないでね」

徳子は適当に受け流すと、電話を切ろうとした。

「……分かったよ。徳ちゃん、今どこにいるの？ 車の音がするけど」

誉田もふざけているようでよく気が付く。彼も、だ。これなら真奈美も安心だろうと考

え、徳子は否定しなかった。

「家の近くのコンビニ。ほら、映画館の奥の通りにあるでしょう」

「ああ。あの公園の向こうの……って、大丈夫」

「大丈夫って。あれは」

嘘なんでしょう？ のど元までその言葉が出かかった。だが、誉田が真奈美に夢中であり、嘘だと知らないで付き合っていたならば、彼を傷つけるかも知れない。そう思うと言えなかった。そんなこととはつゆ知らず、誉田は畳みかけるように話す。

「ほら、この間話しただろう。変質者の噂、徳ちゃんも忘れていないよな。危ないよ。俺、行こうか？」

誰も心配などしてくれなかった。徳子の胸に、誉田の言葉が鋭く差し込み、涙が出そうになる。

「ううん。本当に近いから大丈夫。明日、またバイトでね」

うっかりとまた、線を越えそうになる。そんな会話をすれば親しくなるだけだ。

「うん。あ、そういうえさ、なっちゃんがバイト辞めるらしいよ。聞いた？」

なっちゃんとは奈津子のことだ。まだ徳子の耳には入っていなかったことだが、あまり

の突然さに驚く。真奈美とはしゃぎながらあの噂をしていた時の、彼女の小さな悲鳴が蘇る。

「え？」

驚く徳子に、誉田はなおも続ける。

「ほら、真奈美が言っていただろう。なっちゃんの家があの変な奴に喰われたって。

あれ以来、家から出なくなったらしいんだよ」

それが事実なら、真奈美のを見せてくれたメールも本物だということなのか。それだと、

恵が嘘をついたことになる。いや、恵の話も事実で、真奈美も嘘を

ついでにないだけなのかもしれない。それが一番友好的だ。徳子の頭で計算が終わりかけたころ、誉田がまた言う。

「いやー、こちら辺も少し前まではただの田舎だったのに、そんな奴らが出没するようになったんだよねあ」

「ああ、うん」

誰を信じればいいのか分からない不安感から、徳子は田中の言葉がよく耳に入らない。

今、田中に真実を聞いたただせば、何かが変わるだろうか。散々迷った末、徳子はそれを選ぶことは出来なかった。

「それじゃあ、とくちゃん、気を付けて。あ、くれぐれも真奈美には内緒で」

そんな挨拶さえ、徳子の耳を虚しく通り過ぎていった。まともな返事をする余裕もなく、誉田は電話を切り、虚しい音声だけが聞こえた。ポケットに携帯を戻すと、そのまま駅ま

での道を歩く。恵でさえも信じることが出来ないのだろうか。彼女に電話をかけて確かめ

ることも、助けを求める気にもならない。恵も信用出来なければ、行く所もない。自宅に

帰ろうかと考えた時だった。ふいに、近くで小動物が鳴いているような声が聞こえた。く

う、くうとも聞こえるが、それは唸っているようでもあった。瞬時に足を止め、周囲を窺

うと、茂みの中から徳子の方を窺っているものがある。だが、それは犬や猫の背ではない。

人間の子供ほだろうか。心臓がぎゅっと掴まれたように恐怖を覚

えたが、じつと目をこ

らした徳子は、ふっと笑みを漏らした。そう、その茂みから身を潜めるようにしていたの

は、あの原人だったのだ。

「よ。また会ったね」

徳子は、もうこの未知なる男に対して恐怖がなかった。男は、徳子の問いかけに答えるように、さらに、うっ、うっと呻いた。

「ねえ、そっち行ってもいいかな」

すると男は、何も言わずに茂みの中に引っ込んでしまう。仕方ないか。そう思った時だった。数メートル先にある公園の入り口付近に男の顔がちらっと見え、すぐに引っ込んだ。来い、そう言っているようだった。徳子はなんだか無性に嬉しくなり、公園の入り口へと足を速める。そこに足をかけた時には、男の姿が無くなっている。どこへ行ったのだろうか。

徳子が一歩ずつ公園の中へと踏み込んでいき、まるで秘密のかくれんぼをしているような感覚だった。それにしても、あの男の素早さには度肝を抜かれる。

「ちょっとー」

徳子は公園の奥へ向かって仕方なく呼びかける。すると、足下でまた、先ほどのうっ、

うっとな声が上がった。そちらに目をやると、再び男がじっと茂みから徳子を見上げている

「怖いって」

苦笑い混じりに言ったが、男は身動き一つしない。

「今、ちょうどおにぎり買ったの。タイミングいいね」

鞆から袋を取り出すと、それが分かったのか原人がごそごと茂みから身体を出す。

「はい。あたしもお腹減ったから半分ね」

周りの包装を破り、中のおにぎりを出し、半分に割る。徳子が上げる前に、原人は手を

差し出していた。それを上下に振り、催促する。

「食い意地張りすぎだつて」

原人は何を言われたのか分からないのか、おにぎりを受け取ると大人しく徳子の隣に腰掛ける。

「ねえ、かなちゃんが言っていたんだけど。あなた、原人なの？」

あなたがジャワ原人だ

つていうのは本当？ 他に仲間はあるの？」

原人はあげたおにぎりを一口で食べ終えようと、じつと徳子の分を見つめている。

「だめだよ。あげたでしょ」

「うっ、うっ」

身体を前後に揺らし、原人は徳子のおにぎりを見つめる。

「仕方ないな。半分だけね」

真剣に見つめるその瞳に苦笑いをして、徳子は原人にもう半分を手渡す。またあつという

う間に食べられてしまう。

「さっきの聞いていた？ かなちゃんが、あなたが原人だろうって言っているの。かなち

やんって、あたしの知り合いなんだけどね」

「げん、じん」

「うん、そう」

会話が成り立つことだけで嬉しくて、徳子は大きく頷いた。

「そう。げん、じん」

やはり聞き間違いではなかった。これは大きな発見であるが、徳子は誰に言うつもりも

なかった。ただ自分の胸が膨らんでいく。こうなると、噂になっていることが心配でもあ

り、自分だけの秘密にしたくなる。マンホールを通して移動していれば、いずれ誰かの目

につくだろうし、下手をすればニュースにもなりかねない。それだけは避けたかった。

「ねえ、約束しない？」

「や、くそく？」

「そうだよ。約束」

「や、く、そく」

永遠と続きそうなその繰り返しを区切るように、徳子は声を大きくしていった。

「これからは、人に見つかってはダメ」

「見つかる、ダメ」

原人の言葉はどれもっている。見つかる、も徳子の耳には、みでゆかる、と聞こえる。原人は瞬き一つせずじっと徳子を見つめていた。空には星が散りばめられ、二人がこの地球上で残された人類のような気になる。徳子はどうしてもこの原人を手に入れたかった。

「分かった」

そう言うと、原人はそっと徳子に向けて小指を差し出す。

「え？」

戸惑いながらも、小指を絡める。

「よく知っているね」

徳子がそう言い笑いかけたが、原人の注意はもう他に逸れていた。

「ち、ち」

何のことだろうと思ったのは一瞬だった。原人は、徳子の履いているズボンに鼻をこすりつけるようにして寄ってきたのだ。

「ちょっと待って！」

原人が反応しているのは、徳子が転んだ時の傷に対してだ。傷の手当てはしてあるとは

いえ、それでもこの男には血の匂いが分かるのだ。

「待って！！」

そう言い、男の肩を両手で持って引きはがす。

「もう一つ、約束」

「あ、やく、そく」

「そう。これから、ご飯は持ってきてあげる。だから、猫とか、変な物は食べたらだめ」

「へんなもの、たべない」

一言を大事に発しながら、原人は繰り返す。

「そう。だから、血、も気にしない」

無謀かとも思った。この男が今まで何を食べてきたのかも知らないし、ずっと動物を食べてきたのだとすれば、それは無意味な話だ。だが、男はまっすぐ頷いた。それに、徳子もほっとする。どこまで理解しているかは分からない。だが、それだけで今は充分だった。原人は、そんな徳子の気持ちに無関心であるように、ぱっと立ち上がる。そして、滑り台の方へと走っていく。

「あ、だめだよー！」

あんな男が遊んでいるところを誰かに見られたら、危なすぎる。徳子が追いかけると、原人はちらりと振り返った後、滑り台を越えて走り続ける。暗い公園の中、原人の後を徳子が追いかける。追いかけることをしようとしているというのに気づいたのは、それからまもなくだった。二本の足で走り、言葉は通じる。小さな子供と遊んでいるようで、徳子は嬉しくなって走り続けた。

5 歓喜か悲嘆か

寒さに身体が震えるようにして、徳子は目覚めた。雨が降っているわけではない。しかし、耳元でカサカサと小さな音がした。目を開けてもう一度大きく体が震えるとともに、両腕に鳥肌が立つ。目の前にあるものに驚いて身体を起こすが、その瞬間目眩がする。数秒、自分がどこにいるのか把握できないまま、ゆっくりと昨夜のことが蘇る。公園の中を痛む身体に鞭を打って、二人で遊び回った。原人の外見はとうに二十歳を超えているが、それでもまだまだ体力はあるようだった。それに実際の年齢は不明だ。本当に原人ならば年齢の把握は難しいかもしれないし、一度だけ原人に聞いたが、彼からの答えはなかった。

「やだ、そのまま寝ちゃって」

徳子が鳥肌を抑えるように肌をさするが、どうにも頭がぼんやりとする。

「うつ、うつ」

原人が小さく呻いた。そこは公園の一番奥にある土管の中だった。

徳子は原人に守られ

るようにして、眠ってしまったのだ。寒さで目を覚ましたが、それまでは心地が良かった。

鳥肌は立つが、寝ている間はまるでベッドに転がっているような気分だった。

「ごめんね」

まだ寝る態勢の原人に向け、徳子が謝ると、彼はむっくりと起きあがる。髪の毛はぼさ

ぼさだし、身体は土にまみれているのに、なぜか彼に嫌な臭いはなかった。原人は真っ黒

で絡まった髪の毛を数回ぶるぶると振ると、そこから隠れている小さな目で微笑んだよう

だった。天気は運良く晴れのようだ。目の前の大通りは、まだ朝早いからか車もまばらで、周囲で音はしない。帰るなら今のうちだ。徳子の感覚では、恐らく発熱している予感がした。

「遊び過ぎちゃったね。慰めてくれてありがとう」

「……いい」

徳子は口の中がカラカラだった。こうして話をしているだけで、喉が痛む。荒い息で言う

うと、原人はゆっくりと首を傾げた。

「約束、守ってね。誰にも見つからないようにするんだよ。そうしないと、もう遊べない」

徳子は、ふらつく頭を中心に保つので精一杯だった。だが、賢明にそれだけ言うのと、土

管から顔を出す。さらに眩しい朝日が、徳子の顔を照らした。うつと顔をしかめると、原

人が背中をさすってくれる。この男がどうしてここにいるのか、こんなにも自分と波長が

合うように感じるのか。そんな細かいことはどうでもよく、ただ徳子は嬉しかった。

「守る」

徳子はほっと胸をなで下ろし、土管から出た。まさか、こんなところで夜を明かすとは

思わなかった。原人を土管に残したまま、徳子は公園を後にした。

言っていることは理解

しているのだ。それよりも、またこんな風に帰宅をしたら母親に何を言われるか知れない

ことに思いやられる。しかし、土管の中で過ごしたせいで服のあちこちが泥まみれだ。一

刻も早く、誰にも会わずに帰りたいかった。身体はだるいが、傷は大

分マシになっている。

よろめきながらも、確実に痛みは感じなくなっていた。途中、部活の朝練習に向かうだろう

う中学校の制服を着た女生徒とすれ違い、好奇の視線を寄せられる下を向き、なるべく

髪の毛で顔を隠しながら、必死で家への道を辿った。幼少時代と同様、やはり夜に家を抜

け出している目には遭わなかった。しかしそれでも、原人のせいで後味は悪くない。家の

周りは、比較的年配の人間が多い。隣は一人暮らしの男、向かいはもう子供は成人して家

にいない年配の夫婦、朝の活動でさほど顔を合わせることはない。それが都合良く、徳子

は玄関まで誰にも会わなかった。財布の中に入れている鍵を取り出すと、玄関をそっと開

く。母親に小言を言われることを覚悟したが、家の中から物音はしない。彼女は専業主婦

であり、昼間は常に家にいるはずの人間だった。だが、今は違う。それでも、ラッキーだ。今のうちにベッドに入ってしまうおうと思っ

てから、午後にバイトが入っていることを思い出した。大学は休むことにして、二階への階段を上がろうとする。サンダルを脱ぎ、あ

とで縁側に戻そうと脇に寄せた時だった。玄関に、母親が出かけるときに履く靴が残って

いるのだ。だが、家の中からは物音一つしない。あまりにも早すぎる時間なのかと携帯を

取りだし確認してみるが、ちょうど七時を回ったところだ。普段ならば父親の出勤時間が

近く、母親は家の中で活動している。その父親の姿も見えない。しんと静まりかえった家

に、恐る恐る足を踏み入れた。二人とも寝坊しているのかと、徳子はやはり階段に足をかける。二人の寝室は徳子の部屋の隣だ。顔も見たくないが、寝坊していたら起こさねばならない。階段を上がると、目の前が徳子の部屋、手間が両親、奥が兄のだ。つまり、今は

夜になれば一階は空になる。以前は祖母がリビングの隣の和室にいたが、今はそれも物置のようになっていた。

「お母さん？」

ドアをノックすることなく開く。薄い隙間から中を確かめたが、誰の姿もない。

「お父さん？」

母親同様、父親の姿もない。二人でどこかへ出掛けたのかと思ったが、次に不安が襲う。

もしかして、自分が抜け出したことに気づかれたのではないだろうか。部屋が空っぽだからと、警察に行っているかもしれない。事件に巻き込まれていると

思われたのではないだ

ろうか。どうしよう。咄嗟に駅前の交番に行こうかと考え、携帯を取り出し、急に馬鹿ら

しくなる。そもそも、両親は用事があれば、まず徳子の携帯に電話することもできるのだ。だが、不在着信はない。苦笑いを漏らし、ポケットへ戻す。これなら抜け出したことも

ばれてない。安心だ。そっとドアを閉めて自分の部屋に戻る。汚れた衣服を変えるため、

筆筒から新しいものを取り出す。ここで部屋着になれば、バイトに出るのが億劫になるは

ずだ。徳子はバスタオルと一緒に服を持つ。身体はだるいがこのままベッドに入れない。

シャワーだけでも浴びようと、階段を下りる。だが、その時、微かに階下で音がした。び

くつと徳子の足が震える。次には、まるで何かを床に叩き付けるような音。怒りを吐き出すような、耳を塞ぎたくなるほど激しい音。

「お母さん？ お母さん！」

脳裏に浮かぶのは、母親が父親に殴られ、床に倒れこむ映像だった。しかし、それならば、どうして母親は玄関に出て来なかった。そんな疑問を並べながら、階段を素早く下った。リアルに迫る一階が、近づいてくるのに行きたくない。助きたいのに、怖かった。だが身体は勝手に動く。その間にも、何度も何度も叩き、蹴る音がする。やっとリビングに入り、奥に続く和室の障子を開けた時、徳子は硬直した。目の前で繰り広げられる映像が理解出来なかった。しかし、母親が死に近づいていることだけは確かで、大きく息を吸い込むと、一気に吐き出した。徳子の悲鳴が家中に響き渡る。そして、それに反応するように、母親の顔が歪む。徳子の前で行われていることが、信じられなかった。彼女は、身体の反面が床に埋まっているのだ。彼女は畳を突き破り、地中に引きずり込まれようとしていた。畳の下は板になっており、さらにその下には家の骨組みや、コンクリートもあるはずだ。それを物ともせず、母親の身体は埋まっている。そして、それが、徐々に進んでいるのが眼に見えて分かるのだ。

「お母さんっ！」

徳子は咄嗟に駆け寄ると、母親の伸びた両手首をしっかりと掴んだ。その感触を得たからか、母親はぱっと両目を見開くと、口を半分開けた。だが、その間にも身体は引きずり込まれ、次第にのど元まで埋まっていく。そのせいで声が出ないのだろう。掠れた音だけが虚しく宙に消える。

「やだ……。どうして！ お母さん！」

母親は声が出ないようだが、必死で地上に残ろうと両手で畳を掴む。肘で押さえ、引きずり込まれないようにと、首を伸ばした。目

玉は飛び出て、首はこすれて、血が畳に流れ落ちる。徳子も必死で引き上げようと、腕を引いた。髪が乱れ、母親は堪えきれなかったのか、徳子の足首に向かって吐瀉物を吐き出した。それが手首を掴んでいた徳子の手にもかかる。朝は食べたのだろうか。昨夜の残りだろうか。それが何かは原型を失っているが、オレンジ色のどろっとした液体が畳を汚す。一瞬手を離しそうになるが、ぐっと堪える。酸味の強い刺激臭が鼻を刺し、のど元に何かがこみ上げる。それを必死で堪えながら、足に力を入れるが、もう限界だった。視界が揺れる。

「お母さん、ごめん」

それに母親が答えるのを聞く間もなく、徳子は畳の上に倒れ込んだ

＊

「とく！ とく、起きて！」

身体を揺すられて徳子が目を開けると、鼻をつく臭いは健在だった。母親の姿はない。代わりにそこにいたのは恵だった。

「あれ？ どうしてここに」

身体を起きあがらせることさえままならず、徳子が呟くように言った。口を開いただけで、吐き気がする。反対に、恵は大きな瞳を潤ませてあらんかぎりの声を上げた。

「徳子！ 生きていた！」

そう言うのと、その場に座り込み、大声を上げて泣き出してしまった。

「めぐ。学校は」

「それどころじゃないでしょう！」

髪の毛を頭の上で一本に結び、水玉のシャツを着ている彼女は笑顔が似合う。こんな風に泣き叫んでいる恵を見るのは、この数年の付き合いで初めてのことだった。

「私、昨日飲み会で酔っぱらって、徳の電話に気づかなくて！ 何回かあったのに朝氣づいて、でも二日酔いですぐ動けなくて」

そんな恵の姿が想像出来て、つい徳子もふふ、と力なく笑う。

「でも、徳に電話をしても繋がらなくて、心配すぎて来てみたら、チャイム押しても誰も出ないし」

初めは、どうして恵がいるのか考えていたが、彼女の話を聞いているうちに、徳子の頭も覚醒していく。そして、自分がここに寝転がっている理由をはっきりと思い出す。

「庭に入ってその窓からリビングとこの部屋を覗いたら、徳子が倒れているし、私焦って、焦って」

「お母さん！」

徳子は飛び起き、畳の穴を覗く。家の中に向けてもう一度大声で呼びかける。だが、返事はない。

「とく、どうしたの。何があったの……。これ」

恵が驚くのも無理はない。だが、今の和室の光景は、あの時、母が地面に引きずり込ま

れたのが決して夢ではないことを裏付けていた。畳には割れたような裂けた穴が空いていた

た。しかし、その下の床には母親が通ったような穴はない。綺麗な板が現れている。ただ、

母が残したオレンジ色の吐瀉物は畳にへばりついているし、畳は穴が空いているし、その

穴には、おびただしい量の血が付着している。

「この血、何？ どうして、徳が倒れているの！」

徳子は、ここで寝ていただけなのに、朝目覚めた時のような倦怠感と鳥肌がたつような寒さは感じなかった。

「めぐ。お母さんが、消えちゃった」

徳子が呟くと、恵は口を開けたまま、頷く。そして、なぜ？と先を促した。なぜかなど、それは徳子が一番聞きたいことだった。父親はどこへ行ったのだろう。

「なんでだろう」

なぜ、なぜ、なぜ。それがぐるぐると駆けめぐるだけで、答えは出ない。あんなことがあり得るのか。

「あたし……、助けてあげられなかった。お母さんが、地面に埋まっ
ていって」

「埋まる？ この血は、おぼさんの血なの……？」

恵は徳子の家に何度か遊びに来たことがある。母親とも面識があった。徳子が頭を抱えて踞っていた時だった。ふと、和室に天井から笑い声が降ってきた。いや、地面からだろうか。小さく耳元で囁かれるような声は、女のもののようないきがした。

「……めぐ？ メグ！ 聞こえたでしょう。今の笑い声！」

徳子が顔を上げると、そこには驚きつつも何かを恐れているような恵の顔があった。それも、徳子に初めて向けられる視線だった。

「聞こえないよ、徳。どうしたの？ 大丈夫だから、今、警察を呼んであげるよ」

恵がポケットから携帯を取り出して発信をしようとした時、徳子は慌ててそれを奪った。

膝建ちになったので、膝小僧に畳が刺さる。

「徳？ 大丈夫。警察が来れば、どうにかしてくれるよ。強盗かもしれない。笑い声なんて聞こえない。気のせいだよ」

―それは、お前の気のせいだよ

同じ言葉をどこかで聞いた。どこだ。

―声が聞こえるの。この家にいると声が聞こえるのよ！

母親の声が、徳子の耳に蘇る。そうだ。あれは昨夜、母親が父親に訴えていた声だ。それを、徳子は今聞いてしまったというのか。

「お母さんは、どうして聞こえたんだらう……」

どうして恵には聞こえないのだらう。自分だけが誰かに見張られているようで、急に怖くなる。

「徳！ 聞いて。警察が嫌なら、どうする？ おじさんや誰か他に頼れる人はいないのかな。あ、徳のお兄ちゃん」
「やめて！」

母親は、あんなにも兄に優しくしていた。それならば、母親を守れなかったと知ったら、兄に責められるかも知れない。いつかは知られることだ。だが、今は、まだ無理だ。それに、あの光景を警察はおろか家族でさえも信じてはくれないだろう、と思えた。信頼する人間。そうだ、一人居る。

「……かなちゃん」

「え、誰？ 高校の時にそんな子いたっけ。中学の友達？」

「ううん、大人なの。うちの大学の助手さんで、昔近所に住んでいた」

「徳、携帯！」

恵に言われた通り、徳子はポケットから携帯を取り出す。恵の携帯が徳子の手から滑り落ち、ごとっと音を立てて畳に転がった。携帯に登録してある加奈子の名前を告げると、恵は素早くボタンを押していく。頭がうまく回転してくれない徳子は、じっとその姿を目で追っただけだ。

「ちょっと待っているんだよ」

そう言い残すと、恵は携帯を持ったまま立ち上がりリビングへ行く。すぐに恵が加奈子に事情を説明しているらしき声も聞こえてきた。だが、その内容はほとんど徳子の耳には入らず、ただ呆然と畳の穴を見つめるしかなかった。いくつか言葉を交わしただけで、すぐに声がしなくなる。そして、恵は和室に戻ってくると徳子の腕を掴んで言った。

「ここにいるより、リビングで座ろう。加奈子さん来てくれるって。あと、徳、すごい身体が熱いよ。熱があるんじゃない？」

忘れていたが、今朝の熱は下がっていないのだろう。促されるままに立ち上がりリビングへ行く。そういえば、あのまま風呂にも入っていない。だが、恵は土まみれの理由も聞かなかった。ここで起こった惨劇のせいで汚れたと思っているのだろうか。

「シャワー、浴びなきゃ」

加奈子が来るなら尚更だ。

「徳、辛いなら身体拭いてあげるよ。熱もあるだろうし、寝ていた方がいいよ」

恵はそう言ったが、徳子が首を縦に振らないのを見て、廊下に散らばっていたというタオルと服を持ってきてくれた。徳子がまだふらつく身体で浴室へ向かうと、そこは、しっかりと掃除がされていた。洗濯物の残りはなく、風呂掃除もすでに済まされている。母親は、朝、きちんと起きてやるべきことをやった後だったのだ。玄関でもう少し大きく声を出して帰ってきたことを知らせれば、母親は助けを求めてきたかもしれない。それよりも、もう少し早く帰ってきていれば。そもそも、昨日の夜に抜け出さなければ。

浴室のドアを開け、シャワーの栓を捻る。窓から差し込む光はいつもと変わらず、それがあまりにも日常的過ぎて、この状況には不釣り合いだった。どうすればいいのかまるで分からない。お湯を頭からかけると、まだ肘や膝などすりむいたところが沁みて痛む。シャンプーや石けんで身体を洗う気にもなれない。おざなりで済ませると、お湯を止める。あの笑い声は確かに聞こえた。母親はあの声を聞いて、地面に吸い込まれていった。あれを聞くと死ぬのだろうか。母親はそれに怯えていたのだろうか。自分も、死ぬのだろうか。死ぬのも怖い。だが、それよりも何かが動き始めているのを感じるのが怖かった。逃げられない物に追いかけられ、そして喰われるのをじっと待っているだけの気がした。なぜ、この家なのだ。なぜ母なのだ。

「なんの恨みがあって」

恨み……。

「おばあちゃん？」

もし、これが祖母の恨みだとすれば、納得できるかもしれない。徳子にも気になるところがあった。祖母は、この家に恨みを持って死んでいったのだ。そして一人ずつ殺す計画で隙を見ているとすればどうだろう。結局のところ、どうして祖母は死んだのだ。それまでの思いを吐き出すように、徳子は暗い排水溝の底に向かって泣き

ながら、何度も、何度も吐き続けた。シャワーから上がると、ちょうど加奈子が家に着いた。チャイムの音に、恵が廊下へ飛び出してくる。

「あ、徳、出るよ!」

恵の叫びに頷くと、彼女は玄関に飛びつくようにして開けた。ドアの向こう側からドンドンと拳で叩いている音がして、徳は口の周りを拭いながらも驚いた。こんな時だというのに、吐いたら少しだけ空腹を覚えた。恵がドアを開けた途端、するりと外から猫のように忍び込んできたかと思うと、加奈子は靴を脱ぐのももどかしそうに、廊下をまっすぐ走り徳子の元へやって来た。

「よかった、無事だね」

ほっと息をはく調子で言う加奈子の声に、徳子も安心を覚えた。そっと抱きしめられ、

頭を撫でられると、それまで張りつめていた緊張の糸が緩むのを感じた。自分では分からないほど身体が強張っていた。すんと両肩が落ち、呼吸が楽になったようにさえ感じる。

「徳ちゃん。お母さんが、被害にあったって。何があったの?」

髪の毛をさらさらと梳くように撫でながら、加奈子は優しく言った。抱きしめられてい

るその肩越しに、恵が呆然と徳子達を見守っていた。リビングに移動して、徳子が加奈子

に支えられるように腰掛け、恵は和室の障子を閉めた後、ガラスの低いテーブルを挟んで

向かいのソファに腰掛けた。

「徳子が言っていたのは、どういうこと?」

ソファに座った瞬間、恵が聞いた。加奈子は隣で徳子の背中を呪文のようにさすり続け

ている。震える声で、徳子は事の次第を説明した。

「それは超常現象って、ことよね?」

加奈子の言葉にびくつと身体を震わせた徳子は、それでもゆつくりと頷いた。

「もしかして、それも徳がこの間言っていた変な男と関係有るの？」
「変な男って。恵ちゃん、だったわね。徳ちゃんから聞いていたんだ」

加奈子と恵は、初対面とは思えないほどに息が合っていた。おかげで居づらい雰囲気は

全くなかったが、次に何が起こるのかという恐怖と、あの母親の縫り付くような顔が頭から離れない。そんな中、恵が大きく首を振った。

「はい」

だが、あの男は徳子にとって今は大切な友達だ。昨夜も徳子が冷えないようにと包むよ

うにして守ってくれた。確かに、恵にうち明けた時はそうだったかもしれないが、今は違うと主張したい。

「あの人は、そんなに変な人じゃないよ。話しも出来た」

「話したの？ どうだった！」

徳子の話を、加奈子が途中で遮る。その勢いに、恵が言葉を詰まらせた。

「かなちゃん。あの人が原人かは、分からないから」

「原人？」

恵が、顔をしかめる。加奈子は、小さく声を漏らすと、咳払いをした。

「私、史学科の助手なの。ちょっと徳ちゃんの言うことに興味があつてね。その男っていうのが、もしかしたら世紀の大発見かもしれないの」

加奈子は、恵に説明をするとまた徳子の背中をさする。話は、原人のことではない。徳子は二人を交互に見ると、声が震えないように意識をした。

「お母さんは、おばあちゃんに呪われているんだと、思う」

加奈子には、徳子が兄を疑っていることは話してある。背中をさする手に力が込められたが、恵は初耳だ。驚きで立ち上がった後、和室に目を遣る。

「おばーちゃんって、徳子の？ どうしてそうなるの」

恵は、あの畳を見ても成り行きを信じられないようだ。だが、それと同じくらい加奈

子の顔色も悪い。家に着いた途端に抱きつかれ、ずっと隣にいたから分からなかったが、

この訳の分からない恐怖の中、平常でいろうと言われても無理だ。恵もひどい顔をしている。

それを見ると、どうにか徳子も自分を保つことが出来た。

「徳ちゃんは、家族に不審感を持っているんだよね」

加奈子が切り出し、続けるように徳子の背中を叩く。この事態で、信頼出来る

なら知っておいてもらったほうがいいかもしれない。恵に対しては、真奈美のこともある

が、やはり一番気の置けない友達だ。

「うち、少し前におばあちゃんが死んだでしょう？」

恵が唇を青くして頷く。

「それでね、実は話していなかったけど、あたしなりにおばあちゃんはまだまともな死に方じゃなかったと、思うの」

「詳しく説明して？」

こんなことを、まだ想像でしかないと話を話しているのだろうかという迷いもあった。

間違いでした、では済まされない身内の恥を、徳子は周囲に告げている。だが、母親のあ

んな姿を見た以上、自分の身も危ない。それにこの出来事の説明を誰かに上手く出来ると

は思えない。

「おばあちゃんが死んだ日、私は塾へ行っていたの。帰りは遅くな
ってしまった」

もうすぐ本格的な秋に入るというくらいの時期だった。そろそろ制
服の上にセーターを

羽織りたくなる季節。徳子の頭は受験勉強の計画でいっぱいだった。
まさか、祖母が急に

亡くなることなど考えてもいなかった。高校生の間に夢中で追いか
けた絆を一つ失い、遊

ぶ気分になど到底なれず、ただ黙々と勉強をする日々だった。その
日は土曜日で、兄が帰

宅すると聞いていた。母親は朝からそのための料理に夢中で、徳子
のお弁当のおかずも豪

華だった。空っぽになった弁当箱と疲れ切った身体を引きずるよう
にして予備校から帰る

と、家の前がなにやら慌ただしかったのだ。

「あ、徳子。おかえり」

家の前にいた母親は、なぜか真っ青な顔をして両腕を抱きしめるよ
うに組み門の脇に立

っていた。その母親の前を、初老の男性が過ぎていく。見送りをし
ているのだと気づき、

その男に顔を向けてみれば、彼を徳子は知っていた。

「あ、先生。こんばんわ」

徳子が挨拶をすると、男性は大きな黒い鞆を持って、同じように頭
を下げた。だが、余計な言葉も発することなく、徳子の家の前から
去っていく。男の着ている白衣が、通りの向こうまでよく見えたこ
とを今でも覚えている。

「お母さん。あれ、大木先生だよね。誰か具合悪いの？」

あの男は、徳子の家のかかりつけの診療所の医師であり、幼少時
代は夜中でもよく見て貰った。ただ、年齢を重ねるに連れて徳子が

小さな風邪では病院へ行くこともなくなり、久しぶりに見たあの医師は随分老けていた。唯一家で病院へ行くのは祖母くらいだったが、それも眼科や整形外科などで、内科の世話になることは少なかった。それだけ丈夫だったのである。

「徳子。驚かないでね。おばあちゃんが、亡くなったの」

冗談だとは思えないほどに、暗闇でも分かるほど母親の顔は青白かった。それと対照的に目が真っ赤に潤み、相当泣いたのであろうことが窺えた。驚かないわけがない。

「どうして？ 倒れたってこと？」

徳子が問いつめるように聞くと、母親はちらりと家を振り返った。「もういい！」

するりとその脇を抜けると、徳子は玄関へ飛び込んだ。廊下には背広を着たままの父親が立ちつくし、リビングへ駆け込むと兄が頭を抱えたままソファに座っていた。兄はとんでもない日に帰ってきた。その時は、そう思った。

「お兄ちゃん……。お父さん！ おばあちゃんが死んだって。本当なの？」

どちらも呆然としている二人に、徳子が興奮して言う。父親の目はが和室を指す。

「おばあちゃん！」

障子はぴっちり閉められている。そっと扉に触れると、そこまで冷気を感じる気がした。横に滑らせると、そこに布団の上に横たわった祖母の姿があった。彼女がいつも寝ている布団にしっかりと、普段と変わりなく眠っているようだった。だが、その顔には白い布が被せられ、テーブルの上でお線香が焚かれていた。

「どうして！」

最近は勉強で忙しく、ろくに話もしていなかった。それは、祖母がこんなにも早く死ぬなんて思わなかったからだ。元気だと思っていた。

「徳子。おばあちゃんにお別れを言いなさい。それと、通夜と葬式

がある。明日からしばらく学校を休みなさい」

父の声が、祖母の頭上に座る徳子に虚しく降ってくる。

「ねえ、お父さん。おばあちゃんはどうしたの？　なんで死んだの

！　朝は元気だったじゃない！」

動かない祖母を見ても、まだ現実感がない。みんなで騙そうとして
いるのではないだろうか。そんな気がしてならないのだ。

「……階段から、落ちたんだよ」

「え？　嘘でしょう？」

近年足腰の弱っていた祖母は、ほとんどの生活を一階で行っていた。そもそも、二階は祖母以外の者の部屋があるので、彼女が必要とするものはないはずだ。階段など、近寄ることさえなかった。

「おばあちゃんは、二階になんて行かないじゃない。どうして今日に限って行くのよ！」

次第に涙がこみ上げ、徳子の頬を濡らした。父親も徳子の脇に座り、娘がはずした白い布を元に戻した。

「お父さんが二階にいたんだ。お母さんはお兄ちゃんと外にいた。今日、お兄ちゃんが帰ってくることは、お前も知っていただろう」

兄が徳子に連絡をくれるわけではない。兄が帰ってくることは、母親の浮かれる姿を見れば判断出来る。

「それに、お前には心配させないように黙っていたが、最近おばあちゃんは頭の調子が悪かったんだ」

「なにそれ……。それならどうして、余計に一人にさせるべきじゃなかったじゃない！」

父親を睨み告げると、徳子はリビングにいる兄を目で探す。いつのまにか兄は姿を消し、その代わりに母親がじっと徳子を見つめていた。それは困ったような、何かを挑んでいるような視線だった。

「喧嘩をしたら、おばあちゃんが悲しむぞ。ほら、泣きやむんだ。それで、優しく見送ってあげよう」

父親はそう言うのと、徳子を自分の胸の中へとそっと押し込んだ。そう言われては、そこから逃れてしまうこともできなかった。全て

を封じ込められるような嫌悪感とともに、徳子はじつと祖母の亡骸を見つめていた。そのことがあってから、徳子は塞ぎ込むことも多くなり、進んで人と交わらないようになってしまったのだ。真実を知ることが、怖すぎて。

「そういうことなのね」

徳子がゆっくりと、順序を追って話し終えた時、隣に座っていた加奈子が言った。恵も、

じつと黙ったまま聞き入っている。そして、ぼそりと呟いた。

「そういえば、徳子あの時期暗かったよね。受験と……あのことがあって参っているのか
と思っていたけど」

あのこと、というのは、徳子が恋人でもあった田辺と別れた事である。

「まあ、それが原因なのも間違いない。田辺君のことは結構へこんだし」

徳子が失恋した時は、その少し前だった。恵には相談にも助けなくても貰った。あの時、逃

げずに立ち向かっていれば、こんなことにはならなかったのかもしれない。

「そう。大木先生、って、私も昔お世話になっていたわ」

加奈子も近所にいた時は、同じ医者にかかっていたのだ。

「でも、お家で、しかも階段となると警察も来たんじゃないかしら？」

ぶるっと徳子が身体を震わせると、恵が席を立った。何度か来ているこの家を、彼女は最低限知り尽くしている。

「来たみたい。と言っても、あたしが帰ったのは本当に遅くて、検証に来たっていうのを聞いただけなの。それに病院に運んで、息を引き取ったのは家じゃなかったらしくて厳しくはなかったみたい」

「それなら、徳ちゃんは何も見えていないのね？」

「うん……。まあ、そう」

徳子が頷くと、恵がテーブルに湯飲みを三つ置いた。

「ご免ね、勝手に。でも寒そうだから、お茶を入れたから飲んで。せっかくシャワー浴びたのに身体冷えちゃうよ」

彼女はこんな時も気が利いた。有り難く頂戴することにして徳子のカップを持つと、ほんのりと湯気が上がっている。嫌な記憶を思い出し、頑なに縛り付けていたものがほっと温かいものに触れた気がした。加奈子と恵の存在に落ち着きを取り戻していく。

「続きだけど。でも、それでどうしておばあさんが殺されたって思うの？」

恵は、徳子が数口呑んだのを見計らって切り出した。

「それから、家族の空気が変わったの。お兄ちゃんは家に寄りつかなくなったし、それでお母さんはお兄ちゃんの下宿先ばかり行くようになった」

「おじさんは？」

加奈子も湯飲みに手を伸ばしながら言う。しん、と静まり返ったリビングで、徳子の喉がなった。

「元々、お父さんは教師で土日も家にいないことが多かった。それだけが唯一変わらない」

「それで、徳ちゃんは、お兄さんが本当はバイクでおばあさんを轢いてしまったと、考えているのよね？」

「加奈子さん。そんな……」

言いつつ、恵の言葉が萎む。彼女も何かを感じ取っているはずだ。左からは加奈子の、そして正面からは恵の強い視線を受け、徳子は小さく頷いた。もう、逃げられない。違うならそれでもいい。ただ、本当の事実を確かめる覚悟は出来る。

「お葬式は、ちゃんとやったのよね？」

言葉を失う恵とは対照的に、加奈子は徳子に確認を続ける。これが、大人と子供の違い

なのか。ただ、そのほうが徳子にも有り難かった。

「うん。駅の向こうの廣済堂で済ませた。だから、他の人にはなん

てこのないただのお

葬式だったと思う。でも、思えば、あたしはおばあちゃんの全身も見えてはいないの」

「つまり、階段での事故ではない怪我を負っていた、と。そういうことね」

徳子と加奈子で話が進む中、恵が慌てたように付け加える。

「ちょっと待って！ おばあさんは、きちんとお墓に入っているんでしょう。それなら、どうしてあの部屋で」

また、ちらりと和室に視線を投げる。元凶は、あそこにあるはずだ。

「おばあちゃんは確かにここにはいない。でも、あたしの考えは、おばあちゃんはずっとあそこで殺されたんだと思う」

徳子がふと和室に目を遣ると、それを二人の視線が追ってくる。

恵が震えるようにして肩を揺らし、両腕を交互にさする。自然と三人で息をひそめる。

「多分、おばあちゃんはそれが悔しくて、家族を……殺していくんだと思う。笑い声も、さっき聞こえた。お母さんが地面に轢きずり込まれる時に」

「笑い声……」

加奈子の呟きを最後に、三人の間に沈黙が落ちる。だからといって、今更何が出来たのか、誰も分からない。それでも、加奈子も恵も一生懸命考えてくれていることは、その表情からも伝わった。三人がそれぞれ唸っていると、その和室から携帯の着信音が響いてきた。恵が、その瞬間小さく悲鳴を上げる。そして、徳子が立ち上がると同時に、ごめんなさい、と呟いている。障子を開けると、母親が吸い込まれていった畳の穴は、大きな布で覆われていた。あれは、祖母が使っていた毛布である。振りかえると、恵が小さく頷いている。彼女がやってくれたのだろう。和室にある押入から取ったのだろうが、それが反対に悪影響を及ぼさないかと心配になる。だが、はずすことも出来ず、部屋の隅に置かれていた、鳴り続ける携帯に

手を伸ばした。隣には恵の携帯もある。自分の真っ赤な携帯を手に取り開くと、そこには父親の名前が表示されている。

「お父さんだ！」

えっ、という驚きの声がりびングで拳がると同時に、徳子の胸も高鳴った。そしてすぐに電話に出る。

「もしもし、お父さん！ 今、どこ！」

「ああ、徳子か。どって、お父さんは仕事だよ。今日は平日だぞ」
いたって普通に電話で会話する父親に背筋が寒くなる。彼は、家で何が起こったのか全く知らず、予想もしていないことだろう。のけ者にされていた徳子だけが、苦しんでいるようだ。

「お母さんは、あたしの目の前で消えちゃったよ。お父さん、どういふことか分かる？」

苛立ちで、それだけ話すのに精一杯だった。電話を持っている意識も薄れ、頭がぐらぐらと揺れて視界がふらつく。恵がソファから立ち上がり、障子の向こうから様子を窺っている。

「きちんと、全部説明して」

縫るように言う徳子に、父親ただ無言だった。電話の向こうで校内のチャイムが虚しく鳴り響いている。徳子は目に張る涙の膜をこらえながら、部屋に転がっている、赤いクマのストラップがついた恵の携帯を、じっと見つめ唇を噛みしめた。

6 愛情か同情か

「少しは落ち着いた？」

膝に埋めていた顔を上げると、そこには加奈子の顔があった。

「うん」

何も語ろうとしない父親からの電話を切った後、徳子はあの家にいることさえ息苦しく

なってしまった。母親の助けを呼ぶ声が和室から聞こえてくるようで、耳を塞いでいない

と叫びだしそうだった。結局加奈子が寮に連れてくるのは当然の運びとなり、恵もすぐ側

まで送ってくれた。寮の警備員は、また来た徳子の顔を確認し、二言三言話しかけたが、

何を言っているのか徳子には全くと言って良いほど理解できなかった。部屋に来てから、

やっと落ち着き、バイトが入っていることを思い出した。慌てて携帯でバイト先に電話を

し、休みを貰った。近くで誉田のはしゃぐ笑い声と、それに冷たい言葉を返す真奈美の声

も聞こえた。比較的文句も言われずに休みを取れたことにほっとしながらも、自分だけが

別世界に来てしまったような感覚だった。普通にチケットを売る仲間の姿を想像して、そ

の中に戻りたくなる。

「はい。まずは薬飲んで」

加奈子に手にあるのは、市販の一般的な風邪薬だった。それを受け取り、テーブルに置

かれていたグラスの水で二粒を飲み下す。

「ねえ、気になったんだけど、まだ聞いても良いかな？」

薬を飲みグラスを置くと、加奈子は覗き込むようにして徳子の横顔を見た。これ以上何を聞かれても怖くなかった。

「いいよ。かなちゃん、何でも聞いて」

徳子が答えると、それでも加奈子は申し訳なさそうな顔で続けた。

「さっき、言っていたでしよう。同じ時期に田辺に……って。あの時は聞けなかったんだ

けど、その人と徳ちゃんは何かあったの？」

そろそろ夕飯の時間だ。部屋のドアは閉めていても、どこからか食事の匂いがしてきた。

加奈子は、徳子が発熱しているのを知っているので、部屋の中にあるコンロで小さな鍋を使いお粥の準備をしてくれている。

「うん。付き合っていたの。高校生の時。でも、おばあちゃんが死ぬ少し前に、いきなり振られちゃったんだ」

「そうだったんだ」

加奈子は申し訳なさそうに声のトーンを下げたが、徳子にとってみれば切り出しにくい

話題を出せて丁度良かった。徳子の青春の別れより、加奈子の離婚のほうが辛かったはず

だ。加奈子にも聞いてしまおうか迷った末、徳子は先ほどの加奈子と同じように窺うような口調で言った

「突然だったの。あたしを嫌いになった訳じゃないけど、疲れたからって」

ずっと記憶に蓋をしていただけだ。思い出すと、悔しくて悲しい。裏切られた喪失感と

虚無感で心が動きを止めてしまう。何も考えていないはずなのに涙が出て、前に進めない。

だから、蓋をした。思い出さなければ、強くいられる。そう思っていた。だが、結局そ

れは逃げている弱虫に過ぎない。

「あたし、本当に苦しくて、どうしようもなかった。でも、相手に縋り付いて泣くなんて

みつともなくて出来ないよ。相手には分かったような顔をして頷いて、裏では憎んでいた

の。最低でしょ」

徳子の話を、加奈子は遮ることなく黙って聞いてくれた。一度切り出して仕舞えば、それはダムが決壊が溢れたように流れ出し、徳子の頬がどんどん濡れていく。痛む喉をもともせず、こみ上げる嗚咽を吐き出した。舌が喉の奥に張り付くような感じがして吐き気がこみ上げる。口を閉じて嗚咽を堪えようと、その逃げ場所を求めたように鼻水が大量に流れた。そつと差し出された箱に入ったティッシュを取った時は、徳子はいかに全ての我慢することをやめた。しばらく時間を忘れて徳子が泣き続けた後、加奈子が言った。

「辛いことがあっても、泣くのを我慢してはだめよ。徳ちゃん。それは、自分を殺しているのと一緒」

「我慢しなければ、何かが変わる？ 誰かを嫌いにならないで済む？」

加奈子はふっと微笑んで言う。

「分からない。私も嫌なこともあったし、思い出したくないこともたくさんある。でも、

全部、忘れることが幸せとも限らないのよ」

加奈子と感覚が違うのは、年齢の違いだろうか。それとも、経験した辛さの違いだろう

か。それでも、あんな形で母親を亡くした辛さを、忘れる必要がないというのか。母親の

亡骸さえ、手に入らないのに。

「辛いのにごめんね。ほら、ベッド入って。そうだ、暖かい服を出

してあげるね」

加奈子はそう言うのと、部屋の隅にあるクローゼットを開いた。その姿を徳子が目で追う。

「どれにしようかなー」

クローゼットには服が整頓して掛けられていて、その下に数個の収納ケースが置かれていた。その一番下にあるケースに、徳子の目が奪われる。泣きすぎて重くなった瞼を開き

見ると、そこには赤ん坊の物と思われる服が収まっているのだ。

「これでどうかな」

加奈子は一気に元氣すぎる声をあげて振り返ったが、徳子の視線に気づき、目線を落とす。そして、その服にたどり着いた。

「ああ。これね、私の子供のよ。離婚する前の」

そのまま取り出すことなくクローゼットを閉める。子供の服を持っているのに、会えないのだろう。それなら捨ててしまえばいいと思うが、幾ばくかの望みを持っているに違いない。

「ごめんなさい」

徳子が見なければ、加奈子の記憶もほじくり返すこともなかった。「ううん。いいの。私ばかり徳ちゃんのことを聞いちゃっているしね」

フワフワのセーターは今の季節にはもうそぐわないが、徳子は肩にそれをかけた。加奈子はそのまま鍋に向かい、おかゆを皿に移す。食欲がないのか、加奈子もお粥を食べるようだ。そして冷蔵庫から梅干しを一つずつ落とし、さらに買ってあったプリンをテーブルに置いた。

「さ、どうぞ」

「いただきます」

スプーンでおかゆを一口食べると、徳子の家のよりも若干塩味が強かった。それでも久

しぶりに食べるまともな食事が、徳子の身体を温める。胃にも負担が少なく、全てを食べる。

「私ね、結婚を反対されていたでしょう」

お粥を冷ますために何度か軽く息を吹きかけながら加奈子が言った。「私の家は普通の家。でも、相手は結構いいお家だね。うまくいくはずがないって」

大学生の徳子には、まだ結婚、そのものが未知である。身分差など、歴史上の話だと思っ
っていたが、現代もあるのだ、とぼんやりと思った。それで結局駄目になったのなら、実家にも帰りづらくて当然だ。

「結局、ダメになっちゃってね」

相手がいい家系となれば、子供は取られてしまう。そうなれば、泣き寝入りするしかなかったのか。加奈子の声も涙混じりになる。しかし、それをごまかすように梅干しを口に放り込むと、しょっぱいというように眉間に皺を寄せてごまかしている。それを彼女は必死で押し殺し、ここで、一人暮らしをしている。眠れない夜もあるのだろう。あとは掻き込むようにお粥を食べ、二人とも口数は少なかった。それでも、二人の間に流れる空気は、傷を話し合ったからか、幼少時代よりも近くに感じられるようになった。徳子は彼女がいてくれたことに本当に安心感を覚え、その夜は二人で一つのベッドを使って眠った。

＊

翌日、学校へ行く気分ではなかったが、寮は学校の近くだったこともあり、徳子は加奈子に連れられて向かうことにした。すっかり熱は下がっていたので、シャワーを浴びる。全く食欲はなかったが、眠い目をこすりながら加奈子がつってくれたお粥をゆっくりと食べた。

「あ、お父さんだ」

携帯を見ると、着信履歴は昨夜だけで全て埋まっている。だが、かけ直そうとは思えなかった。おそらく、昨夜自宅に帰り、あの和室を見て慌てていることだろう。だが、いきなり立場が変わったからといって、こっちが優しくするのは不愉快で仕方がなかった。

警察を呼ぼうにも、母の死体は存在しない。ただあの穴を見て呆然とするしかないのだ。

「私は研究室に呼び出されているんだけど、徳ちゃんは授業……」
加奈子に頼ってばかりもいられない。徳子は最後の一口を食べると、小刻みに頷いた。

自分を、励ますように。

「大丈夫。今日は必修もあるし。お昼はめぐと食べてバイトに行くよ」

本当は、恵は今日もサークルのはずだ。一緒に昼を取る約束などしていないが、なるべく加奈子に心配をかけたくなかった。

「何かあったら、私の携帯を鳴らして。いつでも取れるようにしておくから」

「うん。ありがと」

徳子は腫れた瞼に手を当てながら、精一杯の力を振り絞って小さく微笑んだ。授業は今日も退屈なことこの上ない。一番後ろの隅を今日も確保が出来たが、桜の花はいつの間にか全て散っている。おかげで窓から見える景色に色合いはなくなり、青い空だけが窓を独り占めしている。天気は澄み渡っているのに、徳子の目には澱んで見えた。隣の席には相変わらずこけしが座っていたが、彼女はもう徳子に話しかけてこなかった。壇上で教鞭を執る男性は、有名大の教授になることに失敗し、仕方なく今年は徳子の大学に来たのだと、

最初の授業で生徒にうち明け、反感を持たれた。おかげで、今も教室内はざわつき収拾が

つかない。それでも彼は気にすることなく話し続けている。

徳子はまた窓の外に目をやった。今日は指名されることもない。後ろから見た生徒達は、

話しているか、机に伏せているかのどちらかだ。顔を上げて話を聞いているのが数人、それをノートに書き写しているとなると希少価値だ。と、その時だった。机の下にある徳子の鞆の中で、突っ込んだままの携帯が振動する。また父親だろうか。嫌気が差したが、とりあえずは鞆から取り出して、画面を確認する。そして、予想もしていなかった名前が表示されていることに驚き、あやうく声を上げそうになった。そこに表示されていたのは、随分前に一番受信していた名前。そして、壊れた後も、しばらくは待ち続けた名前だった。

どうして今頃。授業の出席確認は終わっている。携帯を握りしめ鞆を抱えると、徳子はそっと席を立つ。携帯は振動を続け、全身で徳子に主張している。誰もが友達と話しているため、徳子が席を立つても気づかれることさえない。中腰になり、教室の一番後ろを駆け抜ける。最終列に座っていたことが、幸運だった。ドアから出る時は少しだけ緊張したが、声を掛けられることもなかった。携帯の振動が止まってしまうことを恐れて、徳子はただ廊下に早く出ようと焦った。留守番電話に切り替わったところで、徳子は急いで通話ボタンを押した。耳に当てる前に、相手の声が携帯から発せられる。

「もしもし？ 徳子？」

その声は昔と変わらない。少し掠れたようで、男の割には声が高いことを、彼は前から気にしていた。だが、それが徳子にとっては彼らしくもあり、安心感を得られるものでもあった。閉じこめていた感情が、一気に溢れ出す。それでなくとも、昨夜加奈子と話して感情が敏感になっているのに、だ。緊張で口の中が一気に干からびていく。

「もしもし？」

という問いかけの後に、番号間違えてないよな、と呟くような声がする。そこで気づけば、徳子はこの男と別れたあとに番号を変えている。そして、彼には知らせていないのだ。

「どうして番号を知っているの？」

声の再会を喜ぶほど心は頑丈ではない。甘い声を出せるほど、大人にはなれなかった。駆け引きの一つも出来ない。恋愛がうまくいなくて当然だ。

「あ、やっぱり間違えていなかったか」

徳子もその言葉に、この声がやはり間違えではないことを確認した。

「田辺君、この番号どうして知っているの」

自分で意識していないのに、冷たい口調になるのを抑えられない。

「あ、これは恵に聞いたんだ。ごめん、勝手なことをして」

それを聞き、先日お昼と一緒に食べた時の、恵の言葉を思い出した。

―田辺から、連絡あった？

あれは、このことだったのだ。田辺と恵は、今も連絡を取り合っている、それは不思議

ではない。そして、そう考えれば恵に聞くのも当然だ。

「どうしたの？ 急に」

最後に顔を見たのは高校の卒業式だ。それより前から二人が口を利くことはなかった。

話したかった。だが、声を掛けた時に拒絶されるのが怖かった。

「あ、そう。徳子、今度時間がある時に会えないかな」

そういう彼の声が、微かに震えているのに気づく。徳子は鞆を廊下の窓枠に置き、汗ばむ手のひらを服にこすりつけた。田辺が、なんにも無惨に徳子を切り捨てた彼が、会いたいというのか。心臓にぎゅっと掴まれるような痛みを覚えると同時に、ほんの少しだけ舞い上がるのを抑えられなかった。だが、それを見せるのが悔しくて、徳子は無言で数秒を過ごした。

「今更だっと言うのは分かっているんだ。でも、徳子に聞いて欲し

いんだ。言い訳かも知れない。それでも、どうしても」

「ごめん。無理だよ」

それは、冷静な徳子の判断だった。一瞬は舞い上がった。もう一度田辺に会って話したい衝動にも駆られた。しかし、それを自分の中で想像することは出来なかった。あの時の自分が立ち上がるには、時間がかかった。そしてその傷は癒えていない。言い訳をされて許せるほど、もうこの男を好きだとは思えなかった。

「徳ちゃん……」

田辺の声が、少しずつ萎んでいく。あんなにも着信音が切れないことを願ったのに、今では早く電話を切りたいとさえ思う。その感情が、二人がもう元には戻れないことを決定づけていた。

「あたし、家も大変なの。バイトもしているし、あまり時間が取れないから」

会う気がない、と言えないのは、彼を傷つけないからだろうか。すると、田辺は電話の向こうで小さく声を漏らす。泣いているのだ、と気づくにも時間はかからなかった。それでも、徳子は慰める気にはなれなかった。彼に何があったのかは分からない。それでも、今、徳子は自分が立っているだけで精一杯で、これ以上の面倒を取り入れたくなかった。

「ごめんね」

徳子は呟くように言うと、携帯の通話終了のボタンを押した。

＊

授業に戻ることなく、電話を切るとアルバイト先の映画館に向かった。朝よりも気分は

沈み込み、ため息ばかりが出る。映画館に着くと、今日も客はまばらだった。暗い照明の中、絨毯を踏みしめてスタッフルームへ向かう階段を上ると、頭上から明るい声が降ってきた。

「あ、徳ちゃん！」

見上げると、そこにはポップコーンを入れるカップを両手に持った誉田が階段の上にいた。補充用のカップを取りに来たのだろう。

「もう風邪大丈夫なの？」

そういえば昨日は休んだのだ、と思い出す。徳子が謝ると、田中は両手を大きく振って笑った。

「いいんだよー。きつと疲れが出たんだ。休んじゃえ、休んじゃえ。チケツトなんて真奈美に売らしておけばいいんだよ」

その簡単な言葉は、今の徳子の気持ちを大きく楽にしてくれる。

おとといの電話が嘘のように、誉田は元気だった。徳子の顔がまだ赤いと言っては、頬に触ろうとして、寸前で手を引っ込めて恥ずかしがった。全て冗談なのは分かっている。徳子は声を上げて少しだけ笑うと、誉田も安心したように手を上げた。そこで、彼はまた余計な事実を教えてくれた。

「そういえば、本当にまなみんには、電話のこと内緒にしてね」
念を押す田中に、徳子は頷いた。そして、からかうようにぺろっと舌を出して言う。

「ちゃんと、誉田君が好きだっていうことも黙っておくから安心してよ」

「え？ ああ、徳ちゃん。誤解だよ！」

二人が階段で話していると、女性社員がスタッフルームから出てきた。瞬時に徳子は会

話を止めるが、田中は普通に挨拶をした。社員は田中に笑顔を向けたあと、一瞬だけ徳子

を睨んだ気がした。挨拶をするべきだったかと後悔するも、目の前の男は至って気にしない。

い。社員がロビーに姿を消した後、今度は声を落とした。

「徳ちゃん。まなみんの中学時代、知らないでしょ。俺さ、あいつとは昔からの知り合い

でさ、その頃のこと知っているんだよね」

「え？ そうなの？」

早く行かなければシフトの時間までに準備が出来ないだろうが、誉田はまだ何か言いた

そうだ。

「まなみん、中学の時虐められてたんだよね。少しだけ」

「え？ そうなの？」

また同じ言葉を繰り返すが、他になんと言えればいいのか見当もつかない。ただ、昔を知

っているということは、幼なじみということになる。

「といっても、俺は中学受験して向こうの私立行っていたから、あいつから聞いたただけな

んだけどね」

「へえー」

それならば、恵達の同じ中学でないことにも納得できる。

「まあ、昔は俺も頭良かったわけよ」

徳子が腕時計に目を遣ると、シフトに入る予定時間まであと十分もない。それまでに着替えを済ませてタイムカードを切らなければならぬ。

「ごめんね。田中君。あたしもう時間が」

「田辺って奴。徳ちゃんの知り合い？」

誉田が、徳子の言葉を遮るようにして言った名前に、徳子の心臓が大きく跳ねた。なぜ誉田までが田辺のことを知っているのだ。

「どうしてその名前を」

珍しい名前ではない。もしかしたら別の田辺かも知れない。

「まなみんの同じ中学に田辺って男がいたんだ。徳ちゃん、高校が同じだったんだろう？」

こめかみの辺りに、痛みが走る。どうして今更、色んな人間の口から思い出されなければならぬのだらう。振り返りたくなれば、自分でその箱を開けさ

せてくれないか。どく

ん、どくん、と心臓が音を立てる。また、徳子の知らない所で何かが起きている。

「徳ちゃん、この間まなみんとその男について話していただろう」

そんなこともあったが、随分昔のように感じる。その情報を仕入れた真奈美が、徳子に

確認するだけでなく、恵にまでメールをしていた。

「まなみんが中学でうまくいかなかったのは、そいつが原因だ」
誉田がそう言うと、再びロビーに通じる扉が開いた。

「あ、こんなところにいた！ 誉田、カップを早くしろって何回も無線入れてるんだけど！」

「あ、悪い。悪い！」

誉田はそれだけを言い残し、ロビーへと階段を一気に下っていく。

「あ、ちょっと！」

それでは、徳子の聞きたいことを聞けないではないかと背中に叫んだが、彼は軽く片手を上げると、もう振り返らなかった。

「どうということ……？」

だが、その悩みまでを抱える時間はなかった。もう交代まで数分だ。飛び上がって驚く

と、徳子は慌ててスタッフルームに飛び込んだ。ぎりぎりで滑り込んだ物の、徳子は社員

から嫌味を言われ、やっとチケットカウンターに入ると、先ほどまではなかった行列が出てくる。

「徳ちゃん、早く！」

カウンターの一番奥にいる真奈美に呼ばれ、徳子はその席に駆け寄った。

「この行列は何？」

「ああ、今日は試写会だからね。はい、早く座ってね」

真奈美に言われるままに座り、初めての試写会に向けての作業を行う。試写会はあらか

じめはがきを持っている客限定のために、料金は無料で、座席の指

定だけを行う。その間

に一般の客も交じっているため、徳子は慎重になりながらも、いつもと変わりなく客をさ

ばいていく。横目で、真奈美の顔を見つめながら。ある程度の接客をこなし一息を付いた

頃には、いつの間にか二時間以上が経っていた。

「徳ちゃん、おつかれ。試写会の日ははずれだからね。疲れたですよ」

もちろん、真奈美は徳子と誉田の間で交わされた会話も、徳子の家で何が起こっているの

かも知らない。それが、あまりにも普通過ぎた。先ほどの誉田の言葉が頭の中をぐるぐる

と回っている。それでも、なかなか口で切り出せないまま、徳子は真奈美の話しに相づち

を打ち続けた。そして次第に、真奈美は隣のカウンター子に話し始めた。どうやら奈津子

の話をしているようである。だが、その仲間に加わろうとは思わなかった。

「ねえ、徳ちゃんが最後の入りだけど、最初に休憩してもらってもいいかな？」

バイト時間の半分ほどが過ぎた頃、徳子に声をかけたのはカウンターの先輩だった。そうなれば、大概断ることも出来ない。夕飯の時間にもなっているため、徳子は一人財布を持つと、コンビニへ行こうとロビーの扉を開けた。これはモールの中への扉ではなく、外にある階段へ続く通路の方だ。入り口は、この二カ所しかない。主にモールを使うのは一般客で、こちらの小さい方は常連スタッフだった。なにより階段を下れば真下にコンビニがあることが、スタッフにとっては便利で有り難かった。家に帰っても何も食べるものもないだろうし、徳子はせめて満腹になるものを食べようと思いがら階段を下った。いつもはこの時間になると、サラリーマンの姿が

目立つようになる。だが、それは帰宅者で、ほとんどがコンビニに入ることなく素通りをする。それに、裏手にあるこのコンビニよりも、公園の奥にあるほうが、住宅街の住人には重宝されていた。おかげで空いている店内に入ると、徳子は握りしめた財布にいくら入っているか確認しようとした。

「徳子」

ふいに名前を呼ばれてそちらを見ると、そこに立っていたのは田辺だった。その声は、記憶の中にあるものと変わっていない。今日、電話でも聞いた、そのものだ。彼は雑誌コーナーで立ち読みをしていた。驚く徳子に向かって、田辺は気まずそうに、しかし少しだけ微笑みながらゆっくりと歩いてくる。

「どうして」

そんな田辺を無視して、徳子は一番奥の棚にあるおにぎりのコーナーへ早足で行く。

「あ、おい」

田辺の声と、同じペースの足音が付いてくる。構わず上の棚から順番に見ていく。時間が遅くなったからか、人気のある種類はなくなっている。

「電話、切るからじゃん」

徳子のすぐ脇に立ち、田辺はめげることがない。ゆっくり選ぶことも出来ず、適当に数個掴むと、レジに持っていく。その後を、また田辺は付いてくる。高校の時と外見は変わってしまった。短い髪はうす茶色に染められ、服もオシャレになっている。が、中身はちっとも変わっていない。こうして徳子の後をよく付いてきた。それに馴れた頃になって、いきなり手を離された自分の気持ちを分かっている、そんな態度が気に入らなかった。

「ねえ、話を聞いてよ」

コンビニを出て階段を上がろうとすると、階下から田辺が再び訴えた。あの時、最後に話した時、徳子の話を聞こうとしなかった男の言葉か。

「……何？」

数段高いところから、田辺を見下ろす。夜風が冷たくて、制服から伸びた足がスースー風を通す。

「俺、お前のことを傷つけたくなかったんだ」

「……もう傷ついた」

田辺の大きな声の訴えに、コンビニから出てきたOLらしき女性がじろじろと見てくる。

それに眩き返すと、徳子はまた階段を上り始めた。

「おい、待って」

田辺が慌てて追いかけて来て、徳子の手首を掴む。それが階段である以上、振り払うことも出来なかった。

「聞けってば」

どうして悪いことは重なるのだろうか。もしこれが、平凡な家族の間に徳子がいたとし

たら。恵と真奈美、誉田との疑問が心に渦を巻いていなければ。もしかしたら、田辺がい

たことに緊張したかもしれない。でも、もう遅い。知りたくないことが増えていく。

「ごめん、本当。でもあの時、俺正直凄く参っていて、疲れていたんだ」

それなら、今の徳子がそうだ。辛かったのなら、どうして助けを求めてはくれなかった

のだ。それが、睨むような視線となって徳子に現れる。

「お願い、少しでいい。もう、電話もしないから」

よく見れば、手首を掴んだ田辺は泣きそうな顔をしている。スタッフルームに入れるこ

とは出来ない。真奈美や誉田に会わせたくもない。結局徳子は田辺をモールの中にあるフ

アーストフード店へと連れて行った。

「あたしの休憩、四十分だから」

まさか店内でコンビニのおにぎりを広げるわけにもいかず、新しく店内の商品を買う羽目になった。

「ごめん。本当に」

「あたし、忘れかけていたの。どうして今更連絡なんてくれたの」
目を合わせることはできなかった。会っただけでもあんなに驚いたのに、もう一度真つ

直ぐに視線を合わせたら、大きなものに流されてしまう気がした。
逃げないと決めたのに、

また自分に負けてしまう。俯く徳子に、田辺はゆっくりと言う。

「今更じゃない。俺は、徳子のことが、ずっと好きだった」

「そうやって、真奈美のことも騙したの？」

徳子買ったばかりのポテトを口に入れると言った。しょっぱさだけが際だつそれは、

売れ筋ナンバーワンというから驚きだ。その途端、田辺は立ち上ると、徳子を鬼のよう

な形相で見下ろした。瞬間、身体が竦む。田辺の椅子が大きく揺れ、客の視線が集まる。

「騙したって、なに？」

言い過ぎたかと思ったが、それでも誉田が言っていたことだ。それに、昔の自分の傷を
思うと、これくらいは与えていい罰だ。

「知り合いに聞いたの。うちのアルバイトの子が、田辺君のせいで
虐められていたって」

「まなみって、瀬戸内真奈美？」

あっという間に彼女の名前を思い出したことで確信が強くなる。

「やっぱり知っているんだ」

どこか喧嘩腰になってしまうのは仕方ない。徳子には、今のこの時

間も大切だとは思え

なかった。母親が畳に沈んでいったあの時よりも、さらに動悸がする。

「誰に何を聞いたのか知らないけど、俺は、真奈美が虐められるようなことはしていない」

「いいよ。あたしにはもう関係ないことだから」

「違うんだよ」

田辺の口調が暗くなる。

「こういうと自意識過剰に取られると思って、言えなかったんだ」

田辺は、なぜこんなにまでして連絡をしてきたのだろうか。徳子に何を告げに来たのだ。

それは、次の言葉で明らかになった。もうポテトに伸ばす手は止まっていた。

「中学の時、その真奈美に俺は付き合ってくれて言われたんだ。でも、好きじゃなかったから断った」

田辺は思い出したくもないというように、顔をしかめた。そして、自分の頼んだオレンジジュースのカップに付着した水滴を指で拭う。

「恵と真奈美は元々凄く仲が良かったんだ。俺は、その二人とただのクラスメイトだった」

「ちょっと待って。それって……」

それが中学時代の話。だが、それは徳子の覚えているように高校時代にも当てはまることだった。

「そう。分かるだろう。俺と恵と徳子。これと大して変わらないよ。といっても、中学の時は、そこまで恵と親しかったわけでもないけどな」

恵と真奈美が親しかった。そんなのは、徳子には初耳だ。

「真奈美は、俺が振ったのに、勝手に付き合っていると言いだしたんだ」

「そのことだったの？ 恵が、真奈美は嘘をつくっていていたのは。でも、どうしてそんなことくらいで」

「あの二人の仲がおかしいと周囲も感じるようになった頃、今度は恵に告白されたんだ」

徳子は、今度こそ驚きで悲鳴に近い声を漏らした。真奈美だけでなく、恵も田辺を好きだったというのか。だからこそ、恵は真奈美が気に入らなかつた。

「その時も、やっぱりその気にはなれなくて、また断つた。そうしたら、いつの間にか真奈美はクラスではみだされるようになった。でも、俺は助けることも出来なかつた」

「それじゃあ、あのクマのストラップも……」
和室に置いてあつた恵の携帯についていた赤いクマのストラップは、徳子の記憶にある

ものによく似ていた。偶然かと思つたが、やはり間違いではなかつたのだ。

「あいつ、まだ持っていたんだ」

田辺はそれと同時にため息をつく。

「やっぱり、田辺君が持っていた青いクマと色違いだよね？」

彼が高校時代に付き合っていた時、ゲームセンターのユーフォーキヤッチャーで取つた

ものだ。有名なアミューズメントパークのキャラクターだが、一緒に買ったわけではない。

それでも、恵はおそろいが欲しかったというのか。

「徳子にはばれないように気を付けていたんだけど、俺も、疲れちゃつて」

田辺が疲れた、というのはそういうことだったのか。

「どうして高校の時に、話してくれなかつたの」

そうすれば、別の対応が出来たのかもしれない。たとえば恵と同じ人を好きだったとしても、彼女は当時とても応援してしてくれた。いつも徳子の話を聞いてくれたし、一番気の置けない友達だと信じてきた。

「甘いんだよ、徳子は」

考えを読まれたかのような田辺の発言に、徳子が額に皺を寄せる。

「真奈美と喧嘩をしただろう。俺は、自分の中でそれがしこりになっ
ていたんだ。徳子と

別れたくなかったけど、そのせいでお前が傷つくところも見たくな
かった」

「恵は応援してくれていたの」

「俺は、徳子に真奈美と同じ想いをさせたくなかったんだ。でも、
あのストラップだけじ

ゃない。何かにつけて、恵は」

「どうして、それならどうして、疲れたで終わらせたの。田辺君は、
恵よりひどいことを

したよ。それを今更言われても、あたしは、もう何とも思えない」
どうして今頃になって連絡をしてきたのだ。田辺に対する嫌悪感と
同じくらい、恵に対

しての不信感が沸く。彼女は、田辺から電話を貰ったことを確認し
て、どうするつもりだ

ったのだろう。それでなくとも友達を増やさない徳子を、さらに悪
者にするつもりだった

のだろうか。あの愛くるしい笑顔で、その裏にあるのは田辺を取ら
れたくない憎しみだっ

たのか。いや、それならなぜあんなにも真剣に自分を助けてくれる
のか分からない。

「俺だって、忘れようと思った。徳子とあまり話さないようにした
りして。でも、忘れられなくて」

モールには虚しく数年前に流行ったアイドルの曲が流れている。
話せば話すほど、田辺に魅力を感じなくなっていく。恋愛のいざこ
ざに関わっている余裕がないからだろうか。

「それで、恵に聞いてまでして電話してきたの？」

もう食欲も失った。もったいないが、ポテトを全て紙に包んで丸
める。バイトが終わってから、コンビニのおにぎりを食べようと、

そつと袋を握りしめる。

「徳子を忘れられなかったのは、恵のせいでもあるんだ」
消沈しかけていた息が、再燃する。

「なに、それ」

ぎゅつとポテトの包みの端を握りしめる。田辺の言っている意味が分からない。立ち上がり、彼の顔を睨み下ろす。

「恵は、たまに連絡を取っていたんだよ。徳子と別れてからも、知っているだろう？」

そんなことは関係ない。徳子が無言でも、田辺は続ける。

「それで、あいつは徳子のことを凄く話すんだ。徳がああ言っていた、何をしていた、誰と会っていたって。ずっとだ」

「それで？」

怒りで、拳が震える。

「俺はお前が何をしているかも大体知っていたし、離れていた気はしない」

だから、やり直そうというのか。

「もし、それだけ考えて思っていてくれたなら、恵に対して何かを言えばよかったじゃない」

こんな時差を持って揉める話ではない。腕時計を確認すると、もう休憩時間も終わる。結局ストレスを溜めただけになってしまった。それでも田辺は食い下がる。

「あいつは、はつきりと目立つことをするわけじゃない。だが、俺だけには分かるようにするんだ。だが、偶然だと言われてもおかしなかった。徳子のことにも応援して、この間は、携帯番号もわざわざ向こうから教えてくれた」

「それで、今ならもう平気だろうって？ あたしを守った気になって、ヒーローになって隣にまた座れると思った？」

怒りで身体が震えるなど初めてだ。それでも、この男が許せない。

もう言い訳を聞く気にもなれない。顔を見たいとさえ思わなかった。今まで誰にも言ったことがないほどの言葉で、思い切り傷つけてやりたい衝動にかられる。

「それは……、でも理由があったから」

「逃げたんだよ。田辺君は。恵や、中学時代の真奈美のせいにして、あたしたちの間の問題からただ目を逸らしたただけでしょう。今も恵のせいになっている」

「実際にそうだったんだよ。でも、俺はまだ」

「蚊帳の外は、もう充分。いつだって逃げる人の背中には追えない。あたしは、絶対あんたみたいにならないから」

それだけ言い残すと、徳子はテーブルから離れた。田辺がその後を追ってくることもなく、徳子はモール内のエスカレーターで映画館のロビーへと戻る。試写会がまだ上映中のようで、人はまばらだ。それでもチケットカウンターでは、真奈美が笑顔で接客をしている。途端に、大きなため息が出た。

「お、徳ちゃん。休憩終わったの？ 今日この時間は暇だねー」

振り返ると、誉田が今日はアイスクリームを手を持っている。バイト中だというのに、どうしてこの男はここまで自由なのだ。

「まなみんなに話さないでくれてありがとうね」

そう言って、徳子にくれるのかと思いきや、誉田はアイスを自分の口へと運ぶ。誉田は真奈美を本当に心配しているようだ。彼は、彼女の側でしっかりと見ている。それがすごく羨ましかった。田辺の、最後にテーブルを離れるときに見せた、うなだれたような顔を思い出す。そして、恵のいつでも徳子に優しくしてくれる笑顔を思い浮かべる。誰が正しいのか、何が間違っているのか、徳子には分からない。ただ、自分が何か大きな渦にとらわれているような既視感にとらわれる。今日こそバイトが終われば家に帰らなければならぬ。おそらく途方にくれる父親に直面することだろう。その覚悟だけを胸に、徳子は田中に出来るかぎりの力を込めて、普通に見えるだろう笑顔を向けた。

7 生か死か

アルバイトを終えた徳子は、重い足取りで帰路についた。また加奈子のところにはいけない。恵には、今会うことも出来ない。誉田や真奈美に頼るわけにもいかない。そうなれば事情を話さなければならぬだろう。簡単に泊めてくれと頼みに押し掛けるほど、気の許せる仲間もいなかった。怪我のことを考えて、まだ自転車に乗ることは諦めている。そうやって初めて、駅からの道のりが結構あることに気づかされる。公園を少しの期待を込めて覗いたが、原人の姿はない。中に入りテニスコート、土管の中や茂みまで確認したが、彼はいなかった。あの温かい腕を思い出して、また今日も慰めてくれないかと、ふと探してしまう。こんなことはおかしいと分かっているのに、それでも今は原人が何かを解決してくれるような気がした。諦めて公園を出ると一人の女性とすれ違う。こんな時間に公園から一人で出てきた徳子に訝しげな視線を送ったあと、彼女は駅に向かって歩いていった。自分におかしいところはないかと全身を確認してから、また一歩踏み出す。コンビニを過ぎると、一気に辺りは暗くなる。

これから父親と会うと思うと緊張して気分が悪くなってきた。自分が悪くないのは分かっている。むしろ言いたいことはたくさんある。それなのに、それを伝える自信もないし、ただ泣いてしまいそうな自分が嫌だった。家まであと少しというところに来たとき、どこからか見られている気配がした。背後を確認するも、誰もいない。近所の家はどこも雨戸が閉まっていて人気はない。しばらく歩くと、徳子の前に置かれたマンホールの蓋が、微かに開いた。まさか、と思った拍子に、原人が穴から顔を出した。前の家の玄関の灯りに照らされた顔は、徳子を見つけて、もじやもじやの髭の奥で笑っている。

「原人！」

それを見つけて徳子が駆け寄った。彼は、まだマンホールの中をうろついているのだ。

「見つ、からな、い」

地面から顔をだけ出した状態で、原人が徳子に言った。誰にも見つからなかった、ということだろう。

「偉いね」

徳子も微笑み返した時だった。背後に数人の笑い声が上がる。はつと振りかえると高校生の数人が、自転車で笑いながら通り過ぎた。ここから公園に戻るとすれば、誰かに見つかる確率も上がる。

「原人、早く出て」

引き上げるようにして彼の腕を取り、マンホールから出す。そして、ほんの数メートル先の自宅へと、徳子は原人を導いた。ここまでくれば仕方ない。車庫に入れておけば、誰も近づかないだろう。原人が片手で持ち上げていたマンホールを手伝ってみれば、それはとてつもなく重かった。その細い腕のどこにそんな力があるのだろう。

徳子は素早く周囲に目を走らせ、原人の手を引いて走る。背後で、彼が独特の唸り声を

上げているが、振り刈る余裕はない。門を開き、原人を中へ押し込むと、玄関の鍵を靴か

ら取り出す。急いでドアを開け、玄関脇の棚の上にある小さなもう一つの鍵を取った。そ

して、もう一度外へ出ると、今度はそれをシャッターの鍵穴に押し込んだ。夜には不似合

いなシャッター音が響き、それが開く。中からもわっと土の匂いが

した。

「原人！ 早く！」

車庫には昔は車が一台あったが、徳子達子供が大きくなり、駅の便も良くなったために

売ってしまった。今そこにあるのは、昔徳子が遊んでいたフラフー

プや三輪車、そして兄

の乗っていたバイクである。原人は、徳子に呼ばれると素直に車庫までやって来た。その

間も、終始周囲に目を走らせる。

「入って！」

徳子が原人の背中を押す。この男は服の替えもなく、いつも同じコートだ。この姿で夜

は寒くないのかと考えてから、徳子は車庫にある古い毛布を原人に羽織らせた。原人は珍

しそうにあちこちに目を遣りながら、車庫の中をうろつく。

「ここね、今は誰も使っていない車庫だから安心して。とりあえず、表の鍵も閉めておくか

ら、静かにしてね。お腹、減っている？」

何を食べたのかは不明だが、原人は首を横に振った。言葉が通じるのだから、彼が人間

であることは、その風貌を見ても明らかだ。どんな理由があってこんな生活をしているにしろ。もう少しだけ原人に側にいて欲しかった。

「これ、電気つけておくね」

車庫の奥にある壁に付けられたスイッチを押すと、車庫の中が明るくなる。といっても蛍光灯などではなく、父親が取り付けた小さな電球が数個あるだけだ。それでも窓もないこの中では充分だ。外にこの灯りは漏れない。不審がられることもないだろう。

「あとで、少しお菓子か果物を持ってきてあげるね」

原人は満足そうに何度も頷き、毛布にくるまったまま地面に座った。

そしてシャッター

をしつかりと閉め、門にもう一度手をかけた時だった。

「徳子か？」

さっきは玄関の灯りもついていなかった。中に入っても家の中は暗く静まりかえっていた。

た。今の家族関係を現すように、冷たい風さえ吹き込んでいたようだった。だが、その家族が帰ってきた。

「お父さん」

通りの向こうから現れたのは、当然のごとく父親だった。

「徳子、今車庫に入っていたのか？」

父親の顔が心なしに青ざめているようだ。それも錯覚だろうか。

「何もしていないけど。いけない？」

弱気である限り物事は進展しない。徳子は何事もなかったかのようにもう一度家に入ると、父親は慌てて追いかけてきた。

「徳子、話を聞かせなさい。和室の毛布を捲いたらなんだ、あの穴は。母さんは、本当はどうしたんだ。どこへ行ったんだ」

その焦った顔は、とても演技とは思えないものだった。玄関の電気を付けると、額から汗を垂れ流している父親の姿が浮かび上がる。

「言ったじゃない。お母さんは、もういないわよ。あたしの目の前で、あそこに引きずられていったんだから」

「そんな馬鹿な話があるか！」

父親は靴を脱ぐことも忘れて家の中へ入ってくる。視線を落とす徳子の両肩を掴むと、強く揺さぶった。

「何があっても驚かないぞ、もう驚かないと決めたんだ。徳子、は

つきりと言った。何

があったんだ。言え……言え！」

その目は血走り、痛いほどに父親の手の握力がかかる。

「本当だよ。お母さんは、この家に殺された。ううん、あたし知っているよ。おばあちゃんに殺されたんだ」

「何を……言っているんだ。そんなことがあるわけないだろう」

その瞬間、父親の手の力が緩められた隙に、徳子はすりと抜け出した。

「それと同じでしょう。否定するだけ怪しいよ、お父さん」

一歩ずつ後退しながら、徳子は父親を威嚇する。階段の手摺りに手をかけ、一段、一段と後ろ向きで上がるも、父親は微動だにしなかった。

「徳子」

「あたし、知っているよ。お兄ちゃんが、おばあちゃんを殺したんだって。あの夜、うちはおかしかった。あれから、お母さんもおかしくなった」

最高潮までに二人の間の空気が緊張に達した時、和室の方から大きな音がした。高いところから布団を落としたような、人が思い切り倒れたような音だった。そのあまりの大きさは、誰かがいるのか思えないが、父親と徳子以外、今はいるはずがない。徳子はそれを無視して父親を睨み付ける。心臓が激しく脈打ち、頭痛がする。手すりを掴んでいる手は微かに震えていたが、ぐつと力を込めて握りしめる。

「お兄ちゃんのバイクに血がついているのも、あたし知っていたよ。おばあちゃんが、怒っているんだよ！」

そして徳子は怒りのままに父親を怒鳴りつけると、一気に階段を駆け上がる。

「徳子！ 待ちなさい！！」

待てるはずがない。自室に飛び込むと、ベッドに突っ伏した。部屋の窓から、車庫を覗くが変わった様子はないので、原人は大人しく

してくれているのだろう。鞆を漁って携帯を取り出すと、無我夢中で電話帳を開いた。発信ボタンを押すと、すぐにコール音が鳴る。だが、相手は出ることなく留守番電話に接続される。一度切った後、時間をおかずにまた同じように発信ボタンを押す。相手はわざとでないのだろうと考えると、余計に腹立たしかった。何度かそれを継続的に繰り返していると、突如、そのコール音が途切れた。

「なんだよ」

無愛想な声が、電話の向こうから聞こえる。その声だけで、徳子に吐きそうになるほどの苛々がわき溢れた。

「お兄ちゃん。お母さんが死んだよ」

相手も家にいるのだろう。背後で今の時間に流れているテレビ番組の音楽がした。こんなに辛い思いをしている徳子と対照的に、兄は一人守られた場所で楽しんでいるのかと思うと、止まらなかった。

「お兄ちゃんのせいで、お母さんも死んだよ！　お母さんは呪いに殺されたんだからね！

あんたのせいで！」

「おい、徳子。どういうことだよ。母さんが、なんで死んだんだよ」テレビの音量が瞬く間に聞こえなくなり、兄の荒い息づかいだけが電話を通して伝わってくる。

「お兄ちゃんのバイクのせいでしょ」

向こうで、はっと息を呑む気配がした。それと同時に、やはりそうだったのかと確信した気持ちが落胆へと繋がる。父親がいくら隠そうとしても、兄は母親を失えば弱気になるに違いなかった。このまま大人しくしていれば、全員がやられるはずだ。もうこの家族が、呪われている。

「お兄ちゃん、明日、こっちに帰ってきなよ。お父さんと三人で、話そう」

徳子の訴えに対して、兄は何も言わなかった。数秒後、向こうで静かに鼻を吸える音がす

る。徳子の中で、怒りを乗り越して、今度はあきれ果ててしまう。

「お願いだからね。お母さんが呼んでいるよ」

最後の言葉で、今度は嗚咽が混じった。もう話すことはない。他に何も言わずに、無言

で電話を切った。最後まで、兄は電話の向こうで啜り泣く声を上げていた。一つしか変わ

らない、それでも、いつも徳子の一步先を歩く兄が、妙に情けなく、そして小さく感じられた。

そして、そのまま馴れた手つきで文字を打つ。あの調子だと、兄はこの問題から目を背

けるかも知れない。遺体がない今、いくら警察に言っても信じてくれないだろう。それに、犯人は存在しない。それどころか、徳子の頭を疑われる確率が高い。しかし、このまま終わらせるわけにはいかない。そもそも問題は何かも解決していないのだ。誰にも助けて貰えないなら、自分からぶつかるとはならない。母親はあの和室に引きずり込まれた。全てを知ったあととならば、自分が同じところへ落ちて後悔はしない。逃げるよりはずっといい。いや、今まで逃げてきたのだ。初めから祖母の死には違和感があった。自分を殺し、それを見なかった振りをした。気づかない振りをすれば全てが丸く収まると思った。田辺のこともそうだ。事実を知って、本当に自分が嫌われたのだと確かめることが怖くて、ただ手を離されるままに従った。もっと自分から近づくこともできたはずだ。徳子のその気持ちを知れば、田辺が一人で抱えることもなかったのかもしれない。田辺も逃げていた。だが、徳子も同じように逃げていたのだ。それが、楽で安全だったから。それも終わりにしよう。

田辺とやり直す気持ちには毛頭なれないし、自分が死ぬことも覚悟の上だ。祖母の力になれなかった後悔を、祖母によってうち砕かれるなら、それでいい。この家で起こった全てを受け止める自信が、徳子にはついていた。その時の徳子には、もう原人が車庫で徳子が来るのを待っているなど、忘れてしまっていた。和室でした大きな

音は、もうしない。父親は、下で何をしているのか。やはり何かをしている気配はなかった。何を考えているのだろうか。

―明日の土曜日、家族で話し合います。

それだけの文面をメールの画面で送信する。紙飛行機が空を飛んでいく画像が写しだされた。

「かなちゃん、頑張るよ」

徳子はそれだけ呟くと、着替えることなくベッドの上で丸くなった。

＊

翌朝目覚めると、天気は快晴だった。もうそろそろ上着も必要なくなる頃だ。徳子は目

覚めると、すぐに枕元の携帯を開いた。液晶画面に、メールを知らせるマークがある。いつの間にか眠ってしまったようだ。身体を起こしながらアイコンを開くと、そこには昨夜の返信が届いていた。

加奈子からだ。

―心配だから、行くね。

家族の問題とはいえ、加奈子が近くに来てくれるのは心強かった。今の状況を知っている、恵と唯一の人物だ。父親はもう起きているのだろうか。と耳を澄ませると、微かにテレビの音がした。顔を合わせづらいが、ここからが本番だ。徳子は、気合いを入れるように深呼吸を数回繰り返すと、ベッドから立ち上がった。外は晴れている。太陽も徳子を応援しているような気がした。階段を下り、一歩、一歩近づくにつれて息苦しさを覚える。どうしても、あの和室で母親が苦しむ姿が脳裏に焼き付いているのだ。廊下に下りると、さらに目眩を覚える。壁に手をつきながら、リビングへ入ると、徳子は自分の目を疑った。父親は、テレビを見ながら何事もなかったかのように新聞を読んでいるのだ。

「遅かったな」

壁にかけられた時計を見ると、もうすぐ昼近かった。メールを確認した時には、時計など目に入らなかった。加奈子は何時に来るのだ

ろう。それを確かめたいと同時に、父親への怒りが再燃する。

「お父さん、お母さんはあの和室にひきずりこまれたんだよ。どうしてそんな新聞なんて読んでいられるの？」

両脇で握りしめた拳が、小刻みに震える。どうしても、許せない。「お母さんは、家出したんだろう。徳子、変なことを言うのはやめるんだ」

その言葉に、開いた口がふさがらなかった。父親は、徳子の話を信じていないのではない。それを受け止めるのが怖いのだ。なんと小さい人間なのだろう。

「それじゃあ、あの穴は何？ あたしが壊したの？」

「徳子じゃないさ。母さんだよ」

そう言い、また新聞のページを捲る。台所では、コポコポとコーヒーマーカールが入れ立

ての熱い液体を注いでいる。湯気が天井へ向けて上り、それは平和な休日の光景である。

これで終わりか。話にもならないではないか。その思った時だった。和室の方から小さ

なさ声が聞こえた。聞き間違いかと思ったが、それはあの母親が消えた直後に聞いたもの

と同一であった。徳子が全身を固くしたのと、父親が新聞を勢いよく閉じたのは同時だった。

耳に残るような、ほんの微かな声なのにしっかりと聞こえる。

幾中にも重なって反響

するそれは、徳子だけでなく父親も震えさせた。あの笑い声とともに母親は消えた。和室

を振り返った父親の顔は瞬時に青ざめていく。おそらく、自分も殺されるのではないかと

怯えているはずだ。静かな笑い声の中、父親が大きく椅子を引いて立ちあがる。新聞を持

つ手が所在なさげにあちこちへと動いた後、徳子の側へと駆け寄っ

てくる。

「あれが、お母さんが言っていた、聞こえるはずのない声だよ。お父さんも聞こえるでしょ？」

父親は徳子の問いには答えず、ブツブツと呟くように唸った後、パジャマのまま廊下へ飛び出した。

「お父さん！」

この声に、徳子も免疫があるわけではない。それでも、あれだけ怖がる父親を目の前になると、なぜか落ち着いた気分になると同時に、苦しみばいいとさえ思った。だが、玄関の鍵を回し、ドアを開けた音がした途端、父親と女性の声がする。

「ごめんなさい！」

その一言で、相手が加奈子だと分かる。父親の後を追うようにして廊下へ飛び出すと、加奈子が呆然と玄関で佇んでいた。

「あ、徳ちゃん！　今、おじさんが飛び出して行ったんだけど、何か……」

「またあの笑い声が聞こえたの！　お父さんはどこに」

徳子がそう言いながら靴を履こうとした時だった。

「うわあああ！」

「お父さん？」

車庫の方から、父親の声が聞こえたことで、徳子は昨夜原人を匿ったことを思い出した。父親と鉢合わせをしてしまったに違いない。「かなちゃん、ちょっと車庫を見てくる！　ここにいて！」

「分かった！」

そう言うと、徳子は靴を半分履いただけの状態で玄関を飛び出した。父親の叫びはあの一瞬だけで、後は静かになった。あの笑い声が、加奈子に何かをすることはないだろう。門を出て車庫のシャッター脇にあるドアを開け中に入った徳子は、その光景に驚き声を上げることさえできなかった。それは、母親が畳の下にひきずり込まれた時、それよりも

すさまじい光景だったのだ。

「お兄ちゃん……？」

車庫の中にいた父親は、徳子に気づくと数歩下がって娘を守ろうと背中に回した。だが、

徳子にはそれがもう彼の優しさや愛情だとは思えなかった。

「誰だ、こいつ」

父親が、誰にともなく呟いた。車庫にいたのは父親、そして昨夜連れてきた原人。それ

に加えて、徳子が呼び出した兄だった。だが、もうそれは兄の姿ではなくなっていた。昨

夜、果物やお菓子を運ばなかったのがいけないのだろうか。原人は空腹に耐えられなかったのだろうか。

「おい！ 信昭をどうしたんだ！」

威勢を取り戻した父親が、車庫の奥に向かって叫ぶ。原人は、口の周りを赤く染めな

ら、じっと父親を見つめ返した。その手には、兄の足首がしっかりと握られている。兄の

意識はまだあるのだろう。荒い息をしているようだが、もう大声で叫ぶほどの力は残って

いないようだ。久しぶりに見た彼は、徳子の記憶にあるよりも頬はげっそりとやせ細り、

髪の毛は肩まで伸びている。

「信昭を、離せ！」

口ではそういうものの、父親は微動だにしない。反対に、原人はすね毛の生えそろうた

色白な兄の足に、また大きな一口で噛みついた。つつ、と原人の口の端から赤い液体が首

元まで伝ったあと、皮がべろりと剥ける。う、と吐き気を覚えたが、徳子はその光景から

目を動かすことは出来なかった。あの時、初めて原人と会った時に、猫を食らっていたの

と同じだ。父親も同じだろう。だが、兄は微かに身体を動かし、前進を試みていた。原人

もそれを止めようとはせず、兄は車庫の奥にある自分のバイクへと手を伸ばした。

「やっぱり、あのバイク……」

あまりの壮絶さに、徳子は腰が抜けたように壁に寄りかかる。そうしなければ、立っていられなかった。原人は猫を食べていたが、まさか人間も食べるとは想像もしなかった。これでは本当にあの噂通りではないか。徳子は関わってはいけない奴と接触してしまったのだと、後悔の念が浮かんた。兄は、その犠牲になったのだ。呼びつけたのは、自分。それを考えるだけで、視線を動かさなかった。父親もじつと固まったまま、ごくり、と喉を鳴らす。兄は、その間もバイクのナンバープレートを握っている。原人は、あの時同様に兄信昭の足肉を貪り始めた。どうして兄が大人しいのかは、すぐに分かった。どうやら彼は随分前に車庫に来て、父親が来る前から原人に襲われていたのだ。態勢を変えた兄の腹には、すでに大きな穴が空いていた。原人は、兄の足をしっかりと掴み、その肉と骨をかみ砕きながら、もう一方の手を開いた腹の穴へと突っ込んだ。赤い血液に混じって、ピンクの液体が流れ落ちる。その臭いを嗅ぐように原人はそれを鼻へ持っていた後、コートのポケットへと押し込んだ。これも同じだ。父親は初めての、しかも息子のことだ。喉を駆け上がる音が聞こえた後、徳子には背を向けた状態で車庫の地面に吐いた。朝ご飯どころか、昨夜の夕飯も食べていないのだろう。平静な振りをして、実は食欲もないのだ。足下に散らばったのは黄色い胃液が少しと、透明な液体が跳ねただけだった。それでも、その音が生々しく、徳子の気分もさらに悪くなる。のど元に込み上がる酸っぱい物を、口を閉じて我慢する。そんなことはお構いなしに、原人は兄を食していく。まるで映画のワンシーンを見ているようだ。

骨と皮を上手く剥ぎ、人間の力とは思えないほど強く、手足の一つ一つを分解していく。小骨は脇へ放り、飽きると腹の中に手を突っ込む。口の周りにある髭は、今や真っ赤に染まっている。コートのあちこちにも血のシミが出来、もうそれは徳子の知る原人ではなかった。

しばらくすると、バイクの片隅に堆く骨が積まれ、兄は目を開けたまま死に絶えていた。口からは涎を垂らし、父親の吐いた吐瀉物が髪の毛に付着している。底なしなのではないかと思うほど、原人は徳子達の前で兄を食べ続け、そして満足そうにゲップをした。たくさん骨の上に、目玉が二つ置かれる。そして、最後までバイクを掴んだ兄の片腕は、今も綺麗に残っている。それ以外の、兄の原形はなくなってしまった。というよりも、兄は徳子が思った以上にやせ細り肉が少なかった。ぎゅっと目を瞑っていたのを開けると、徳子の前で原人が横になる。

「お父さん……。お兄ちゃんも、おばあちゃんの呪いに殺されたんだよ」

「お前は、まだそんなことを言っているのか。おばあちゃんは、確かに階段から落ちて死んだんだ」

父親は、なおも兄の罪を隠すことに躍起になっている。

「そんなに自分の身が大事なの？ 家族はもういなくなっちゃうんだから。あたしは、もうお父さんとはやっていけない」

徳子は、もう父親の顔を見ることさえ嫌だった。加奈子が家の玄関で待っているはずだ。

彼女に助けて貰い、この家を出ていこうと思った。どうすれば祖母の呪いがとれるのかは分からない。それでも、ここにいるよりはずっとマシだった。

「徳子。警察を呼びなさい。この男を捕まえて貰うんだ」

満腹感で地面に寝そべる原人に態勢を崩さないまま父親が言う。

「警察？」

今更そんなものを呼んでも、どうにもならないことくらい分かって

いる。この原人は、最低限しか意志疎通も出来ないのだ。それで、なんになるというのだろう。父親に返事をせず、徳子は車庫の扉を開けた。

「待ちなさい」

その言葉が震えているのを、徳子は見逃さなかった。原人と残されることに怯えているに違いない。太陽の光の中へ徳子に戻ると、父親が背後で息を呑む心配がした。ただもう、助ける気はしなかった。そこまで原人の腹が減っていたのかと疑問に想いながらも、徳子は家の門をまたくぐる。加奈子と二人で早く逃げ出したかった。だが、徳子の心臓も破裂しそうなほどに暴れている。あの光景を話して加奈子は信じてくれるだろうかという不安と、全てをぶちまけて抱きしめて欲しいと思った。

玄関で靴を脱ぎ、加奈子の姿を探す。時間は随分経ってしまったが、彼女は車庫には来なかったはずだ。だが、彼女の靴は玄関に見あたらない。徳子達を探してどこかへ行ってしまったのだろうか。玄関を出て表通りを確認する。そこにも彼女の姿はない。今度は庭へ回ってみる。以前は手入れが行き届いていた。母親が家のことをよくやっていた、ほんの少し前までは。庭の芝生は綺麗に刈られ、プランターには季節にあった花が咲いていた。

家のあちこちが曇りのないほっきりと磨かれていたのも、全て遠い昔の気がした。庭には誰の姿もないので引き返そうとしたが、ふと窓から家の中を見る。視界の隅で動く物を捉えたようで、和室の前へ走っていく。そこにいたのこそ、徳子が求めていた加奈子の姿だった。しかし、彼女は何をしているのだろうか。和室の母親が引きずりこまれた穴に身を埋め、そこで何かをしていた。

「かなちゃん！」

縁側に足を乗せ、窓を叩く。瞬間、加奈子がハツとして庭を見たが、徳子に構わずまた穴の中へ手を伸ばす。

「ちよっと……何をして」

ドアを引いても、鍵がかかっている。リビングの窓に行っても同様

だった。鍵がかかっている。もどかしい気持ちを抑えて玄関へと走る。徳子が和室へ行った時には、すでに加奈子は焦ることもなく、畳の床に穴を開け、地面を掘っているところだった。加奈子には事情を話してある。そこを掘っても何もない。祖母の怨念が降りかかるだけとしか思えない。

「香奈ちゃん、行こう！　もういいよ。原人が、お兄ちゃんを殺しちゃった！　今のうちに、ここから離れよう！」

徳子は穴の中にいる加奈子の片腕を掴むと引き上げようとした。だが、その倍以上の力で、加奈子は徳子の手を振り払った。予想していなかった加奈子の行動に、徳子は足下がふらつき、そして畳の上に倒れ込む。頭を畳に打ち付け、一瞬だけ視界が揺れる。徳子には訳が分からなかった。土を両手で掻くその表情は、今までの加奈子とは思えないほど真剣で、狂気じみていた。

「香奈ちゃん……どうしてそこを掘っているの？」

徳子の声が、無情にも先ほどの父親よりも震える。

「徳子、こっちへ来なさい」

振り返ると、和室の戸に寄りかかるようにして父親が立っている。

そして、それに気づ

いた加奈子が顔を上げ、父親を睨んだ。

「お父さん。香奈ちゃんだよ。ほら、裏通りの。……今も、知り合いなのか？」

二人の視線は、確かに交錯している。そしてその間にあるのは、親しみや懐かしさを楽

しむ物では一切なく、お互いが睨み合っている。加奈子は徳子の生活を知り、応援してく

れていた。それがいきなり、どうしてこうなるのだ。

「ちょっと、どういうこと？ あたしはまたのけ者なの？」

もう怒る気力さえない。ただ、呆れたように呟き、全身の力が抜けた。

「徳ちゃん。騙すつもりはなかったの。最初は本当に、会えて嬉しかったよ」

加奈子は口を動かしながらも、手を休めない。今では、畳の上に土を乗せて夢中で掘り続ける。それを止めるのも怖くて、徳子は父親を見上げた。ここに何があるというのだ。

父親も、真っ青な顔でそれを見つめる。

「でも、言っていなかったことがあるの。私は、離婚したわけじゃない。籍はまだ入っているのよ」

突然うち明けられる事実には、徳子はただ戸惑うばかりだ。

「それに、大学へ紹介して貰って仕事を見つけたのも、わけあってのこと」

「どういうこと？ 香奈ちゃんは、あたしのことを心配して」

父親が、加奈子に話しかける徳子を遮る。

「君は、うちが怪しいと、ずっと思っていたのか？」

「お父さん」

「違います。徳ちゃんが、バイクの話をしてからです。聞けば聞くほど辻褄があっていて、

私の方が驚きました」

加奈子が、ふいに手を止める。どれだけ掘っただろう。汚れた手で、額に落ちた髪をかきあげる。

「あたし？」

徳子が加奈子に言ったことでこんなことになったのか。

「でも感謝しているの、徳ちゃんには。だってもう諦めかけていたから」

「かなちゃん、おばあちゃんが死んだのと、関係あるの？」

父親は、もう何も言わない。

「ごめんなさいね、もうひとつ。徳ちゃんは勘違いをしているわ。確信を持つまで言いたくなかったの」

加奈子は手の甲で頬に流れる汗を拭った。今日は快晴も重なって気温はどんどん上昇している。住宅街らしく、自転車に乗った子供達が笑いながら走っていく。と、加奈子がふと笑みを漏らす。

「ごめんなさい、徳ちゃんのお母さんが亡くなったのは、おばあさんのせいではないの」

「え？」

今までずっとそう思い込んでいたのに、肩透かしをくらったようだった。父親の言うこ

とが正しいのか。それならば、あのバイクに付着した血はなんだ。

「お兄ちゃんは一切……」

「徳ちゃんのお兄ちゃんね、あの日、私から大事な物を奪ったの」振り返る加奈子の目にはうっすらと涙が滲んでいる。加奈子の大事なものの。家族、夫。そ

して……。徳子はあの夜、加奈子の寮の部屋で見た赤ん坊の服を思い出した。

「もしかして、かなちゃんの子供を」

あの血は、赤ん坊のものだということか。そして、加奈子がここを掘っているということは。

「そう。徳ちゃんのお兄ちゃんが殺したのは、おばあさんじゃない。私の娘よ」

「赤ちゃん。あの服の」

「そう。あの子は、生まれてまだ数ヶ月しか生きていなかったのに」加奈子が、父親を睨み付ける。

「話は聞いている。乳母車を君は放置していたそうじゃないか。それも子供を乗せて。親の責任だ」

「それを……それを、あんたの息子がひき殺したのよ」

加奈子がゆっくりと穴からはい上がってくる。その手には、土にまみれた何かがあった。目を凝らして見れば、加奈子が優しい手つきでその土を払っていく。と、徳子の口から悲鳴が漏れる。その中にあったものは他でもない。ある一部分だけが白骨化した乳児の遺体だった。目玉もなく、髪の毛も少量しか生えていない。何もかもが小さいままで成長を止めた、しかしそれは間違いなく人間だった。「徳ちゃんに、お兄ちゃんがバイクで事故を起こしたかも知れないと聞いたとき、ぴんと来たの。でも確証はなかった」

「あの時、かなちゃんを助けに呼ばなければよかったのかな……」
母親が消えた日、加奈子に全てを話さなければ分からない事実だった。彼女に会ったこと自体が、自分の家族を最終的な破滅に導いたのだろうか。

「感謝しているの、徳ちゃん。あの日がなければ、私はまだ身動きが出来なかった。でも、お母さんがここに引きずり込まれたと聞いて、まさかと思ったのよ。会えて良かった」

加奈子は、胸の中に抱いた赤子の遺体に頬ずりを繰り返す。徳子の家族が、兄が、加奈子をおかしくしたのだと罪の意識を感じながらも膝が震えてしまう。

「それが、君の子供だとなぜ分かる。私は教師だ。変な噂をたてないでもらいたい」

窮地に立たされたからだろうか。父親は急に強気になると、加奈子に向けて吐き捨てる。

これだけのことが分かっているのに、その態度の父親にはもう嫌悪感しか残らない。亡骸

を抱きしめる加奈子が哀れでならない。

「お父さんは、事故が会ったときもそうしてお兄ちゃんを威圧したんじゃないの？」

父親の視線が徳子に移る。竦む足を堪えて、口を開く。言葉は誰かが言ってくれているように自然に零れた。

「さっき見たお兄ちゃんはやせ細っていた。ほんの数ヶ月前見た時とは全然違ったでしょ

う。きつと、お兄ちゃんは罪を認めたかったんだよ。そうさせなかったのは、お父さんでしよう？」

「あいつは気持ちが悪かったからダメだったんだ。避難させてやったのに、ろくに外にも

出なくなった。でもそれは息子のしたことだ。成人もしている」

確かに、徳子の知らないところで時は回っていた。それを知りたくてここまで来たのに、やはり事実を知っていいことなどない。

「徳子。お前に言わなかったのは、考えてのことだ。知らせないことで守ったんだ」

―徳子を守りたかった。だから言えなかったんだ。

田辺の言葉が蘇る。どうして、話さないことが守ることになるのだろうか。やはりこれは

間違っている。

「この子は、私の子よ」

徳子と父親が言い合う脇で、加奈子は遺体を抱きながら何度も何度も繰り返す。

「おばあちゃんは、お兄ちゃんが殺したんじゃないのね」

徳子の問いに、父親は鼻で笑った。

「何度言えば納得する。ばーさんは、信昭に殺されたわけではない」

「それじゃあ、本当におばあちゃんが死んだのは事故だったのね」

「それとも少し違うな」

徳子の眉間に皺が寄る。父親は、徳子から見れば尊敬するに値する人物だった。家で会社の口を零すこともなく、周りの人間に慕われる。人情も厚くて実直な人間だと思ってきた。だが、思えば父親と

過ぎた時間は限られている。結局上辺しか見えていなかった。

「ばーさんは、信昭が事故を起こすのを見てしまったんだよ」

「おばあちゃんが？」

「そうさ。それで、すぐに警察を呼ぼうとした」

「それで、殺したの!？」

徳子は、横目で加奈子の位置を確認しながらも、事実を知りたい欲求を抑えられなかった。どれだけこの男が腐っているのか、見届けてやる。

「だから、殺していない。本当に階段から落ちたのさ」

「おばあちゃんは、二階へほとんど行かなかったじゃない!」

甲高い声で抵抗すると、父親は深いため息を吐いた。加奈子が窓際に行き、空を眺める。

「そんなに知りたいのなら教えてやる。あの日、信昭が事故を起こしたのを、ばーさんは見てしまったんだよ。信昭が動転して家の中に入って来た。赤ん坊を抱えてな」

ちらり、と窓際に視線を送る。和室に静かにメロディーが流れる。

一瞬、あの笑い声かと思ったが、それは加奈子の鼻歌であった。

「父さんと母さんはリビングにいて、ばーさんと二人で言い争うようにして玄関に入ってきた」

「それでおばあちゃんは、二階へ」

父親がゆっくりと頷いた。

「そうだ。二階で争いが続いたと思ったら、ばーさんが階段を転がり落ちてきたんだ。心臓発作だったらしい」

「……それで、大木先生が」

全てを徳子以外の人間は知っていたのだ。医者までを騙せたのだろうか。それとも、片棒をかつがせたのだろうか。どちらにしても汚いではないか。

「最低。最低、もう嫌だ。出ていく!」

徳子はそう言うと、堪えきれない涙を拭った。荷物はまた取りに来ればいい。銀行のカードさえあれば他の物は捨てても構わない。

この家の匂いの染みついたものを持っていくことさえ汚らしい気がした。

「徳子！」

父親は今までに見たことのないほど俊敏な動きで方向を変えようと、徳子の腕を強く掴んだ。

「離して！」

振り払おうとしてもその力は、父親ではなく男のものだった。内出血になりそうなほど強く、恐怖に声も出ない。父親は額に青筋を立てて、口の端から泡を吹いている。

「嫌だつてば！」

もう一度強く腕を振ったとき、庭に人影が現れた。それは、父親の手を一瞬怯ませたが、徳子が逃れることは出来なかった。

「あ……あいつはなんだ!!！」

庭に現れたのは、車庫で兄を食べ尽くし横になっていた原人の姿だった。芝生の上をうろうろと歩き回りながら、徳子達の方を窺っている。そして、父親、加奈子へと視線を移す。

「あいつを、警察だ。徳子、電話を」

言ってから、徳子の腕を掴んでいることを思い出したようだ。しかし、その手を離すことはやはり躊躇われたようで、じっと庭にいる原人を睨んだまま、後ずさりをする。原人の口元と手は真っ赤である。

「徳子、一緒に出るんだ！」

父親が徳子の腕を引いた時、加奈子が動いた。鼻歌を歌いながら、窓の鍵に手を掛け、そしてそれはずしたのだ。

「かなちゃん!!！」

今は、原人が危険な生き物にしか見えなかった。

「かなちゃん!!！」

徳子が叫ぶのと、原人が窓ガラスを開けるのは同時だった。父親が、

リビングへ走り去

ろうとした時、原人は徳子の前を走り抜けて父親の服の裾を捕まえた。原人は飛びかかった。

たというほうが正しいのかも知れない。二人は床になだれ込むように倒れ、そして父親が

悲鳴を上げた。

「お父さん！」

原人の下敷きになった父親が、藻掻き、手足をばたつかせる。床を叩き、扉を蹴る。ソファに手を伸ばし、また叫び声を上げる。

「……お父さん」

加奈子が呟く。この部屋で、誰かをお父さんと呼ぶのは、徳子だけである。ここは徳子

の家であり、家族は徳子と父親だけのはずだった。視線を彷徨わせると、他にここに言わ

せている人物、それしかない。加奈子が、赤子を大事そうに撫でながら父親に向けて話

している。

「かなちゃんて、もしかして」

彼女とは姉妹なのか。そう思った。しかし、それに反応したのは父親ではなかった。父

親に乗っていた原人が、加奈子の方を振り返り、にやり、と笑う。もじやもじやの奥にあ

るその小さな目が、興奮で輝いているのが分かった。

「どういこと？」

呟く徳子をよそに、父親が悲鳴を上げた。原人が、父親をずるり、ずるりと穴へ向かっ

て引きずっているのだ。

「かなちゃん！」

加奈子の側へ駆け寄ると、つんと腐敗臭が鼻をかすめる。これが自分の家の床下にあっ

たのかと思うと、それだけで目眩に襲われた。加奈子はそれでも徳子を視界には入れず、そっと子供を寝かしつけるように身体を前後に揺すっている。その間にも、父親は穴へと一直線だ。畳に立てる爪痕が、無様に父親の爪を痛めている。畳にも父親の指から出た爪が滲む。

「原人……は、誰なの？」

と、和室にまたあの声が響き渡る。が、今度は腹の底をくすぐられるような軽くて、それでいて残酷なまでに背筋が寒くなる。そして、加奈子の手の中にいる骨が、カタカタと小刻みに振動していた。高笑いがさらに続き、超音波に似たような音になる。さらには、ガラスを爪でひっかくような者へ変化し、耳を塞ぎたい衝動にかられた。膝がおれ、畳に倒れそうになるのを必死で堪える。このままでは父親が危ない。それに、加奈子はあの骨を抱えたまま、どうなってしまうのだろう。加奈子だけでも助けてあげたかった。

父親は、あの時の母親と同じだった。いや、穴がすでに開いている分、母親よりも簡単

にそこへ吸い込まれるように入っていく。まるであり地獄のようだ。母親と父親が吸い込まれ、兄は、原人に喰われてしまった。もう家族はいない。そう思った途端、張りつめていた緊張が一気に溶けてなくなっていく。最後に徳子が見たのは、父親が溺れるようにして片腕で宙をかいている姿と、その脇で仁王立ちをしている加奈子の姿だった。部屋の中

に響くのは、どこからか聞こえるバイクの音と、赤ん坊の泣き声、それだけだった。

8 夢かうつつか

「徳、早くお風呂に入っちゃいなさいよ」

リビングでテレビを見ている徳子に、母親が後ろから声を掛ける。

「ほら、タオル」

「ああん、うるさいなあ」

頭に置かれたバスタオルと洗いたてのパジャマを、徳子は迷惑そうに振り落とす。ソファに転がっているのはもう一人、彼女はこうして時々泊まりに来る。

「とくー、羨ましいよう。お母さんがこんなに優しくしてくれるなんて。うちなんてさあ、両方働いているからいっつもひとりでさ」
「もつと言ってやってよ。恵ちゃん。ほら、一緒にお風呂入って来なさい」

「はぁーい」

母親に言われ、恵が徳子の腕を引いて立ち上がる。台所には、塾から帰宅したばかりの兄が夕飯の煮物を箸でつついている。祖母はもう和室に引き上げた。ここ数年、寝る時間は富に早くなったようだが、それでも風邪ひとつ引くことはない。

「おばあちゃんも眠っているんだから、テレビも部屋で見なさい」

母親の小言を背に、徳子が恵とリビングを出る。そして廊下に足を踏み入れた時、玄関の扉が開かれる。外から吹き込む風は冷たく、そこから逃げ込むように、父親が姿を現す。

「あ、おかえりなさい。お邪魔してますう」

恵の声に、父親の疲れた顔も光が差したように明るくなる。

「ああ、いらっしやい。ゆっくりしてね」

徳子は父親に声を掛けることもなく、洗面所に入る。恵が二言ほど言葉を交わした後、あとを追ってくる。

「徳ー。この家は仲が良くていいねエ。おじさんにも会えてラッキ

」

素早く服を脱ぐと、二人で湯船に駆け込む。もうもうと湯気の立ち込める浴室は、一人で入るほうがリラックスできるが、二人だとより暖かい。

「お父さん？ 額禿げているじゃん」

徳子がお湯に肩までつかって言う。恵も洗面器にすくった湯で体を流すと、すぐに徳子の隣に滑り込む。うー、とどちらともなく唸り声が漏れ、顔を見合せて笑う。

「えー、禿げていてもいいよー。田辺もそのうち禿げるかもよ」

恵がそう言って、徳子の顔に手で湯を飛ばす。

「やったなあー。田辺君は大丈夫だよおだ」

徳子も仕返しとばかりに倍の湯を恵の顔めがけて飛ばす。

いつでも悪かったことばかりを思い出す。だが、一度底まで落ちてみれば今度は良いことばかりが蘇る。徳子にも幸せな家族に囲まれた時間は存在していた。それが壊れる日が来ることなど、考えたこともなかったのに。

＊

徳子が目を開けると、白い天井が迫ってくる感覚に襲われた。息苦しさを覚えて、一瞬咳き込む。

「大丈夫ですか！」

ドアの開いた音がしたと思ったら、看護師の姿の女性が徳子の脇に駆け寄ってきた。目の下に大きな黒子がある彼女は、点滴の袋をベッドの上に置く。そして徳子の身体を横に向け、背中を何度もさする。数分咳き込んだらどうか。落ち着いた時には、ここが病院であることを理解していた。しかし、なぜ自分がここにいいのか、そしてあの後はどうなったのか、どうしても思い出せなかった。

「あたし……」

看護師は徳子が落ち着いたことを確認すると、ふと腕時計に目をやる。

「あなたは、事件に巻き込まれたのよ」

事件、とは徳子の家で起こったことだろう。あれは、誰かに発見されたのだ。そして、

徳子だけが助かった。加奈子は、原人はどうなったのだろう。

「あたしの他に、誰か助かった人は……」

久しぶりに話すという実感は、喉の奥が干上がっているようだった。

「残念だけど」

看護師が申し訳なさそうに言ったが、徳子は涙も出なかった。父親、そして他の家族が

したことは、どうしても許せない。加奈子に謝っても償いきれない。寝返りを打った、

その時だった。

「とく！」

病室のドアがまた開き、懐かしい声が聞こえる。そして姿を現したのは、やはり想像した通りの人物、恵だった。

「とくこー」

すでに目に涙をいっぱい溜めた彼女は、徳子のベッドへ来ると、覆い被さるようにして

布団に倒れた。そして、徳子の身体の輪郭を確かめるようにあちこちを触る。

「めぐ」

まだ、声が掠れる。恵は、今日も頭の上にポニーテールを作っている。

「恵が、助けてくれた、の？」

その問いに彼女は何度も強く頷いた。布団から点滴のついた状態の腕を出し、彼女の手

の甲をそつと撫でる。その動作で、加奈子を思い出す。

「あたし、どうして」

窓の外には綺麗な白い雲が浮かんでいる。加奈子を思い出すと、胸がちくり、と痛んだ。

「お婆さんのこともあったから、心配で夕方になって家に行ったの」
それでは数時間以上も、徳子は発見されなかったのか。恵は、拭くてもすぐ出てくる涙と鼻水をそのままに、訴える。

「そうしたら、窓は開いているのに、徳子があそこでまた倒れていて。家の中の物が倒れたり、畳に血がついていたりで……怖くて、徳が、死んじゃうと思って」

いっそ死んでしまえば楽だったかもしれない。そう考えると、生き残った自分に対して涙が溢れる。こんな事実だけ知らされて、一人だけ生き残って何になるのだ。唇を噛みしめて堪えていたが、恵と目が合った途端ふと口が開く。一気に声が出ると、止まらなかった。オオカミの遠吠えのように、徳子は吠えた。

顔を隠すこともなく、口を覆うこともない。ただ、あらん限りの声を上げ、布団を拳で何度も何度も叩きつけた。それだけでは飽き足りず、最後は両足をベッドに打ち付け、恵が見つめる中、身体を震わせて泣いた。一頻り泣いた後、徳子は恵の顔を見つめた。恵は窓際で、徳子が大学でそうしていたように、そっと窓の外を見つめていた。

「加奈子さんが、今度のことに関係しているんだね」

何から話そうと迷っている徳子に変わって、恵が言った。

「彼女、あの日も様子がおかしかった」

「気づいていたんだ……」

恵は、徳子を見ようとしなかった。ただ、そっと頷いた。

「あの日。初めて加奈子さんに会った日よ。凄く顔色が悪かったし、玄関に現れた時に、

尋常ではなく震えていたの。徳子も気分が悪そうで分からなかっただろうけど」

確かに、あの日徳子は風呂場でシャワーを浴びて気分が悪くなっていた。加奈子の顔色

が悪かったのも、変な話を聞かせたせいだと思っていたのだ。それなのに、実際は、徳子

の兄が加奈子の子供を轢いたことを悟っていたのだ。

「おばあさんのことも、何か分かったの？」

徳子は、恵に何も言えず、ただ首を横に振った。事実を、どうして言えるだろう。

「お父さんと話したの。そうしたら、二階で言い争ったのは事実みたい。でも、階段から

落ちた原因は心臓発作だったって」

「そう。おばあさん、可哀相だったね。でも、徳子が無事で良かった」

恵のほっとした声に、幾分徳子の気も安らいだ。田辺のことはあった。だが、それも多

感期にはありがちなことだ。恵とはそれ以上に話は合うし、支えてもらった。

「田辺のことなんだけどね」

徳子がそう考えていると、ふと恵がそう言った。

「あ……あたしの所に来てくれたよ。恵に番号聞いたって」

徳子はもう彼にとっての愛情はない。恵が付き合いたいならそれでもよかった。

「徳子？」

恵はきょっとした表情で徳子を振り返った。

「ごめんね、恵が田辺君を好きだなんて、私気づかなかったの。でも、もう気にしないで」

田辺が恵と付き合うならとつくにまともっているはずだ。うまくいかないと信じている

からこそ、強気でいられた。これは決して、女の意地などではない。「ちょ、ちょっと待って！」

恵が、徳子の元へと走ってくる。靴音がパタパタとリノリウムを叩く。徳子の頭は次第

にはっきりと覚醒し、あの田辺の顔を思い浮かべる。だが、もうそこに愛しい感情が湧か

ない。

「田辺に何を聞いたの？ 徳子」

真剣な顔で言う恵に、徳子はためらいながらも伝えた。

「あたしと別れたのが、恋愛に……女に疲れたって」

「徳子、濁さないで。平気よ。あたしのせいだって、言っていた？」

「それは……」

徳子はベッドに手をつき上半身を起こしながら言う。反対に、恵はくるりと背を向けた。

「彼が、私をそう見ているのは分かっていた。確かに、私は中学の時に田辺に告白したよ。徳子に黙っていたのは、気持ちが違うと自分で分かったからよ」

「気持ちが違う？」

「そう。つまり、私は田辺のことは好きじゃなかった。あれくらいの時ってあるじゃない、周りと同じに人を好きになるって。そうだったの」

「田辺くんの思い込みだったこと？」

「中学の時に告白して振られたのは間違いじゃないよ。でも高校に入った時は、違う。そうでなければ、徳子にだって紹介しないでしょ」

「……うん。でも、真奈美のことは」

徳子は今だからこそ、今しか聞けないと思った。

「まなみ……ね」

恵は困ったように笑う。

「それも田辺が言っていた？」

「……あと、バイト先の知り合いが」

「真奈美とは、中学の時に仲良しだった。でもあの子の家も色々あったらしくて、まなみは嘘を楽しむようなところがあったの」

「それは、前にめぐが言っていた……」

「そうだね。周りを騙してまで嫌いな子を一人にさせようとするところとか、一番の仲良しだった私だからこそ、見えてしまうことだ

ったの」

今の真奈美は、何度徳子が冷たくしようともご飯に誘ってくれる。分からないことを教えてくれる。そんな素直な子だからこそ、恵の言うことを信じられない想いもあった。

「でも、真奈美も高校に入ったら落ち着いて、ある日連絡をくれて謝られた。だから、今は普通に友達だよ。田辺と徳子のことを聞かれた時も、普通に話したし」

確かにそうだった。真奈美は恵にメールをしたとふざけた調子で、でも楽しそうに話していた。

「あの変な男の話を聞いた時は、また昔の癖が出たのかと思って、真奈美のことを悪く言っちゃったけど」

「でも、本当にそれに近い変質者はいたから……」

徳子がやはり掠れた声で言う。恵が、何度か小刻みに頷いた。それならば、問題はなかったことになる。原人は兄だけでは物足りず、父親をも食べたのだろう。そして、あの穴へと消えていった。真奈美は、やはり徳子の知っている彼女であり、恵も大事な友達に変わらなかった。父親が大事なことを徳子に話さなかったことも、田辺が黙って守ろうとしてくれたことも勝手だと思う。だが、それが彼らなりの方法だと納得していきたい。

自分の殻に閉じこもり、傷つくことを恐れていたことを恥じた。傷つけられていると思うていた一方では守られてもいた。怖がるだけで周りを遮断するだけでは何一つ変えられない。少しずつでいい。自分を解放していこう、そう思えた。

「確かに真奈美は、人の不幸の話は好きだしおしゃべりよ。でも、それ以上に優しいよ。真奈美のこと、徳子も大事にしてあげてね。人の幸せを邪魔したくなる気持ちには、人間誰でも持っているしね」

恵が、泣きそうな顔で言う。徳子も、目を赤くして頷いた。

＊

それからしばらく、徳子の周りは慌ただしかった。徳子は恵に発見され、警察が何度も

病院へやってきた。父母の死体はなかったので、行方不明という結果がなされた。しかし、車庫にあった兄の一部は当然ながら発見され、事情聴取を受けた。その惨殺な犯行から一時期はニュースの放送時間上位を占めた。それほど事件が注目されると同時に、徳子は実家に住むことが窮屈になり、家売り払うことになった。遠方から父親の弟が駆けつけてくれ、驚きながらもその様々な処理を手伝ってくれた。警察の事情聴取で原因が分からないで通した徳子の身を、影で支えてくれたのも叔父だった。そして徳子は大学を辞め、就職することになった。特に目的があって入ったわけではない。辞めることに悔いはなかった。

そして今日、徳子はアルバイト先に挨拶をしてから、大学に退学届けを出しに行く。新緑をつけ始めているあの桜の木を見上げながら、徳子はここで過ごした日を思い出した。友達もうまく作れなかった。まだ何も学んでいない。それでも、ここは徳子が過ごした大学だ。あれから加奈子の姿も消え、噂は尾ひれをつけて泳ぎ回っている。

「とくちゃん！」

聞き慣れたその声に振り返ると階段の上から誉田が手を振っていた。何度か見舞いに来てくれた彼は、いつもお菓子を持ってきた。こうして、ここで会うことももうなくなる。

「誉田君。お見舞いありがとう。あたし、今日で辞めるね」

「徳ちゃんがいなくなっちゃうのかあ。電話するから今度遊ぼうよ！」

こんな事件に遭っても、変わらず接してくれる人は珍しい。徳子はもうその優しさに抗

ったりすることはしない。

「ありがとう。でも、真奈美ちゃんいいの？ あんまりあたしに構っているとか本命を逃しちゃうよ」

ぺろりと舌を出すと、誉田が苦笑いをして言った。

「徳ちゃん、だからそれは誤解だって。あの夜、電話でも言っただ

ろう。俺とまなみんは、そういうんじゃないんだって」

肩を竦めるその仕草と服に染み付いたポップコーンの匂いは、これからも誉田を想像させてくれるだろう。

「あいつに口止めされているから黙っているけど、俺とまなみんは、従兄弟なんだよ」

「ええええ!?!」

誉田が秘密を強調するかのように、徳子の耳元に顔を寄せる。そして、すぐに辺りを見回した。狭い階段に、もちろん他に人はいない。

「あいつ、中学の時に親が離婚で揉めてさ。荒れていたんだよ」それは、恵の言っていた時期のことだろう。

「俺が心配してやっているのに恥ずかしいとかひどいよな」

誉田と真奈美が従兄弟だという衝撃に、徳子は笑みさえ漏らす余裕がない。だが、だからこそその想いに、誉田の優しさに触れた。

「なんだ。勘違いしていたよ。そっかあ、そうだったんだ。もう、早く言ってよ」

「あ、俺から聞いたって、お願い! 言わないでね。あいつ、こええんだよ」

誉田は急に挙動不審になると、懇願するように言う。

「大丈夫。それじゃあ、またね」

スタツフルームに上がろうとした時、誉田がもう一度呼びかける。「あ、待って。とくちゃん」

振り返ると瞬時に顔を赤くした誉田が、徳子をじっと見上げていた。

「今度は……!」

「え?」

あまりの誉田の声の大きさに徳子が驚く。だが、誉田は勢いをつかたのか叫ぶように言った。

「今度は! まなみんじゃなくて、徳ちゃんに持っていくから! ポップコーン!」

それが彼の精一杯の気持ちだと気づいたのはすぐだ。伝染するよ

うに、徳子の頬も赤く染まる。そして吹き出しそうになるのを堪えて、ゆっくりと頷いた。大丈夫、前に進めている。それだけで、徳子の心は浮上する。軽く手を上げ誉田と別れると、スタッフルームで社員に挨拶をして回る。心配の言葉よりも避けられることが多く、後味がよくはなかった。だが、それでも徳子はここでアルバイトをしてよかったと思えた。

結局大学に届けを出した時には昼を大きく回っていた。学生課へ届けを出し、校舎を少しだけうろつく。そして、図書館へ行った後に研究室へと向かった。そう、最後に加奈子の研究室に、だ。何が出るわけでもない。だが、加奈子があの場所にいたことやその子供の事件についての関連性はまだ誰にも知られていなかった。ただ、徳子の家が襲われたことになっている。

「失礼します」

研究室のドアを開けると、女性が一人窓際で弁当を広げている。学科が違えば、徳子の顔など分からないだろう。黒髪を襟足で一本に縛った彼女は、徳子に鋭い視線を向けた。

「何？」

その冷たさに、若干怯む。

「すみません。加奈子さんの知り合いの者なんですが」

徳子の言葉に、彼女の顔が歪む。

「加奈子さんって、この間から来ないらしいのよ。それで、あたしが代人で配属されたんだけど。あなた知り合いなら荷物を持っていく？　お願いしたいの」

彼女は、無断欠勤になっているのか。

「あ、はい」

研究室の中に入ると、南向きのせいで幾分むっとした空気が肌を撫でる。それに弁当の

匂いがまじり、ことのほか研究室内が臭かった。

「これよ」

箸を持ったまま、助手が机の隅に徳子を誘う。そこには段ボール一

箱に過ぎない、加奈

子の荷物が無造作に置かれていた。

「このひと寮に住んでいたらいいのよね。その荷物も全部置き去りだって。しかも、教授

の名前が入ったらしいのに迷惑よね」

冷たく投げられたその言葉に言い返す気力も起こらず、徳子は段ボールに手をつけた。実家に連絡を取ることも可能だが、未成年でもない限り捨てられるのがオチだろう。教科書や、筆記用具、パソコン関係の器具などがほとんどだが、一番下にある一際目立つものに目を奪われる。ハイビスカスで飾られた写真立てである。その中にある写真を見て、徳子は息を呑んだ。写真に映っているのは、加奈子、そしてその腕には、あの赤ん坊が笑っている。加奈子の目とそっくりな顔をした、柔らかくて可愛い子供だった。そして、その隣にいるのは、徳子も知っている人物だったのだ。

「これ……」

フレームから震える指で写真を取り出すと、徳子はそれに顔を近づける。そして、裏返して見ると、その写真が撮られた日付と家族の名前が書かれていた。

―二〇〇九年十月十三日

花輪 元治 三十歳

加奈子 二十七歳

奈々 五ヶ月

「なに、これ……原人じゃない」

そこに写っているのは、あの公園で猫を喰らっていた、そして兄を殺害したあの原人の姿だった。

「二人は夫婦だったの？」

徳子が呆然としてしていると、助手の視線を感じた。夫婦であり二人の間に子供がいたとすれば、あの「お父さん」と加奈子が呟いたことも納得できる。

「すみません。あの、荷物は私には分からないみたいです……ごめ

んなさい」

呟くように言うと、徳子は研究室を逃げるように飛び出した。

「あ、ちょっと！」

助手が背後から呼ぶ声を無視して、先ほどの写真を握りしめたまま、エレベーターに乗

り込む。数人居合わせた生徒が、飛び込んできた徳子に視線を向ける。荒い息を繰り返す

ながら、徳子は加奈子の端々で見せた寂しそうな表情を思い出す。

下りのエレベーターで

はいつも目眩を覚える。だが、今日のそれは乗り物のせいではない。

加奈子はどこまで知っていたのだろうか。

その謎が解けたのは、それから一週間が経ってからだった。荷造りを全て終え、明日徳

子が引越すことになっている。午前中で最後の用事を済ませると、午後は恵と昼食を取る予定だ。ジーンズのポケットに入れて置いた携帯が小さく震える。画面を開くと、そこには、事件後から数回連絡を取り合っていた刑事の名前が表示されていた。

「もしもし？」

もう用事はないはずだ。犯人がいないことは、徳子が一番よく知っている。このまま連絡を取ることなどないと思っていた。

「ああ、こんにちは。那賀川署の者です。徳子さん、ですよね」

「……はい」

正直、もう余計なことには関わりたくなかった。だが、電話を取らないわけにもいかない。ただ、事件へのトラウマが関連した人間と話そうとするだけで吐き気を催した。それが強いのが、特に刑事だった。根ほり葉ほりを聞き出そうとして、その目で殺せるのではないかと疑うほど見つめられる。

「明日、引越しをなさるとか」

そんな挨拶はいらない。無言で応戦すると、刑事は呟きをした。

「実はですね、お引越しをされる前に、ぜひ渡しておきたい物があります。それに、徳子さんに会いたいという人物がいます」
会いたい人物。もう徳子にそんな者はいないはずだ。

「どこかで今日お会い出来る時間はないでしょうか」

その申し出を断る訳にはいかなかった。

「これから少し用事があるので、その後でも構わないでしょうか。署の方へ伺えば？」

「いえ、今度は別の場所でお願います。詳しくはお会いた時に説明します。こちらでも今動転している状態なので」

男の言う通り、電話の向こうでは慌ただしい気配がしている。彼は、徳子に来て欲しいという場所と住所を告げる。

「それでは、その時間にそこへ伺います」

電話を切った後、徳子の胸がまた騒ぎ始めた。

「徳、大丈夫？ お腹減ってないの？」

恵と合流してから近くのファミリーレストランに入ったが、徳子の食欲は湧かなかった。恵がランチセットを平らげたのに、徳子はそのサラダさえまともに食べられていない。

「あ、うん。ちょっとこれからのことが心配で」

「徳……なんかあったら呼んでね。電車で二時間くらいでしょう。すぐに行くから」

恵の心強い言葉に押されて、徳子もまた一口食べる。しかし、結局それ以上を飲み込むことが出来ず、恵にはこれから刑事と会うことを話してしまった。

「警察病院？ そんなところに呼び出されるなんて、もしかしてお父さんやお兄さんが見

つかったのかな」

最後に注文したパフェにしっかりとスプーンを埋めながら、恵は言った。

「どうだろう。詳しいことは会って話す、の一点張りで」

「よし、分かった。私が徳を送っていくよ。それくらいしか出来ることもないし」

「でも……」

「だって、心配じゃない！ いいから、徳子は頑張って早く食べなさい」

押し切られるようにして、徳子は出来るだけのものを腹に詰め込むと、早々に店を後に

した。警察病院へ来いと言われた時、徳子も父親が助かったのかと思った。あれ以来、徳

子はずっと安いホテルに宿泊している。あの和室は、引っ越しの準備をする時も業者にま

かせたきり、一步も踏み込んでいない。だからこそ、あそこがどういう風になっているの

か、彼らの一部がどうなったのかは徳子には知らされていなかったし、知りたくもなかった。

だが、もしたとえ父親が助かったとしても、徳子はもう彼と一緒にやっていく気には

なれない。もう誰でもいい。放って置いてくれ、と刑事に言うつもりで徳子は警察病院へ

と足を向けた。恵は徳子の顔が固いのを気にしてか、最近の大学での出来事やサークルで

の問題を話してくる。それでも、徳子の頭を駆けめぐるのは、一連の事件のことばかりだ

った。自分は一生気分が晴れないのではないかとさえ想ってしまう。警察病院は、徳子が

数回訪れた那賀川署の裏通りにあった。恵は、その前に行くと一瞬躊躇った。

「めぐ、有り難う。もう大丈夫だよ」

病院の前で恵に言うと、彼女は少しだけ迷った素振りを見せた後、頷いた。

「分かった。それなら、徳子が刑事さんに会うか病室に入ったらメールを入れて」

恵は昔から心配性だった。最後までその性格は変わらないようだ。

「それじゃあ、また電話するね」

徳子が手を振ると、恵も寂しそうに頷く。これが永遠の別れではない。しかし、徳子も

恵ももう頻繁に会うことがないくらい分かっていた。病院の中に入ってから振り返ると、

恵はまだ同じところに立って徳子の背を見送っている。もう一度手を振る。

「ああ、徳子さん」

声の方を見ると、そこには電話を掛けてきた男が立っていた。

「那賀川署の谷部です。お忙しいところすみません」

少し皺の入ったスーツを着た男が、徳子に向かって走ってきた。もう顔は覚えてる。

徳子も頭を下げ返す。

「それでもお聞きしなければならぬことがあります」

「大丈夫です。誰がここにいますか？」

徳子は、谷部の背中に従ってエレベーターに乗り込んだ。狭い箱の中で、谷部は息苦し

そうにネクタイを緩めた後、静かに言った。

「花輪加奈子さん、ご存じですか？」

どくん、と徳子の心臓が跳ね上がった。頬が引きつり、口の中が乾燥する。

「かなちゃん、大学の……いえ、近所のお姉さんでした。最近、行方不明になったと」

「伺っています。ご自宅に連絡をしたら、半年ほど音信不通だったということでした」

加奈子の話でもそうだった。それは、子供を失ったショックからだっただろう。加奈

子は何をどこまで話したのだろう。それが分からなければ、この刑事にも話がしにくい。

「そうですか。かなちゃんは……、一体どこで」

エレベーターが到着階数を知らせドアが開く。

「クヌギ山の山中です。最近は山登りをする人間も増えました。とはいえ朝夕は冷える。」

助かったこと自体が奇跡に近い」

「それが、どうして私を？」

廊下を歩いていると数人すれ違った人間が谷部に頭を下げる。

「彼女が、徳子さんと呼んでいるんだ。詳しいことは分からない、ここに運ばれたばかり

だ。時間も限られているよ」

徳子の喉がごくり、と鳴った。

「分かっていることもある。驚かないで下さい。それと、彼女を刺激するようなことは言わないで下さい」

それにも、徳子は頷いた。本当はすぐにでもここから逃げ去りたかった。加奈子にどういう顔で会えばいいのかも分からず、会いたいとも思えない。部屋の前に着き、谷部の足が止まる。

「彼女は結婚をしていました。それをご存じですか」

「……最近知りました」

その相手が公園で猫を食べていたなどとは言えない。それも写真で見かけて夫だと知ったなどとは尚更言えない。もちろん、自分の兄を殺した人物だ、とも。

「その旦那さんですが、半年前に亡くなっています」

「……え？」

あの男が、死んでいた？ 花輪元治。加奈子の夫はすでに死亡していたというのか。それなら、あれは誰だ。確かに原人の顔は、あの写真の男と同一だった。

「それは、知りませんでした！ どうして……どうして彼は死んだんですか！」

急に声を荒げる徳子に、谷部がしつと鼻に人差し指を当てる。

「彼女はまだそれを知りません。ただ、親御さんの話によると、どうやらお子さんを事故で失ったようです。それで、旦那さんが精神的にショックを受けられて」

「もしかして、自殺ですか？」

「そうです。それが、同じくクヌギ山の崖から身を投げたようで、舌も噛み千切っていました」

「舌を……」

その途端、徳子の脳裏にあのどもり混じりの原人の声が蘇る。だわげんじ……ん。あれは、ジャワ原人ではなく、花輪元治。ハナワゲンジという自分の名前をきちんと告げていたのだ。

―それって、ジャワ原人じゃない？

加奈子の声が追いかけてくる。おそらく彼女は気づいていたのだ。何回も発音し、それが自分の夫であるかもしれないことを。あの朝、加奈子を家に呼んだことが間違いだったのではない。そもそも、あの再会の日加奈子にそれを話したこと自体が間違いだったのだ。

「大丈夫かな？」

谷部の声が脳内に響く。かろうじて返事をした時には、病室のドアが開けられていた。元治は、すでに死んでいた。あれは彼の亡霊であり、怨念であったというのか。

「加奈子さん、徳子さんが来てくれましたよ」

谷部が病室に入っていく。その足下を目線で追いかけるが徳子も付いていく。

「あ、後言い忘れていました。その加奈子さんの旦那さんと一緒に、一部腐敗した死体も

見つかっています。男女一人ずつなんですが、年配のようですね。現在捜査中です」

「……男女、ですか？」

衝立の向こうに、加奈子の気配がする。

「しかも不思議なことに、旦那さんがその男の方の足首をしつかり

と掴んでいるんですよ。

死体の死亡時期もずれていると思われませんが、いや、謎が多くて現場は混乱しています」

徳子を今度は激しい目眩が襲った。畳の下に引きずられていった父と母。原人は、しっ

かりと父親の足を握っていた。その遺体は、おそらく両親だろう。

彼らは原人と赤ん坊の

呪いに喰われたのだ。

「……徳ちゃん？」

「あ、彼女はここにいますよ。それと、これをお返しします。お兄さんのポケットに入っていたお財布の遺留品です。汚れていますが」
谷部に背中を押されて徳子が一步步踏み出すと、そこには紛れもなく加奈子の姿があった。

「かなちゃん」

その後が続かない。じっと見つめ合っていると、谷部が衝立から顔を出して言った。

「それでは、十五分ほどでお願いします。私は部屋のドアの前にいますので、何かあれば呼んでください」

徳子の代わりに、加奈子が少し頷いた。足が竦んでしまう。最後に徳子の前にいた加奈子は、赤ん坊の遺体を抱えたまま鼻歌を口ずさんでいた。徳子が、加奈子の家族を崩壊させたのだ。どんな恨み言を叫ばれるだろうと考えると、両足で立っているのも困難なほどに震える。しかし、口を開いた加奈子の最初の言葉は、謝罪だった。

「徳ちゃん、いっぱい嘘付いて、ごめんね」

ベッドに横たわる加奈子は、目に涙を溜めている。頭には包帯が巻かれていて痛々しい。

そして、つい先日の徳子と同じように両腕にコードが繋がれていた。彼女は全てを分かっている。直感でそう思ったが、徳子はただ首を左右に振るしかなかった。

せめることも出来ない。だが、頷くこともできない。

「徳ちゃんに、謝りたかったの。もう、分かっているよね」

掠れた声で、少しずつゆっくりと話す。傷を埋め合えていると思っていた加奈子は、実

は徳子に全てを委ねていたわけではなかった。それが悲しくもあり、やるせなかった。

「赤ちゃんのこと……。お兄ちゃんが、ごめんなさい」

徳子は、次第に涙が溢れるのを堪えられなかった。そして、自分も謝りたかったのだと

気づかされる。

「ううん。私の方こそ、元治が。彼が……。徳ちゃんに嘘もいっぱいついて」

徳子は顔を両手で覆うと首を振る。

「一言謝りたかったの。それでは済まないと思ったけど、私も真相は知りたかった……。」

もう無理なことだと分かっていたけど」

徳子は、先ほど刑事に帰して貰った兄の遺品をぎゅっと握りしめた。財布一つ。これだ

けが兄の残したものだ。兄のアパートの物はすべて管理人に頼んで処分して貰った。他に一つも残っていない。

「私、あの子を失って生きる希望をなくしていたの。やっと立ち上がりかけた時に、徳ちゃんに会ったのよ。嬉しかった。本当に」

「旦那さんのこと……」

「彼が、自殺したのは向こうの両親に聞いたの。あの子が死んでから別居していた。でも、信じられなかった」

「私が、余計なことを……」

今でも、徳子の記憶に元治はいる。あの笑顔、あの肉を食らう姿が頭から離れない。彼と出会ったことは偶然だったのだろうか。

「彼があ公園にいるって聞いた時、徳ちゃんが言った言葉で確信を持ったの。彼だ、って……。亡霊でもなんでも構わない。あそこ

は、私たちが最後にいた家族の場所だったから」

「……え？」

そういえば、と徳子は研究室で見た写真を思い出す。あれは、あそここの公園だった。

「あの公園は、私達が実家に帰ると必ず行く場所だった。と言っても、何回もなかった。そして、奈々が死んだ場所でもあるの」

奈々。あの五ヶ月で死んだ乳児のことだ。耳を塞ぎたいのを必死で堪える。

「聞きたくないでしょう。でも、ここへ呼んだのは徳ちゃんのためなの」

「え？」

加奈子の話を聞きながら手元の財布に手をやると、ふと固い者に触れる。警察はこの中を確かめただろう。だが、ここに違和感が確かにあった。

「あの日、私たちは昼を食べて公園に行き写真を撮ったの。私たちも悪かったのよ……」

「どうということ？」

「写真を撮って家に帰ろうとした時、バックを公園のベンチに忘れてしまったの。それを、私たちは子供をベビーカーに乗せたまま、戻ってしまった」

ベビーカーは公園の入り口に置き去りにされる。その時、子供は眠っていたのだろうか。それとも白い雲を見上げていたのだろうか。

あの可愛らしい笑顔が、その数分後には壊された。

「その時ね、遠くから男女の……、といっても高校生くらいかしら。言い争う大きな声が聞こえてね。私は焦ったわ。赤ちゃんまで随分距離もあったから」

「……それって」

「恐らく、それが徳ちゃんのお兄ちゃんよ」

ぐらりと視界が揺れて、加奈子のベッドに手をついた。こんなにもはつきりと彼女は覚えているのだ。それでも、兄は逃れ続け暗い

道を彷徨っていた。

「でもね、確かにお兄ちゃんはバイクに乗って、奈々を轢いて連れ去ったの。それは間違いない。私は驚いて行動が遅くなってしまつて……追いかけることもできなかった」

赤ん坊を連いた上で、その遺体を持ち去った。人道的とは到底思えないその行動は、徳子の心を引き裂く。

「やめて！」

「聞くのよ！ でも、徳ちゃんのお兄ちゃんはある子とわざと轢いたわけではない。一緒にいた女の子が、事件を起こしたの！」
途端に、徳子も冷静になる。息だけが苦しい。

「……かなちゃん。どういうこと？ 一緒にいた女って」

ぎゅっと握りしめた手の中で、財布がまた主張する。徳子は動転しながらもそれをゆつ

くりと開く。ポイントカードがたくさん詰められたその中に、一枚だけ紙が異なるものが

触れる。見てはいけない気がした。

「その女の子が、走り去ったのをバイクが追いかけてきた。その女は、バイクの前にわざ

と、うちのベビーカーを転がしたの。まるで通せんぼうをするように。ただ、バイクの邪魔をしたかったみたい。ストッパーもつけていなかった……私の、落ち度」

それから、加奈子が我慢をやめたかのように涙を溢れさせ、ベツドに突っ伏した。その落ち度がマイナスの因果となり、加奈子は実家にも帰りにくくなった。夫とも上手いなくなったのだろう。やり直せたかもしれない。だが、その夫も自殺した。どれだけ辛い思いをしたのだろう。徳子も泣きながら、財布から違和感のある紙を取りだし、それにふと目を落とした。そして、衝撃で持っていた財布と、その入っていたビニール袋が床に落としてしまう。

「なによ、これ」

それは、また一枚の写真だった。これを見なければ良かったのだ

ろうか。その写真の日付は一年前になっている。徳子が田辺に振られた、同じ時期だ。徳子を驚かせたのは日時ではなく、そこに写っていた人物だった。都内にある有名なミュージズメントパークで撮ったものだろう。並んでピースサインをしている男は、兄の信昭だった。だが、女の方は顔がくるとハサミで切り取られている。喧嘩をしたからか、別れたからか。自分をおとしめた恨みがあるからか。とにかく、兄はこの写真の女の顔を切り取っていた。だが、その女の服装、髪型。そして、ポケットからはみ出した携帯のストラップを見て、徳子は息を呑んだ。

「……めぐ？」

そう、そこにはあの恵の携帯に付いていた、赤いクマのストラップがあった。そして、同じく兄のジーンズのポケットからは青いクマのストラップが見える。色違いの、おそろいのストラップ。二人は、徳子の知らないところで付き合い、そして別れていたのだ。恵は、何をどこまで知っているのだ。

―それなら、徳子が刑事さんに会うか病室に入ったらメールを入れてよ

恵は病院の真下でそう言っていた。慌てて窓に駆け寄る。階下を見下ろすと、まだそこに彼女はいた。病院の窓を、きよろきよろと見上げては携帯を見ていたが、徳子に気づくと、大きく手を振った。「……どうして」

―人の幸せを邪魔したくなる、その気持ちは誰でも同じだけだね。

徳子の家庭の幸せを彼女は壊したかったのか。

「待って！」

呼びかけた声は、口の中で小さく消える。恵は、徳子に手を振るとくると背を向けて通りを歩き始める。彼女のポニーテールがざらりと風に舞う。恵の小さく見える口元が、その瞬間にやりと小さく微笑むのが、徳子にははっきりと見えた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4670r/>

人喰らう原人

2011年5月30日16時02分発行